しめられた後一時旗艦其の他の大修理のために歸朝せられたが、當時露國は「バルチツク」大艦隊を派して亞弗利加の南端を迂廻して日本を擊ちに遣した。日本政府の文官連内閣連や公侯連に於ては、バルチツク」艦隊は日本を攻擊に來たのではない、たゞ示威運動をして脅かさんとするのだ、と專らの評であつた、然るに東鄕さんや伊集院氏は、必ず〳〵「バルチツク」艦隊は日本へ來るものと斷定せられた、そこで東鄕大將は我が艦隊を率ゐて我に優る敵の大艦隊を邀へ擊たんと決心され、明後日出發せらるゝと云ふ其の日に拙者は御送別に參上した、所で東鄕さんが云はれたに、『九鬼君此れは祕密であるが若し戰鬪が日本海邊で開始せられたならば、それが本戰役の終結であると思はれたい、あれをやつてしまへば足も羽も無いからねえ、敵が陸軍の方でいくら威張つてもそりや仕方があるまい、日本には敵さりやしないからねえ、』と斯う云はれたから、拙者が云うたには『東鄕さんどうです、敵の艦隊は餘程優勢ぢやありません歟、それを全滅する前にこつちがどうです』と云うたら、『そりやこつちがやられるのはどれほどやられるか判らないがねえ、これをやつちまはないうちは僕は死な無い。なあにそりや慥かだ、』と云はれるから、『東鄕さん、あんたは實に我が意を强うする事を云うて下ださる、みす〳〵大優勢な敵艦隊を前に邀へて今のあなたの大雄志に大層なことで、それは人間わざではない鬼神様

ですな』と云うたら『いゝや儀は鬼神でも英雄でもない、けれども此方は大分稽古を仕たが、彼方はあらだからねえ、そりやあれをやつちまへば露西亞の艦隊は全滅だ、さうすると無論平和にするより仕方がなからうよ』そこで拙者が云うたには『如何にも結構いかにも有難い嬉しい、どうしても今のあなたの言論は全く人間以上で、勇氣凛々戰はずして强敵を呑むの概があつて、帝國を擁護する大精神が潑剌として逆つて見えるですが、そこで果して日本海へくるでせう歟ねえ』と尋ねたら『それは判らん、そこが敵と味方との大戰略のある處で、こつちが待ちぶせして居るのに敵が旨くはづして他の方面に大發展をしたら、その一事に於て既に我れが大分負けたのである、そこが肝心かなめの大切な所である、あれが英吉利や獨逸であると又大變考へが違ふがねえ』と云はれたのであつた、此の英吉利と獨逸とを引合ひに出されたことは中々意味深長なのである、それは英人や獨逸人は大體に於て非常に怜悧で中々隅には置けないが露西亞人となると大體に於て朴訥で男兒氣で大ぼつかいな處があるのだが、そこを看破して見据ゑを付けられたのだと思はれる、尤もあとから聞くと、あの敵の艦隊が來るべき豫測の日より三日もおくれた際には心痛の色をあらはされた樣子であつたが、若しもあの大策戰がどんとはづれたら、多分東鄕さんは切腹されるのであつたらう、と云ふことをきいた、所が果して、元帥の先

見作戰の通りに少しも違はぬ大結果を見たのである、あの皇國の興廢は此の一戰に在りと勵まされた一言は、天地を震動せしむる樣な概があるばかりでない、國家の重きを以て自ら任ぜらるゝ純忠至誠の迸る所であつた、眞に此の通り明智鬼神の如くであつて、遂にその豫定の意圖の如く日本海戰の全勝を得て、帝國の安泰となつたその大勳偉績は、中々筆舌の能く盡される所ではない、此の大結果が宇內萬邦の耳目を聳動せしめたのは其の筈である、あとから拜聞すると右の日本海邊で戰鬪が初まれば云々の明哲鬼神の如き言葉は、明治天皇へも申上げられた樣子でいよ〳〵全勝の報を奉つたときに、明治天皇の御詞にも『やあ東鄕の見込通りにやつた』との御感があつたさうである。

尙其の上承はる處によると、右の進發前に東鄕さんが至尊に御暇申上げられた際に、海軍の軍令部長と海軍大臣が、共に拜謁されたるに、東鄕さんが至尊の御下問に奉答せらるゝに、あまりに剛强不屈に、それはどうあつてもやりつけます、どうしても誓つて之を擊滅し以て宸襟を安んじ奉る、と申し上げられ方があまりに强くて、人間わざでは申上げ得ざる底まで斷々乎として申し上げられたので、側の二人は恐縮して冷汗を流されたと云ふことも聞いた。まだその上に、至尊に置かせられて、實に〳〵有りがたき世に珍しき御信任を辱うして居られた事をも承はつたが、あまりに立入りすぎるから是できりをつけて置

くことにする。

又元帥に關し外國人をして深く感嘆せしめた事は澤山ある、尙ほ其の聲欵に接するのを無上の名譽として拙者に紹介を求むる外人も多かつた、けれども元帥も御獵場などへ行かれ、面接を得なかつた人もあつたが、其の希望を達せられなかつた外人達は、せめて元帥の樣な國家に赫々たる大功勳があつた世界の巨人とも稱せられる人の、住んで居られる其の常住の邸だけでも見て置きたいとて元帥の住宅を窺うて觀ると、豈に料らんや狹隘な小屋で、壯麗の風などは少しもない一小平屋のバラック建であるので驚くまい歟、驚くばかり歟、甚だ怪んで、なぜ國民はあの樣な大功勳者があんな小さな粗屋に住んで居られるのを平氣で觀て居るの歟、全體譯が判らん、と云うて拙者に質問する向きが中々澤山あつた、それから拙者の云ふには、それだけ其事だ、そこが日本王道の大價値の存する所だ、彼の覇者的成功權力などゝ云つて權元權力を推し張るのと、日本王道の謙讓、抑遜質素、恪勤で行くのとの根本的に相違がある所で、元帥の斯くの如くなるは、其の人格の崇高なる爲めであるのは勿論だが、元來日本の王道がそれであるから、純忠至誠の元帥は、渾身渾體日本王道の結晶であるのだ、と說明すると、是等の外國人には皆な能く了解が出來て、磕と手を拍つて、いかにもさう歟實に床しい事だ、とさも痛快の面色で感心感服せぬ人は一人もな

かつたのである。あの傳統的に覇者道に生長し、物質萬能など〻心得て居る是等の外人等がこんなであるから、切實に日本王道を世界に宣傳し、其の眞髓を能く了解せしめる樣に徹底的方法を執つたなら、之れに由つて世界の平和を導くことも敢て不可能ではないと信ずるのである、所が元帥自身は其の大勳偉功を何とも思はれない、驕らず誇らずと云ふ位の事ではない、謙讓抑遜、古忠臣の如く、功を立て〻其の功に居らず、質素、恪勤、平然として居られるのである、其の家屋の如きでも、あんな狹い〳〵家に居られるのはいかにも國民の恥辱だから、特に相當の居館を建設して毎週元帥が外國人等に面會せらる〻樣にしたい、との計畫が當時有志間に思ひ立たれ、先以て元帥の承諾を得んと、其の委員として拙者と、菊池大麓と、奥田義人と、其外二三人で元帥を訪問することになつて往つたが、元帥は『いやさう云ふ事は甚だ困る平に御免を乞ふ』と云はれたから、尙懇々と話すと、元帥は『そんな事になつては恥かしくて身がちぢむ樣だ』と云はれてどうしても承引される氣色が無いので致方なく右の計畫も止めになつたのであつた、さうして其の純忠至誠は終始一貫で、あの通りの質素、恪勤で謙讓抑遜で、彼の成功即ち權利などの覇者的念慮は一毫もなく、只々君國の爲めに盡すの外餘念なくして居らる〻のは、眞に日本王道の生粹で、王道活用の典範模範である、上下官民の別なく、社會上にも政治上にも、斯う云ふ風に行けば、

人心は平易平和に保たれて行けるのである、あの覇者的權利即ち力など〻稱へて驕慢な振舞で權力や金力を振り翳ざし、威壓や脅威で行くのとは、其の結果に於て全く天地雲泥の差があるのである、故に元帥に就ての此の話しは、一面に元帥の崇高なる人格を明かにするのと、他の一面に日本王道の活人典範であつて、世に覇者的權力家や金力家の驕慢な振舞を戒め、一本王道の眞髓を實際的に示すの一大好適例となるのである。

瞽女を勞はる

書肆春陽堂發行の、月刊雜誌新小說に、猪股達也（十六年間新聞記者たりし人なり）と云へる人の筆になれる、『世間縱橫記』なる長文掲載せられたるが、其の中に元帥に關する趣味深き逸事あり、彼は先づ初めに、『每日電報』記者たりし時、日本海々戰當時の露國艦隊司令長官ロヂエストウエンスキー提督の訃報を齎して元帥邸を訪ひ、之に對する元帥の感想を叩かんとして、面會を拒絶せられたるの不平を敍し、尋いで左の逸事を掲載せり。

筑波颪の寒い風が雪を誘うて、いつしか東京は師走に這入つた、宮內省の主獵寮では、每年

雪の降る頃となると、天城山の御獵を承るのが例年の吉例であつた。この年（明治四一年）の御獵は日露戰爭の殊勳者のために催されたやうなものであつた、東鄕元帥も奉天戰の黑木大將も、日本海の上村大將も參加することになつた、そこで評判が非常に高くなつたこれ迄新聞記者はこの御獵に出かけたことは無かつたが、軍人萬能時代であつた爲め、社では變つた材料を得ようと、私を特派することになつた、そこで私は早速旅裝を整へ、御獵の根據地たる湯ヶ島溫泉に行つた。

御獵は其の翌日から始まつて三日目になつた、川を渡り、部落を通つたりして、湯ヶ島から半里以上も行つたと思つたところに出た。そこは二十軒ばかりある部落であつた　先頭にあつた米田主獵頭は、『こゝらで一服しようではありませんか、』と立止つた、一行は思ひ〳〵の石を探して腰を下しながら休息した、前には小さな川が流れてゐた、その川に丸太をたつた一本渡した橋がある、その橋を今しも三味線を肩にした年をとつた瞽女が長い杖で足許をさぐりながら、危げな足つきで渡らうとしてゐる。はたで見てゐると氣がはら〳〵する、一歩あやまれば川に落ちるのだ。

『あぶない！』誰もの頭に斯ういふ心配が湧いたが、それだといつて人に先んじて之を介抱してやらうといふ勇氣のある者もない、冷淡にかまへてゐるわけでも無ければ、相手の

瞽女が餘りに穢いから遁げてゐるわけでも無い、お歷々の前に出過ぎた行爲に出るのを遠慮してゐるのである。

その時瞽女の困つてゐる狀をぢつと見てゐた東鄕元帥は起ち上つてつか〳〵と瞽女のところに行つたと思ふと、「あぶない〳〵俺が渡してやらう」といひながら、垢で眞黑になつた瞽女の穢い手を引いて、懇切に渡してやつた。

此の不意の出來事に、一行はいさゝか面喰つた、だが一世の名譽を擔うてゐる元帥と瞽女！その對照が面白いのと、二人の恰好が可笑かつたので、一行は思はず手をたゝいた。

「よく似合ました」中には斯うした失禮な半疊を入れる不屆者もあつた、瞽女は此の深切者が東鄕元帥であるとは夢にも知らう筈が無い、『どうも有難う御座います』と簡單に禮を述べて、次の村の方へとぼ〳〵と去つた、元帥はその影が見えなくなるまで見送つて何事も云はなかつた。

物に感じ易い私は、東鄕元帥の斯うした優しい行爲に對し、すつかり感激してしまつた、そして人類愛はこゝにあるのだと思つた。

『この優しさがあるのに、元帥は何故ロヂエストウエンスキー提督の、凶報に對する哀悼のことばをして吳れなかつたのかしらん、』私は前日の面會謝絕の苦い經驗を思ひ出さず

にはゐられなかつた、そして當時から元帥に對して面白くない感情をもつてゐたのが、此の一事によつてすべてが打ち消されてしまつた、そこで石佛のやうに沈默をつゞけながら、とある石の上に腰を下してゐる元帥のところへ行つて、前日の一件を概略話してから『その時は全くあなたを恨む許りか、血も涙もないわからずやと思ひました、ところが只今の瞽女を助けた溫情溢るゝばかりのあなたの御厚意をまのあたりに見まして、あなたにも深刻な人間味があることを、今始めて會得することが出來ました』と附け加へた、すると潤のある眼で私を熟づと瞶めてゐた元帥は、默つたまゝ手をさしのべて私の手を確と握つた、その手は溫かつた。

這も亦傳ふべき佳話ならずや。

用意周到

東宮御所內に、東宮御學問所御設置當初の事なりき、未だ同所專用の電話引かれざる際なりしを以て、侍從の詰所にある電話を借りて所用を便じゐたりしが、或る時、海軍省より編者に電話かゝりし由、仕人傳へ來りければ、心急くまゝに、常に御學問所員の通路と定められたる廊下よりも、別の捷路を通りて電話を濟ませ歸り來しに、元帥子爵に向ひ『貴方は今平素と違ふ廊下を行つたね』と言はれたれば『嘘、急ぎましたので』と答へしに、元帥は言葉靜かに『それは不可ぬ、我々の通る道は定められてあるのだから縱ひ急を要する時でも、それを無視するのは宜しく無い、御學問所員たる者は、常に斯ういふ些細な點まで注意せねばならぬ、殊に貴方は御學問所の幹事であれば、一層その邊を嚴格に守ることが大切ぢや、凡て規則などゝいふものは、これ位の事はよからう、と疎にするやうな所から亂れるものであるから注意に注意を加へて、範圍を越さないやうになさい』と警められた。

細心

大正六年一月、沼津御用邸に伺候中の元帥は、同月十三日の夕刻子爵と共に附近の松林中を逍遙せしに、偶々側の松樹に一頭の馬繋がれゐたり、子爵何氣無く、近く離れて其の後方を通らんとせしに、元帥背後より『馬の側はなるべく離れて通るがよい』と注意し、自身も道

の悪きをも厭はず迂回して通過せり、何事にも細心なること斯の如く、戰時の豪膽なる場合と對照して、益々感服せざるを得なかつた。

謹書御物中に選入せらる

大正十年三月一日東宮御學問所閉鎖の際、殿下の台命により濱尾東宮大夫は記念として左の二文を揮毫し奉るべき旨を元帥に傳へたり、即ち其の一は、

皇國興廢在此一戰各員一層奮勵努力

他の一は

接敵艦見之警報聯合艦隊欲直出動擊滅之本日天候晴朗而波高

云ふまでも無く、前者は日本海々戰の當初、當時の聯合艦隊司令長官たりし元帥が、麾下一般に示して之を激勵したる信號の文句にして、後者は同海戰開始に先だち大本營に發電せる劈頭第一の報告なり、然して右揮毫奉呈の御内意に恐懼せる元帥は、同年四月二十一日身を淨め衣服を改め、縦六尺、横四尺の大絹に、前記の二文を謹書せしが、側に居たる子爵を顧み

『這は捺印して奉らう、恐縮だが貴方一番大きい印を捺して下さい』と依頼せり、仍りて子爵は即時捺印したる上、元帥の代理として之を東宮御所に持參し納め奉れり。越えて同年九月三日殿下歐洲より御歸朝あらせられたる際、東宮御所内なる御座所の御掛物は、實に此の雙幅なりし由なるが、大正十四年に至り御物の中に選入せられたりと漏れ承はれり、洵に元帥の光榮大なりと云はなければならない。

無限の感激

大正十年九月三日、歐洲より御歸朝の鶴駕を迎へ奉りし夕、編者、元帥を其の邸に訪ひ祝詞を述べしに、元帥は形を正し『御召艦香取に伺候し、御機嫌麗き尊容を拜した時は洵に』と許りにて言葉途切れしが、やゝありて更に『洵に有難くてなあ！』と續け兩手を膝に端然としてさし俯けり、子爵は三十年來、未だ曾て此の時ほど元帥が感激に滿ちたる面色を見たることは無かつた。

愛重の刀劍

皇國の英雄は孰れも刀劍を愛重す、蓋し我が國にあつては、刀劍を物質以上に神聖視し、之を以て武士の魂にして降魔破邪の威德あるものとなせばなり。東鄕元帥亦此の例に漏れずして深く刀劍を好み、其の手入れの如きも自ら行ふを常とし、決して之を他に委ねず、從つて家傳のものと、對露戰役凱旋當時諸方より贈られたるものとを合し、許多の刀劍を所持せらるゝが中にも、家寶として最も秘藏する名刀四口あり、固より骨董など玩弄するを好まざる元帥なれども、此の四口の刀のみは、武門の面目として珍重し、時々鞘を拂つて三尺の秋水に英氣を養ふ際の莊嚴さは、肉身の不動明王を見る如き心地すと云ふ、乃ち爰に其の名刀の由來を略記し、以て元帥が嗜好の一端を窺ふべし。

其の一、三條吉則（同名數人あり、恐らくは長久年間の方なるべく、昭和五年を去る八百八十餘年）

長さ二尺二寸、在銘にして、差表には劍卷龍、差裏には梵字を刻し、御紋散し太刀造となり居れり、這は大正十年東宮御學問處閉鎖の際、特別のお思召により陛下より賜りたるものなり。

其の二、一文字吉房（御番鍛冶となる、建保年間の人にして昭和五年を去る七百十餘年）

長さ二尺二寸、在銘にして軍刀造となり居れり、這は元帥が聯合艦隊司令長官として旅順口の露國艦隊と對戰中、東宮殿下より賜りたるものなり。

其の三、粟田口國安（御番鍛冶となる、正治年間の人にして昭和五年を去る七百二十餘年）

長さ二尺二寸五分、在銘なり、這は元帥が凱旋の際、松方正義侯が左の和歌を添へて贈りたるものなり。

栗田口越えゆく道の朝霧は
深くも匂ふ國安の太刀

仍りて此の刀を『朝霧』と呼ぶ。

其の四、水戸中納言齊昭（景山と號す、勤王の志深く英邁譽高し、萬延元年薨す、昭和五年を去る七十一年）

長さ二尺三寸、忠に菊を刻す、這は元帥が凱旋の際、德川慶喜公自ら之を携へて元帥を訪問し、親しく贈りたるものなり。

ジョッフル元帥との奇遇

大正十年東宮殿下佛國を御訪問遊ばされたるに對し、佛國政府は、世界大戰爭の際、さしも强猛なる獨逸の大軍をマルヌに擊破して、赫々の名譽を博せる雄將ジョッフル元帥を、答禮使として我が國に派遣せり。是に於て同元帥は大正十一年一月二十日來朝入京し、翌二十一日宮中にて賜餐の御沙汰ありしが、其の際同元帥は殿下に向ひ奉り『外臣は今より三十八年前卽ち千八百八十四年（我が明治十七年）佛、淸戰爭の際、工兵大尉として遠征軍に加はり臺灣雞籠攻擊に從事し之を占領せしが、偶々同港に觀戰の爲め來泊せる日本軍艦の將校をクルベー提督の命により一分隊の兵にて護衛しつゝ、砲臺其の他に案內致したること候』と言上せり。之を陪聽し居たる宮內大臣子爵牧野伸顯は、同月二十五日佛國大使館に於ける晩餐會の際、列席せる東鄕元帥に之を物語りしに、元帥は莞爾として『然りとは奇遇なり、實は其の時の日本將校とは恁く云ふ老生なりき、老生は當時天城艦長として南海に派遣せられ、松村淳藏少將の麾下にあつて佛淸間の戰況視察を命ぜられ、佛國艦隊の跡を追うて福

州方面より臺灣雞籠港に至り、クルベー提督を訪問し、陸上の要塞占領砲臺等を視察するの許可を請ひしに、同提督は之を快諾し、翌日陸上に案內者を出し置くべき旨を約されたれば乃ち其の言に從ひ翌日上陸せしに、一陸軍將校若干の兵を率ゐて待ち受け居り、懇切に案內し呉れたるを以て、砲臺其の他を十分視察することを得たり、（此の顚末は、前卷の第二編第四章「南淸廻航」中に詳なり、參照ありたし）然るに當時の案內者が、ジョッフル閣下ならんとは思ひも寄らざりし』と有繋に沈着なる元帥も、轉た今昔の感に堪へざる如く見えければ、牧野宮內大臣も其の奇遇に驚嘆し、御臨席の東宮殿下に言上せしに、殿下もいたく興がらせ給ひしが別してジョッフル元帥の驚喜は譬ふるにものなく『閣下なりしか?!、閣下なりしか?!』と繰り返し、東西の兩名將改めて握手せるは、如何にも趣味深き光景なりしと云ふ、恁くて此の一事は端なくも、ジョッフル元帥が何よりの土產噺とはなつた。

日蓮宗門の感謝

大正十一年十月十三日、日蓮聖人に、立正大師と大師號追賜の御沙汰あるや、日蓮宗門の師

素は、元帥の斡旋與りて力ありしと爲し、同宗九派の管長連署して、聖人の記念鑄像に左の感謝狀を添へ元帥に贈呈した。

今般日蓮聖人大師號追賜相成候に付ては　聖旨の存する所を畏み愈々益々精進し門末を督勵して民心教化に盡瘁の覺悟に有之候

右追賜に關し貴臺の御高配を蒙り候儀は永く門末一般感激措かざる所に有之候依りて立正大師の鑄尊像を呈上し謹みて感謝の誠意を表し候　敬具

大震災を免かれし元帥邸

大正十二年九月一日午前十一時五十八分四十秒關東一圓大震災ありて、帝都も其の厄難を被り、續いて市内八十餘箇所より火災起りしが、折節兩陛下は日光に行幸啓中にて、攝政殿下は赤坂東宮御所に御座ありたり、（地震襲來の際は宮城に在せり）仍りて元帥は、餘震繼續して人心恟々たる中を、早くも同御所に馳せ參じて御機嫌を奉伺し、六番町の邸に戻りしが此の時市中の殆ど全部は火の海と化し、炎々たる猛火は四方八面に亂れ狂ひ、楠比せる大厦

高樓を、片端より舐つくしつゝありしが、六番町よりも龍卷の如き大火柱空に逆り、見る〳〵うちに其の附近を一掃して、今や元帥邸に崩れかゝれり、それと見て元帥は、咄嗟に家族一同を他に避難せしめしも、自身は泰然として踏留り居たりければ、人々危險を慮り、切に避難を勸めしも、元帥は肯ぜずして其の人々に向ひ『苟くも一家の主人たる以上、自家のみならず他に對しても責任あるものにて、危險の程度も究めず周章狼狽遁げ出す如きは予の同意し難き所なり、予は予の信念に從ひ行動すべければ、暫く任せ呉れよ』と答へ、折しも諸方より駈けつけたる出入りの者共、及び庭内に避難しをれる近所の人々を指揮し、凡ての雨戸を閉鎖し、平素より不慮の火災に備ふるため、喞筒を仕掛け四斗樽と長管とを置きたる三箇の井戸を使用し、數十の「バケツ」を屋上に運ぶなど、防火の準備周到を極めたり、これに續いて九名の壯漢（何れも元帥の恩顧を受けし人々にて其の中の一人の如きは、消防夫にて神田に住居し、自家の類燒を餘所に見て馳せつけたるものなり）輕裝して猿猴の如く屋上に飛び登り『東郷様の家が燒けるものなら燒いて見ろ』と毒蛇の舌と閃きかゝる炎に向ひ雄叫なしつゝ、火粉も飛風も何んのものかは、手に手に水に浸せる半纏振つて、燃付く飛火を打消し〳〵、奮闘するさま目醒しなんど云ふ許りなく『大將どうでげす』『ム偉いぞ』勇みの阿兄と大勇の將軍、相呼應する勢には、さしもの劫火も敵し得ず、周圍の板塀より、前項記載の記念の門、さては玄關前

の自動車小屋まで燒きしに拘らず、遂に邸宅を燃すこと能はず、絶海の孤島そのまゝに、之を殘して他方へと荒れゆきぬ、然れば此の奇蹟を目前に見たる人々は、何れも不思議の感に打たれ、淺草の觀世音と併稱し、鎭火後當分は、見物人黑山の如く、拜みゆくものさへ多かりしと云ふ、洵に元帥の德望、能く他をして危險を冒してまでも奮勵努力せしめし事と、平素より萬端の用意周到なりし事とは、吾人に大なる教訓を與ふるものにして、『天は自ら助くるものを助く』の金言、愈々我を欺かざるを覺えしめぬ。

二七の不動尊

元帥邸の附近に、二七の不動尊とていと繁盛せる御堂ありしが、白法隱沒の末世には、降魔の利劍も鈍りしか、又は宿世の約束なりしか、九月一日、大震災後の劫火に罹り、御堂は果敢なくも烏有に歸しぬ、其の堂守は、田邊戒嚴と云ふ七十餘歲の老尼なりしが、信念頗る堅固にて御堂危ふしと見るや、自身の物は何一つ取出さず、一向に本尊を負ひまゐらせて遁れ出で、彼方此方と、一夜其の附込を彷徨ひ歩き翌朝に至りしに、元帥邸のみ不思議に燒殘りしを發見

しければ、我にもあらずよろめき入り、直接元帥に會うて、遭難の一伍一什を告げ、暫時軒下なりと借用したき旨を述べしに、之を聽取せる元帥は、深く其の信仰の堅きを賞め稱へて何くれと勞り慰め『屋內何處にても、あなたの滿足する場所に安置なさい』と快く承諾しければ老尼は感涙に咽びつゝ『御佛の爲めなれば、お言葉に甘えて、それではお玄關を拜借致します』と玄關正面のいと淸淨なる一室に本尊を安置し、朝夕の勤行怠りなく、恁くして遂に二ケ月を其處に過ごすに至りぬ、其の間元帥夫人を始め家族一同、每日供物を取換へ、蠟燭を絶やさずして老尼を扶助し、又元帥は、不敬なからしめんが爲め、一切玄關よりの出入を禁じ、內玄關を以て之に充つる等、優情至らぬ隈もなかつた。

震災後、子爵の初めて元帥邸を訪ふや、かゝる事情のありとも知らねば、平素の如く玄關よりおとづれしに、見慣れぬ老尼突如として物陰より現れ、じろ〳〵と子爵を見下し、訛のある言葉にて『大將樣に御用か、それとも御參詣か』と眞正面より浴せかけられ、何が何やら勝手が判らず、一種の不安にさへ襲はれければ、此の怪尼の性體看破らんず覺悟にて、詰と其の面を瞶れば、色黃ばんで頰肉だぶつき、しよぼ〳〵眼に褪せたる唇など、不氣味さ耐らねば將に大喝を喰せんとせる折しも、令嗣夫人橫合より出で來たり、『何うぞ此方へ、』と直ちに子爵を庭口に導き、緣より座敷へ案內せられたり、恁くと見たる元帥及び夫人は、莞爾として子爵

を迎へ、互に無事を祝し、一應の挨拶了りて、彼一語、我一語、震災當時の狀況を話し合ひ、其れより共れと移りゆきしが、折を見て子爵は、玄關に居る老尼の上を訊ねしに、元帥は打頷きて、之に關する顚末を物語り『何にしても七十の尼さんが、重い不動樣を、一晩中擔ぎ通して燒かなかつたのは偉い、會つてごらんなさい、面白い人ぢや』と令嗣夫人をして、子爵を老尼に紹介せしめたり、仍りて子爵は、先刻の無禮を詫びたる後、種々信仰上の談話を交へ『あなたは最も意義ある避難所を發見しましたね、大天災の際、東鄕元帥邸に御遷座あつたと云ふことが、今後一層此の御本尊の御威德が顯れ、益々信者が殖るでせう』と云ひしに、老尼は嬉し氣に『管長樣からも賞められましたよ……だが、大將樣は全く凡人では無い、何にしても有難いことぢや』と念珠つまぐりぬ、恁くて元帥の玄關には、爾後二ヶ月間、常に賽錢のお捻り幾箇か散らばりをるの珍現象を呈した。

越えて翌十三年一月に至り、子爵は『東鄕元帥と不動明王』と題せる一文を草し、之を某雜誌に揭載せしに、幾もなく、戒嚴尼より懇篤なる感謝狀至り、舊の場所に假御堂出來せるを以て、御本尊を元帥邸より遷し參らせたること、某雜誌上にて拜見したとて、當時の狀況を訊ね來るもの多數なること、同文中に記せる『東鄕元帥を神格化して觀ると不動明王を聯想するし、飜つて不動明王を人格化して觀ると東鄕元帥を髣髴し來る、卽ち兩者は二にして不二

なる妙用を示してゐる』との一節には、管長樣も同感であらせらるゝと云ふこと、信者は益々增加すること等を報じ、猶ほ此の上とも、御本尊の御威德顯るゝやう御盡力の程賴み入ると結びてあり、子爵も何となく歡喜を覺え、其の書面を元帥にも示して、共に法悅を味はひしが、十四年六月十二日、元帥は戒嚴尼の切願を納れ、御堂の側に楓樹の手植をなし、爰に愈々意味深き名所一つ番町に加はつた。

見るに忍びず

大正十年華府會議に於ける軍縮の結果、我が多數の戰艦も廢棄に決し、同十三年の夏季に『安藝』、『薩摩』等の數艦は實彈射擊の標的となりて擊沈せらるゝ事となりたるが、平素は軍事の實驗とあれば、何事を措きても見學するを例とせる元帥が、一度も之に臨まざりしかば某將官不審に思ひ、其の譯を訊ねしに、元帥慨然として只一言『見るに忍びんからぢや』と答へたり、之を傳聞せるもの、概ね其の武士的眞情に感服し、洵に花も實もある名將かな、と今更の如く稱へ合ひぬ、然るに幾程も無く、元帥の許に一通の無名の書狀屆き、元帥の此の態度を

以て、士氣を怯弱ならしむるものなりと散々に批難しあり、元帥之を子爵に示し、偖曰く『これだから世の中は面白い』と『面白い』の一語に無限の妙味あるを覺ゆ。

山色連天

大正十四年の和歌の御題は『山色連天』と仰出され、特に元帥には、詠進に關し入江御歌所長より御思召の程を傳ふる所あり、是に於て元帥想を練り思を凝し、左の一首を謹詠せり、

あさ日かげかゝやくまゝに空たかく
そひゆるみねも色まさりけり

秩父の銅像

埼玉縣入間郡吾野村に鴨下清八といへる奇特の老人あり、元は一介の樵夫にて、幾十年を

深山に暮し居たりしが『正直の頭に神宿る、』との諺實現せられしものか、何時とはなしに御嶽神社を信仰して、熱烈日々に加はりゆく其の眞心を、神明納受ましゝてや、種々の預言不思議に的中するより、近隣の人々も奇異の感に打たれ、同神社に土地を寄附するもの多く、遂に一公園を爲すに至つた。

此の翁豫てより、東郷元帥を崇敬し、日本海々戰當時の如き、丹誠を抽きんでゝ、皇軍の勝利と元帥の無事とを祈願せしが、其の前後より、前記の公園に、元帥の銅像を建設するを以て、最も神意に適ふものなりと直感し、乃ち獨力其の目的を達すべく決心を固め、爾來二十年間孜々として全力を之に注ぎ、次第に援助者も出來し、後援會も組織せられたるを以て、翁は元帥の許可を得べく昨年大正十三年始めて同邸を訪問した。

是より先き、元帥の德を慕ひ、其の銅像を建設せんとして承諾せんとして承諾を得たき旨申出たるもの前後殆ど二十箇所の多きに及べり、然も謙讓なる元帥は、悉く之を謝して許さじりければ、國内にて其の之を有するは、元帥に交渉せずして、隨意に建てるもの二三箇所あるに過ぎざりき、然れば今鴨下翁の懇請も、例によりて元帥の謝絶する所となりしが、決心巖の如き翁の、何云これに怯むべき、二回三回四回五回、許可せられずば百回ものかはとの意氣込みにて、元帥邸の玄關に兩手をつき『國家の爲め、社會の爲め、將た又地方風教の爲めと

お察しなされたく、もし何うしてもお許し下されずとあらば、それは私の誠意が屆かぬので第一神様に御申譯なければ、これが屆くまでは、御迷惑ながらお邸に日參致します』と、涙と共にかき口説きしかば、さしも頑强に拒絶し居たる元帥も、終に翁の熱誠に動かされて、銅像建設を快諾するに至りぬ。然れば翁は飛立つ許りに打喜び、益々東奔西走し、十四年四月十七日を以て、其の除幕式を擧行する迄の運びとなり、其の趣を元帥に報告し、且つ當日式場に臨まれんことを切願せり、從來他よりの招待に應ずる際など子爵より元帥に勸めて同行するを常例とせしに、今回は反對に、元帥親しく電話に就いて子爵に、『一緒に行つて見ようぢやあるまいか』と、勸めらるゝこと頗る切なりき、以て如何に翁の誠意に感じたるかを推知するに足らう。

斯くして何方へも出席嫌ひの元帥も、子爵等十數名（故柏屋衆議院議長、堀内陸軍大中將等も同行せり）と共に當日の銅像除幕式に臨み、左の如き謝辭を朗讀した、

茲に鴨下清八君の熱誠なる御盡瘁に依り、不肖平八郎の銅像成り、本日を卜して其の除幕式を擧行せらる、不肖自ら省みて恐縮に堪へざるなり、平八郎唯一誠以て君國に報ゆるを念とすれども、不德にして何等貢獻する所あらず。然も反つて此の盛擧を辱うす、仍て將來益々本分を盡さんことを期す、聊か所感を述べて以て謝意を表した。

猶ほ記念として、式後銅像の側に小松樹をさへ手植し、又銅像の臺石には、財部海軍大臣『嗚呼名將』の四文字を揮毫し與ふるなど、翁の素志は十二分に達しければ、只管感涙に咽び公園をば東鄕公園其の中に新築せる青年集會所を東鄕館と命名し、神前に其の報告祭をも執行した。

思へば不思議の因緣なるかな、既に前卷第一卷第一篇第二章に敍したる如く、元帥の遠祖は武州秩父の支族なる澁谷庄司重國の孫實重なるが故に、秩父は元帥にとりて宗家の故鄕とも稱し得べく、斯かる由緒ある地に、其の銅像建設せられしことは、元帥をして、一層深き感慨に打たれしめたるや疑ひない。

乃木家との關係

前節に於て、元帥の遠祖に言及したるにつけ、端なく連想せられたるは、乃木家との關係である。

海の東鄕、陸の乃木とは、對露戰役當時、世界を擧げての流行語にして、此の二大英雄が、時を

同うし國を同うして生れ出でたるは、各國人をして驚異の眼を瞠らしむる所なりき、加之此の二英雄の祖先が、親族關係にありたりとせば、世人は寧ろ傑作小說に對する如き好奇心を以て之を聽かんとするなるべし子爵嘗て、乃木將軍の崇拜家なる鳥取縣の坂尾正己より兩家の關係を告げられたるを以て、乃ち文學士大森金五郎の著「武家時代之研究」第一卷を繙き、東郷家の遠祖澁谷氏と、乃木家の遠祖佐佐木氏とに關し、左の一文を得た。

此に佐々木秀義の事を附記せんに、初め秀義は平治の亂後清盛の專横なるを厭ひ、姨夫なる藤原秀衡に依らんとして出發し、途次相模を過ぎりしに、澁谷庄司重國は秀義の勇敢なるを愛して、之を止め、其の女をもつて之に妻はせ、後義清を生む。秀義が先妻の子、定綱、綱高、盛綱、高綱等は、皆賴朝に仕ふ。獨り義清は大庭景親の妹を娶りて、平氏に屬せり。澁谷庄司重國は、斯かる關係あるを以て賴朝擧兵の事あるや、その身の處置に困却せしが如し。やがて石橋山の戰起るや、佐々木の諸子は賴朝に屬せしに、重國は義清を率ゐて、大庭景親に屬せり。されども猶ほ賴朝及び佐々木の諸子の身上に關し、同情を寄せざるにあらず。されば大庭景親が、重國に命じて佐々木の妻子を捕へしめんとするや、重國は理を說いてこれを聽かず、やがて家綱、盛綱高綱等が夜に乘じて筥根山を脫し、重國が澁谷の館を訪ふや、重國は內心大に喜びながらも、世上の聞を憚りて、倉庫の中に招き、膳を進めて戰狀を尋

ねたりと云ふ。

兩英雄の遠祖は、實に斯の如く親戚の關係ありしものにして、東郷元帥の遠祖たる次郎實重の叔母は、乃木大將の遠祖たる佐々木高綱の繼母たり、乃ち左の如し、

澁谷重國——光重——實重（東郷家遠祖……東郷元帥
　　└女（秀義後妻）

佐々木秀義——高綱（乃木家遠祖）……乃木大將

嗚呼これ偶然の結果か、將た微妙の天意の存するものありて然るか、孰れにもせよ趣味深き話題にあらずや。

櫻花を好む

元帥は藤田東湖の『正氣歌』中にある『發しては萬朶の櫻となり、衆芳與に儔しがたし、凝つては百錬の鐵となり、鋭利鋒を斷つべし』の句を愛誦し、他より揮毫を依賴されたる場合、之を書したることも數次あり、既に數年前、子爵が雅號の撰定を懇請せし際にも、「鐵櫻」と付

けられたるは、此の句に胚胎したるものなるべく、多くの花木中最も櫻を愛好する如く思はるゝが、偶然にも、遠祖の祖父たる澁谷庄司重國に緣ある櫻の名木が、東京に現存するも奇ならずや。

麹町霞ヶ關の鹽見坂に、鹽見櫻と呼ばるゝ名木ありて年毎に春を宿し、日本魂來て見よかしとばつと開きばつと散る勇ましさは、梢に殘す一瓣もあらず、加之老幹苔むして、裏に七百餘年の歴史を藏せり、偖其の由來を尋ぬれば治承五年の冬かとよ、澁谷庄司重國は、數多の列卒を引率れて、麻布の鄕に狩競しつゝ、行き〳〵て霞ヶ關なる岩窟の前に出でぬ、此の中にや獲物居らんと、枯草集めて燒きたてんと爲したる折しも、岩窟の中より一疋の白狐飛び出で空に向つて數丈の高さに氣を吹きあぐると見る間に、凝つて紫の雲と變じ、其の中に忽然として十一面觀世音菩薩現れ給ひぬ、重國奇異の思ひをなし、菩薩を禮拜して其の場を引揚げしが、餘りの不思議さに、其の趣を鎌倉なる賴朝の許に注進に及びぬ。然れば賴朝も感ずる所あり、爾後此の附近にては殺生を禁じ、一社を建てゝ霞山稲荷大明神と崇めしが、後更に神供三十貫文の田地を寄附し、其の神田の畔に櫻樹を植ゑて境界とし、其の地を櫻田と呼べり前記の鹽見櫻は、實に此の櫻樹の中の一本なりと云ふ。又此の稲荷神社は、後年遷座せられて現に麻布櫻田町にあり、靈驗灼然なりと傳へらる。（鹽見櫻の由來は、雜誌「みつこし」の記事に

據る）

日本海々戰追憶の「ラヂオ」

大正十四年は、日本海々戰ありてより滿二十年に相當せるを以て、其の記念日たる五月二十七日、「ラヂオ」に依りて追憶の一端にても話されては如何にと同月初旬財部海軍大臣より元帥に懇請ありしが、元帥は慣れぬことにてもあり、且先頃來少しく風邪の氣味なればと固辭されければ、然らば何人かに感想を口授し、代りて放送せしめられたしと、重ねて交渉ありたる結果、十三日に至り元帥子爵を招致し『貴方行つて下さらんか』と懇の委囑あり、仍りて子爵は『承知しました、では御追憶の大體を口授下さい、それを筆記して持參放送致しますから』と答へて返辭を待てり、元帥にして若し否とあらば、子爵も其の儘引退るのみなれば、これには有繋の世界的沈默家も、其の本領を押通すこと能はず、首肯いて暫時默考したる末、『別段改めて言ふ程の事も無いぢや……唯思つた事を少し言ふが、談話が下手ぢやから貴方直して下さい』とて、ぽつり〳〵其の意見を漏されたり、子爵乃ち之を筆記し、偖當日芝

浦の東京放送局に至り、元帥に代りて左の放送をなした。

大元帥陛下の御稜威と、將卒の忠勇と、國を擧げての愛國心とに由り、海戰史上空前の大捷を得たる日本海々戰も、既に二十年の昔となりましたが、追憶すると、當年激戰の狀歷々として、今尙ほ目前に見るの心地が致します、殊に忘れられないのは、此の海戰に於て、生命を君國に捧げた戰友の上で、皇國を無窮に守護しつゝある其等の英靈は、勿論今も嚴として我々の行動をも監視して居らるゝでありませう、私共が本分を盡す上に於て、平時と戰時との區別は御座いませぬ、輕重も御座いませぬ何時如何なる場合にても、唯々至誠を以て一貫すべきのみで、其の他を顧るの必要は更にあるまいと思ひます、斯くて我が軍艦旗をして、益々光輝を放たしむると同時に、世界平和の保障たらしめてこそ、此の海戰に、或は生命を捧げ、或は痛く傷ついた僚友達に、始めて向ける顏があると思ひます、其れと共に今一つ忘れてならぬことは、前にも申しましたが、當時國民諸君が、義勇奉公の大精神を活現して、燃ゆるが如き熱誠を示されたる一事でありまして、出征して居た當時は勿論、今より回顧致しましても、眞に心强い感が湧き起ります、私は此の國民的大精神は、澎湃として永久に漲り、以て御國の守護たるべきものと確信致します。

元帥の追憶談は之にて終りしが、次いで編者は元帥の同意を得て、更に海戰の大要より、二

三の壯烈談を放送したる後

更に此の海戰を背景として、我が國民の品性の高いことを、最も明白に證據立てた一話を中上げたいと思ひます。

日本海々戰後間も無い時でありました、世界第一の紳士國を以て自任して居る某國の武官が、我が幕僚の一人に向ひ『先年自分の國が征討に向つた某戰役では、軍機の漏洩が何うしても防がれず、實に困つたが、貴國では如何なる措置を取られて、斯うも見事に祕密が保たれるのか不思議で耐まらない』と申したことがあります、外人が不審がるのも尤もで、我が聯合艦隊の全部は、明治三十八年の一月から長い間、朝鮮海峽に據つて居たのでありますから、或る程度までは、各新聞社等にも其の消息が判つてゐたやうでありました、然るにも拘らず、一行も之に關する記事を揭載した新聞は無かつたのであります、此の一事は、如何に我が國民の品性が、國家の大事に當つて向上せらるゝかを證明したもので、眞實の擧國一致であると、私は限りなき床しさと賴しさを覺えたのであります。

尙ほ今一つ私にお話することをお許し下さいませ。

其の當時大陸の或る方面の我が居留地では、大海戰が始まつたと云ふ報知に接すると同時に、御婦人方は、孰れも短刀なり剃刀なり、双物を抱いて勝敗の結果を待ち、若し我が艦隊

が敗けたとの報知があつたなら、夫れから起るべき或る脅迫に對し、自害して日本婦人たるの節操を完うしよう、と覺悟したとのことであります、何んといふ緊張した場面でありませう、私は此の事を聞いた時、何とも彼とも言ひやうの無い悲壯の感に打たれたのであります。

東郷元帥は、皇國の興廢此の一戰にあり、と部下を激勵せられて居ますが、大觀し來ると、我々國民一同が、皇國の興廢は、各自がそれ〴〵の職責を、盡すと盡さゞるとに因るとの覺悟を以て、常に業務に忠實にあられたなら、直接なり間接なり、外國との平和的競爭に、大勝利を得らるゝこと日本海々戰と同樣なるべきは、私の確く信じて疑はざる所であります。

と所感を述べぬ。

尋いで翌二十八日、財部海軍大臣は、朝野の名士三千名を軍艦に招待し、東京灣にて模擬海戰を演ぜしが、其際東郷元帥の揮毫せる『治而不忘亂』（易經繫辭下傳にあり）の印刷物を、記念として來賓に贈りしが、後畏き邊りの御内命を拜し、之を獻上するに至つた。

賣り申す

近來元帥が、特別の關係あるものゝ外は一切揮毫に應ぜざることは、既に前に於ても記載せる所なるが、それにも拘らず、之に關して除外の特權（？）を有する一老翁あるこそ面白けれ、此の翁は元帥と鄕里を同うし、加之竹馬の友なりければ、元帥が勳功第一の重臣となれる今日にても、翁と爾汝の交は昔時に變らず訪問れらるゝ毎に歡び迎へ、幼時の事など語り合ひては、時刻の移るをも忘るゝこと往々ありき、然るに此の翁訪問すれば、必ず數葉の揮毫を請ふを例とし、元帥も亦快く承諾し居たりしが、或る時揮毫の際側にて一心に墨汁磨り居たる翁を顧み『貴方は何時も澤山書かせるが、一體誰れのナ？』、と質せしに、翁は言下に『私のゞはゞ』と答へたり、『悉皆ナ？』、『はい』、『如是澤山如何するナ？』、其の時翁はジロリ一瞥を元帥に投げて、一段聲を張り上げ、『賣り申すが！』、元帥微笑して『然うなア！？』、其の儘すら〳〵筆走らせて亦四五枚！。

軍艦三笠の保存

ネルソン提督の旗艦として、英國が海軍史上の花と誇る「ヴキクトリー」號にもまして、皇

國に重大なる意義を呈しをれる軍艦三笠――明治三十七八年の大國難に當り、終始東鄕大將の旗艦として、前には露國の第一艦隊を旅順口に擊破し、後には同じ第二第三艦隊を日本海に殲滅して、大將と共に赫々の威名を擧げたるも――大正十年華府會議の結果軍縮の犧牲に供せらるゝ事となり、吾人をして『狡兎死して走狗烹らる』の嘆あらしむるはものかはあはれ東鄕元帥の胸中を察すれば、轉た一掬の涙なき能はざるなり、然れば幾もなくして同艦保存を主張するの世論漸く喧しくなり、同十一年七月十七日の東京朝日新聞は、大活字を川ゐて、『東鄕老元帥語る』、と題し大要左の如き記事を揭げた。

當時の聯合艦隊司令長官東鄕提督は、今も緊張した健康さで、その時分から住居だつた番町の小さな邸内で讀書や、揮毫や、園藝やら、夫れから令孫達の相手やらで、未だ避暑にも出かけぬ元氣で謙遜な生活を續けて居る、昨日の午下り、老元帥は、洋館の質素な應接間に記者と對談された室内は何等の飾りも無く何の誇張も無い、寧ろ驚くべき質素な室内に、譯も無く列べた海戰の記念物の、極めて貧弱な陳列を眺めると、成程脫俗高潔な風格が胸を打つ、元帥は豫想と違つて、如何にも氣安い無造作な調子で出て來られた、輕い麻の單衣にセルの袴をつけて『やア』と言ひ乍ら籐の椅子に掛ける、よく見ると、寫眞の姿とちがつていくらか痩せられたので、六十そこ〳〵位にしか見えない、血色がよくて、顏の筋肉は引緊

つて居るし、例の双頰の白髯も、あるか無きかに短く苅つて、涼しげな健康體だ、『私としては全艦隊の司令長官だつただから、三笠を記念として殘さうが、朝日を殘さうが、夫れは何にならうが一向構つた事は無い、が當時の旗艦三笠を永久の記念物として殘すなら、それは勿論結構な事だ』元帥は少しお國の鹿兒島訛で、訥々と力强い語調で語る『だがこれは要するに海軍大臣の腹一つで決るんぢや海軍大臣が殘す事に腹を決めるか否かぢや、海軍大臣が、殘す事に腹を決れば殘らうし、それで無けりやだめさ』元帥は然う言つて團扇を使ふ、話は軍縮の感想に移り、『假令軍艦の數が減じた處で、兵員の練磨さへ完全に出來て居たら、必しも恐るゝ事は無い、各國の兵員を一寸見れば、戰ひに耐へるか否かは判る、要するに實戰には練磨された兵員、之が第一ぢや、』元帥は快く語つて、最後に『三笠の事は海軍大臣の腹一つで決まるのだ』と繰返された。

元帥が三笠を愛惜するの情、言外に溢れずや。

既にして同十三年となり、同艦破壞の時期漸次近づくに連れ、新聞雜誌等の共の保存を論ずるもの益々增加し、就中「ジャパンタイムス」の如きは、最も猛烈に之を主張し、遂に貴衆兩院議員の有志總代、各新聞社、通信社、日米倶樂部員の代表共の他の有志と協力して、同年三月下旬先づ三笠保存會を組織し、以て國内の輿論喚起に努むると同時に、英文を以て外人に對

し堂々所信を披瀝し、又有志の一部は英、米、佛、伊等の大使を訪問して、三笠保存に關する日本國民が、本旨の在る所を告げて贊同を求むる等、奔走到らざる無かりき。斯くて六月初旬となるや、『ジャパンクイムス』社は、特に社員を横須賀軍港に派遣し、三笠の現狀を視察せしめて、同月十三日の紙上に左の如き慷慨の文を掲載した。

（前略）軍艦三笠は嘗て帝國海軍の誇であつて、國民は我が國の獨立と存在とが、共に脅されたる日露戰役當時に於ては、その安全を三笠の威力に信賴したので有つた。其の三笠は今は全く棄てられ、その武裝を解かれて、憐れにも、さびれて横須賀の港に姿を留めて居る。その有樣は、恰も惡魔の如き敵國の襲來を防いだ武士が、戰が終へて國民に忘れられたを恨むさまに等しい。日露の戰爭に從事した諸艦長は昇進し、大將連も頌德されたり、勳章の數を增したが、獨り彼の勇壯な三笠は、戰友共に棄てられ忘れられて今見る影も無い。其の運命を悲んで呉れる戰友もなくて、三笠は横須賀の港に放擲され荒廢して、昔時其の誇とした武裝は盡く解體されて了つた。そして今は職工のハンマーの下に破壞されて嘗て威勢よく浮んだ海の底に、深く葬らるゝのを待つて居る。

然り乍ら、その三笠は國家の危急存亡が氣遣はれた秋には、勇壯なる活動をして國家を救つた艦である。若し三笠に口舌が有つて、その艦骨が破壞さるゝ前に、一言意志を表すこ

とが出來たならば、三笠は何と言ふであらうか、と僕は默想した。

嗟呼健忘の國民よ、爾等が嘗て三笠に向つて捧げた尊敬の意志は、何處に消えたか。日本海の大捷に對しては、國民は長夜の明けた如く歡聲を揚げて喜んだでは無いか。己が勇士を忘れる國家は、その健忘性に禍ひせられて、やがて己れも、暗の底に埋らるゝ運命を有つものではあるまいか？何故三笠の保存を唱ふる叫が聽かれぬのか、僕には判らぬ。

海軍大將や、艦長や、水兵や、三笠の艦上で勇戰した名譽ある軍人と、國家を失つて奴隷の境遇に陷らんとしたのを救はれて、三笠の戰捷に歡喜した國民とは、何が故に軍艦三笠を記憶から失はんとして顧ぬのか？

英國人が『名譽あるヴヰクトリーを保存せよ』と叫ぶあの遠き叫聲の響く時、僕は我が國民が三笠を記憶せんことを神かけて祈らねばならぬ。

尋いで翌十四日、同紙は更に社說に於て大呼して曰く、

軍艦三笠の名は、光輝ある史實を、吾人に回顧せしむること切なり。

十八年前の昔、日本海に大捷を博したる後聯合艦隊の旗艦として、長官旗を翻しつゝ、佐世保灣頭に現れたる當時の軍艦三笠は、帝國の名譽を其の艦上に擔ひ居たるは、燦然たる史實なりき、然るに現在の三笠は、其の名のみ空しく存して、其の實に至りては蟬殼に異らざ

るを見るに至る。

吾人、三十七八年戰役の記憶尙ほ新たなる國民としては、感慨無量ならずや、我が社の一遊子、一日横須賀に遊び、悲慘なる狀態に瀕せる昔日の堅艦三笠を目擊して、執筆配布せる印刷物は、既に讀者諸君の一讀を賜りたること丶信ず。

遊子は、三笠の慘狀を敍して『三笠は、今や空しく廢艦として港隅に横はる、其の武裝は撤廢られて、今や偲ぶべき昔日の俤を留めず、其の狀恰も、戰場を馳驅したる武夫が、赫々たる過去の勳功を國民に忘れられ、徒に槽櫪の間に老いんとするに彷彿たり、誰れかこれを見て暗涙を禁じ得べき』と。

然り、嘗ては制海の榮譽に輝き、其の檣頭高く、東鄕提督不朽の信號『皇國の興廢此の一戰にあり各員一層奮勵努力せよ』を揭揚したる名譽ある戰艦は、刻々屠場に送らるゝの運命の臻るをまちつつあり。

同艦の前途を靜に考へ、艦が本年十月の候、佐世保港外に、標的艦として海底に葬らるゝと將來國民の貴き記念物として永久に吾人の子孫に見えんとすると、吾人の感情は其の何れに左袒せんとするか。

更に三笠保存の目的は、單に同艦の保存のみに極限せられたる問題ならん歟。遊子は更

に『軍港背面の丘陵に攀ぢ軍神の像の鎭座する邊より、鏡面を欺く軍港を瞰下し、近代的堅艦艨艟の碇泊するを見たり、然りと雖も軍港の氣分は、余が曾遊のとき受けたる印象と異れるを感ぜり、今や軍港の空氣は一般に萎微し、士氣漸く揚がらず、勇士の意氣銷沈また甚しきものあるを覺えたり、卽ち知る、海には堅艦浮ぶも、軍縮による戰士の士氣漸く衰微に頻せんとするを』と。

遊子の直感したる所にして誤りなくば、吾人は敢然國家の危機を叫ばざるを得ず。

此の時に當つて、三笠を現狀に放置し、更に其の暗黯たる前途を軍港內に暗示する如きは士氣の廢頽を鼓吹するものにて、其の勇士の心裏に及ぼす精神的影響の程度は、決して輕視するを許さゞるものあり。

由緖ある事實と傳說の保存は、人文の進步發達を助成し、人心に點火するものなることは吾人是を知る、然して現在に存する事物は、皆是れ國民の傳統的精神により、今日に傳へられたるものならずや。

三笠は國民の感謝おく能はざる東鄕大將と共に、三十七八年戰役の光輝ある生存者なり三笠日本海に大捷を博して、帝國海軍今日の盛觀を招致したり、更に三笠の保存が、將來の國民精神に影響する所大なるべきは、吾人の信ぜざらんとするも能はざる所なり、吾人が

遊子に和して三笠保存を叫ぶ所以また此の處に存す。

尙ほ不幸にして三笠は華府の協定により、他艦と均しく解體の運命に坐すべしとせば、吾人は其の運命を他艦に代らしむることを、華府委員に提唱するを得べきものと信ず、更に三笠の如く齡既に古稀を越え、再び其の老體を戰線に運ぶ能はざるものを解體して、何の益ありと云ふや。

是に於て、吾人は名譽ある老艦三笠の保存を高唱し、永へに同艦が我が領港に繫留せられて、一般公衆に其の光輝ある歷史を語らんことを望まざるを得ず。

終りに、海軍當局も、一般公衆も、共に同艦の將來に想到し、國家の重寶たるべき名艦が、一般の艦船と共に解體の運命に逢着することが、國民の恥辱なるを思ひ、其の救濟の爲めに、一段の努力を吝まざらんことを希や切なり。

有志が不撓の活動は全く功を奏し、英、米、佛、伊の諸政府よりも、異存なき旨の回答ありたるのみならず、我が政府當局者とも了解成り、公然諸國政府との交渉調ひければ、保存會員は萬歲を三唱し東鄕元帥を名譽會長に、貴族院議員阪谷芳郎男を會長に推薦し、副會長長以下の役員も共れ〳〵確定し、爰に完く同會の組織なりぬ。越えて大正十四年六月二十六日、財部海軍大臣は、東鄕元帥以下同會幹部を其の官邸に招待し、主人側としては大臣次官、軍令部長

各局長及橫須賀鎭守府司令長官等出席し、主客互に胸襟を開きて、三笠保存の方法、將來の希望等を懇談した後、大臣より晩餐を饗せられ、「デザートコース」に入るや、海相は起立して、保存會員の努力を感謝し、併せて將來の希望を述べ、之に對して阪谷會長は、本會成立の動機、今後取るべき方針等を縷述し、食後雜談に移りしが、三笠をして、國民全般の記念物たらしむる精神を貫徹するため、其の維持費には、縱ひ零細のものたりとも、全國より成るべく廣く醵金を仰ぐべし、との意見出でしに、元帥大に之を贊し、先づ其の例を開かんとて、卽座に金五十錢を維持費中に寄附なしければ、滿座の人々皆之に倣ひぬ。是に於て海相は、元帥の寄附せる五十錢銀貨を特に封筒に入れ、自ら其の上に『大正十四年六月二十六日三笠保存會晩餐會の節東鄕元帥の出金』と書し、之を硝子箱に納めて、永く三笠艦內に飾りつくる事とせり。

尋いで橫須賀鎭守府にては、同艦の下甲板以上を白濱海岸に据付け、保存工事に著手し、大正十五年十一月を以て之を竣り、同月十二日畏くも皇太子殿下の台臨を仰き奉りて保存記念式を擧行せり。而して殿下の思召に據り、博恭王殿下を始め戰役當時の乘組將校と共に上甲板に於て記念の撮影を遊ばされ、別に東鄕元帥のみのものをも寫さしめ給ひぬ。夫れより記念式開始せられ、加藤橫須賀鎭守府司令長官の保存工事報告、財部海軍大臣の式辭、阪谷保存會長の答辭ありたる後、名譽會長たる東鄕元帥は恭しく御前に進み左の祝辭を朗讀

した。

記念艦三笠保存工事竣り、茲に畏くも　皇太子殿下台臨の下に其の保存記念式を擧げらる、本艦の光榮至大なりと謂ふべし。

惟ふに本艦は明治三十七八年戰役に際し、終始聯合艦隊の旗艦となりて陣頭に立ち、前には旅順口及び黄海に奮鬪し、後には日本海に鏖戰し、以て全軍の將卒をして、軍人の本分を盡すに遺憾無からしめたるは、洵に我海軍史上の一大光彩たらずんばあらず、而して今や翕然たる中外の同情に依り、其の保全の方法茲に確立するに至りたれば、庶幾くは永久に此の雄姿を示し、以て益々　皇國の威名を宣揚し、併せて當年忠魂を捧げたる烈士の功績を傳ふるを得んか滿腔の感激を以て恭しく祝す。

斯くして今や三笠は、永久に保存せらるゝことゝなり、法人組織の下に、基本金に依りて之を維持し、追つては艦内に約千人を收容するの場席を設け、夏期講演會をも開き、又青年團等修學旅行の砌など、實費にて宿泊せしむるの計畫もありとのことなり。

附けて記す、全國よりの寄附金中には女工の一團が、おしろいを廢めて溜めしとて、若干の金員に添へて覺束なき筆に東郷元帥の德を稱へよこせしもの、又は勞働者の團隊が酒や煙草を節約して送金し來れるもの等、偏に元帥が德望の致す所であらう。

先帝陛下と東郷元帥

明治三十八年の十二月元帥は當時皇太子殿下であらせられた大正天皇の御供をして、吳の筑波進水式に扈從したことがあつた。いつか滯りなく進水式も濟んで還御にならせられた。一同は御召列車に乘つて行けといふことで、元帥を參謀として行つた、小笠原子爵等も御召列車内の一室内に納まつた。

すると、一時間も經たない内に武官を始終御遣しになつて、或は御菓子を賜はり、或は果物を賜はるなど、誠に何とも申上げやうがない位に御勞はりになつた。

暫くして元帥を御召しになる、御召室に小笠原子爵が扈いて出ると、丁度側近奉仕者の列車は元帥のゐる方から御召室へ出て御召室を通り抜けて向うにある。そこで小笠原子爵はお辭儀を申上げて御前を通り向ふの部屋へ這入つて、侍從や武官と話をして居つた。

興に乘じて盛んに話をして居ると、誰か肩を叩く者がある、さうすると前にゐる侍從が青くなつてゐる、誰だとひよつと振返つて見たところが、皇太子殿下が立たせられて、『それ東

郷が行つた、危ない〳〵、汽車の繋ぎ目の所が危ない、見てやれ〳〵』と仰せられた。

小笠原子爵は實に恐懼してしまつてつい間誤々々して殿下の御立ちのその御前をすれすれにして通らなければならぬので全く躊躇して居ると、『構はない〳〵』とお仰せになり、私の背をお押しになるやうにして、『見てやれ、繋ぎ目の所が危ない』とお仰せになつた。

それから追駈けて行き、元帥にくつついて室へ歸つて來て、さてその樣子を元帥に話し、皇太子殿下の何とも申しやうのない程御勞はり遊ばすことを謹話したところが、元帥は下を差うつむかれまして、落涙された。『何といふ有難いことだ、あなたもこの思召しを永く忘れないでゐて呉れよ』と言はれた。實に今日でもそれを憶ひ出すと、その當時の御音聲といふものが、終生忘るゝことが出來ない元帥の誠に限りない光榮であるとともに、如何に元帥の忠誠を深く御心にとめさせてゐらせられたかといふことが分る次第である。

ルーズヴエルト氏と元帥

北米合衆國の大統領として有名なルーズヴエルト氏は、よく日本を諒解し、日本魂を味得

し、つひに東郷大將をも諒解するに至つた。そして日露の平和克復したる明治卅八年十二月十八日、當時大統領の職にあつた氏は次ぎの一書を東郷大將に寄せ、自署した寫眞を元帥の下へ送つて來た。

『グリスコム公使に託し御惠贈相成候拳銃かたじけなく受領致し候。

閣下は本年中に當合衆國へ御渡來相成べき趣同公使より傳承切にその事實たらん事を祈り、白堊館に於いて親しく閣下に接し歡待致し度熱望に耐へず候。封中肖影一葉幸に御受領相成候はゞ本懷不過之候』

これに對して、東郷大將は翌卅九年一月廿九日、斯ういふ返事を出した。

『肅啓貴簡並に貴影謹んで拜受仕候。小官はこの賜物を以て大共和國大統領閣下友情の表彰として深く尊重し、永久大切に保存可仕候、近き將來に於いて白堊館にて閣下に拜謁するの光榮を得ることは小官の切に希望する所に御座候得共貴國訪問の件に就いては未だ何等の決定も無之候爲御確答仕兼候儀恐懼の至りに存候。

封入仕候小官寫眞一葉幸に御受納被下候はゞ光榮不過之候　敬具

このことあつてから、數年の後元帥は英皇帝の帶冠式參列の序を以て米國にも立寄り、各地を巡察しのちに永年の宿望たるルーズヴエルト氏に親しく會するの機を得た。そして

東郷大將が同邸を訪問したのは、八月十三日で、同日午前十一時四十五分、マンハッタンのベンシルヴニヤ驛より臨時列車に投じ、午後零時四十分オイスター灣に著き、同所に待つてゐたウツドフォード少將の自動車でサガモアー丘に向つた。

これより先きその通知を受けてゐたルーズヴエルトは、滿身に溢るゝ喜悅を以て夫人と共に質素にして然も眞情の籠つた歡迎準備をなし、今か今かと大將の到着を待ち焦れて、遂には玄關に立出でゝ廣い車寄せを彼方此方と逍遙してゐた。

そこへ大將の自動車が着いたからたまらない、感情を制して體裁をつくるなどの小細工を超越した親味に浸つてゐる快傑は、大將が下立つと同時に驅けよつて

『おゝ親愛なる東郷、よく來てくれた。本當によく來てくれた、余は甚麼に待つたらう』

さうして懷しくてたまらぬ樣子で、頑丈な左右の手をヌツとさし延べ、同じく雙手を出した大將の手をウンと握つて打ち振り〳〵『嬉しい』『嬉しい』と繰返し叫びつゝ、抱へるやうにして廣いコロニヤル・ホールに案内した。

此の際通譯として大將に隨行してゐた水野總領事は、後或人に兩雄の會談について、こんな話をした。

午餐前にルーズヴエルトは、その書齋の壁に懸けてゐる色々の記念物について大將に說明したが、食後暫くその席を離れた際、夫人は大將に向ひ、同じく壁間に掲げある小旗を指し、微笑ながら『ルーズヴエルトはこの旗について何か申し上げましたか』と問ひかけた。そこで大將は『いや何も承はりませんが、由緒でも御座いますか』と反問したす。すると夫人は淑ましやかに、『實はこの旗はルーズヴエルトが初陣の時、敵より奪つた大隊旗なので、何時も得意になつてお客樣にお話するので御座いますが、大方閣下の御功績が餘りに大きいので、はづかしくて、申し上げられないので御座いませう』と返答したので、大將は頭を打ち振り『否左樣な道理は御座いません私の微功も閣下の御勳功も時と處とこそ違へ、國家に盡す覺悟は一で、責任と配慮とに何の差異がありませう』というてゐる所へ、

Count H. Togo

To Admiral Strauss

元帥の歐字筆蹟

ルーズヴエルトが戻つて來て、この問答を聞き知ると夫人に向つて、『御身は言はでもの事をお話したものだね閣下の大功に對して恥かしい極みだ』と乙女のやうに顏赤らめながら、改めて大將と熱烈な握手を交したのは實にゆかしい光景であつた、又この會合の際簡にして含蓄ある大將の言葉を、その通り通譯するには頗る苦心した。

元帥とムツソリニー

東洋の偉人東鄕元帥と西洋の偉人ムツソリニー氏とが、一種の因緣を持つて居るといふことは、頗る興味ある話だが、これについて、小笠原子爵が介在して居る。

ムツソリニー氏の部下たる日本の有名な下位春吉氏と小笠原子爵とは常に懇意であり大正十四年下位氏が歸朝の時に同子爵を訪問されいろ〳〵ムツソリニー氏のことに就いて話が出た、それから下位氏が再び伊太利へ歸る時に『魚雷の脊に跨りて』といふ本を著した。それは歐洲大戰中の伊太利の勇士の事績を書いたものであるが、その題字を東鄕元帥に是非一つ書いてお貰ひしたいと小笠原子爵に依囑して來た。その本を見ると如何にも精神修養になるものであるから、その本を元帥の前へ持つて行き、なほ下位春吉氏の希望を元帥へも話された。元帥は注意深くこれに眼を通して、『成程これは日本の海軍將校が讀んでも實に精神修養になる、それでは書かう』斯う言つて書かれたのが『斷而敢行鬼神避之』といふのである。

下位氏は非常に喜んで、それを持つて伊太利へ歸つた。そしてそれをムツソリニー氏に見せた、ところが非常にムツソリニー氏の氣に入つてしまつて、是非これを俺に呉れないかといふ餘りの切望に下位氏もそれなら閣下にお贈りしませうと言つてムツソリニー氏にそれを贈つてしまつた。

聞く所に依れば、ムツソリニー氏は、それを伊太利の海軍省の大臣室に掲げて居るといふことだ。ムツソリニー氏はその當時七省の大臣を兼ねてゐた。

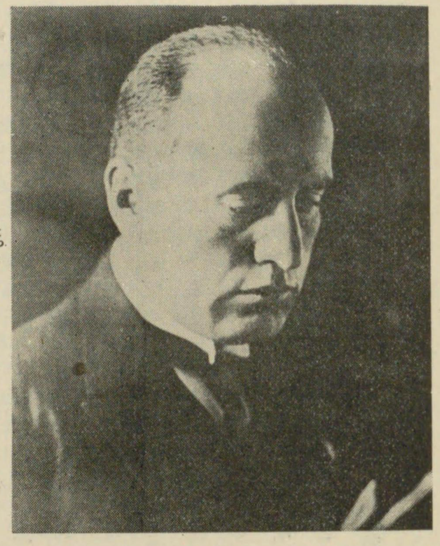
小笠原子爵も亦その時にムツソリニー氏に刀劒を贈つた。それは子爵の故鄕の唐津の鍛冶が鍛へたもので、行平といふ刀鍛冶のものであつた。行平といふ刀は昔後鳥羽の院の御番鍛冶に有名な行平といふ刀鍛冶があつた。この行平の鍛へた刀は、魔物が恐れるといふ言ひ傳へのある有名な刀である。

行平が或る時豐後に居つた、すると或る夕方、非常な美少年が來て言ふに『私は實はこの

山に住んで居る鬼神でございます、然るに隣山に非常に猛悪な悪鬼が來て住んで居り、常にそれと戰ふけれども、どうしても敵はない、そこであなたのお鍛へになつた刀を以てその悪鬼を斬れば必ず勝ちますから、どうぞ一つ鍛へて下さい』といふ、そこで行平は精神を籠めて刀を鍛へ、その美少年に渡してやつた。するとその晩大暴風が起り非常な嵐になつたが夜が明けるとカラリと元氣になり、今の美少年が再び來た。さうして『お蔭さまであなたの鍛へて下さつた刀の爲に、遂に悪鬼を退治することが出來ました、誠にどうも有難うございました」斯う言つて『そのお禮に、これからあなたの刀を鍛へる時には合槌を打ちませう』といふ、この後行平が刀を鍛へると必ず鬼神が合槌を打つたといふ、そこで行平の鍛へた刀といふものは魔が恐れる、それから持主に災ひが來る時には、聲を出して泣くと言ひ傳へる、といふわけで行平のものは寶劒の部に入るのである。

小笠原子爵がムッソリニー氏に贈つた行平は、その子孫のものである。さういふ因縁があつて魔が恐れるから、自然ムッソリニー氏の身を護るだらうといふ意味から贈つたのであつた。それと同時に、今度の東郷平八郎全集の初めの方にある東郷元帥傳をも贈つた。

ところが大變喜ばれ殆んど伊太利中の新聞にその刀が報道され、また東郷元帥傳は伊譯することを許して呉れと言つて來た。そこで子爵も喜んで、日本の偉人がさういふ風に紹



ムッソリニーの自署

介されることは、この上もないことゝされ無條件で承諾贈のすることを言つてやつた。すると昨年再び下位氏が日本へ來る時に寫眞を小笠原子爵のために持つて來た。（寫眞參照）。元帥詳傳を見て居るムッソリニー氏で下に書いてあるのはムッソリニー氏の自署である。

尙ほ下位氏は『斷而敢行鬼神避之』はムッソリニー氏に取られたから、もう一つ何か記念になるものを書いて戴きた

Al Visconte N. Ogasawara
cordialmente
Roma gennaio 1927-V
Mussolini

いと言つて來た、小笠原子爵も尤もな賴みだと思つたから、元帥にその話をした、それぢや書いてやらうと言つて今度書かれたのが『細心大膽』これが又ムッソリニー氏に打つてつけだから或は又呉れと言はれたかどうか、それは分らない。斯うしてムッソリニー氏と東郷元帥は遙かにまだ見ぬ友であつて一脈通ずる所があるのである。

かういふわけで、一昨年御大典の一箇月程前に、ローマで大きな鐘が出來たことがある。それには東郷元帥の字を彫り込みたいといふことで、ムッソリニー氏から駐日大使に言つて來た。そこで大使から海軍省へ、海軍省から小笠原子爵の所に話があつたから、同子は直ちに元帥にその話をした。元帥も承諾されて『福音を藏す』と書かれた。恐らく遠く伊太利の鐘に彫り込まれて、今ローマにあることゝ思ふ。

さういふ風にムッソリニー氏は非常に元帥を敬慕して居られる、一昨年だつたと思ふが伊太利の司令官が日本に來たことがある。それは皇太子殿下の伊太利御訪問の答禮使としてゞあるが、その時にも着く一日前に無線電信で海軍省へ、東京へ行つて參内をした後に是非東郷元帥を訪問したいから、豫めそのことを通じて置いて呉れと言つて來た。この一事を以て、如何にムッソリニー氏が元帥を敬慕して居るかといふことが分る。

身のまはり一切を自分で

元帥は日常些細なことを決して他人を煩はされない。どんな小用事でも、必ず自分で處理される。來客などゝ對談中でも、自分で立つて行つて入用なものを持つて來られる、執事や女中などを呼ばれることは、殆んど絶無といつてもよい。これは若い頃から、現在の八十四翁に至るまで、一貫した元帥の信條らしい。今でも日常生活に女中や書生に小用事を命じられることは、殆んど無いといふ位だ。身のまはりのことから、煙草盆の出入れに至るまで、一切を自分の手ですまされてゐる。

從僕の熱誠元帥を動かす

元帥は部下に對しても、決して高ぶる事はなく、常に溫情を以て臨まれたのである。

明治三十七年八月十日黄河の海戰の時である。

東郷司令長官の從僕に、樋渡定俊と云ふ青年があつた。

心正しく優しい氣質で、平素から忠實に長官に仕へて居つたが、黄海々戰の際彼は豫ての配置に依り、負傷者の運搬に從事しながらも、少しの暇でも見出すと、砲烟彈雨の下を潛つては、煙草、平野水、ミルクなどを前艦橋に持つていつて、司令長官は申すに及ばず、幕僚、艦長連をも慰めて居つた。

其のうち午後六時の頃、三十糎の敵彈前艦橋に爆裂して將卒五名を殪し、艦長及び幕僚等六名並に下士卒十名を傷けた。

かくと見た樋渡從僕は、長官の身の上が案じられて耐らず、取つ措いつ千々に心を碎いてゐる折しも、彼も亦敵彈の爲め脚部に重傷を負ふて、治療所に運ばれることゝなつた。

併し長官を思ふ一念は益々堅く、遂には自身の分限をも打忘れ、痛手を忍びつゝ、參謀長の從僕を呼び、司令長官が司令塔内に入らるゝやう、副官に懇願し呉れと眞心罩めて賴んだもので、參謀長從僕は承知して、直ぐに永田副官の許に驅つけ、恐る〳〵樋渡の切願を述べた、副官も其の心根には同情したものゝ、採用すべき筋のもので無いから、懇々彼の分限を說き聽

かせて其の請を却けた。が深く友人の誠心に共鳴して居た參謀長從僕は、其の願意を繰返して止まないので、有繋の副官も無下に叱りかね、終に自身治療所に往いて樋渡を諭した。

すると此の忠僕なる青年從僕は、傷ついた身を起して副官を嚐上げ

『露出は危ない！　司令塔にお入りなさるやうお勸め下さい』

聲もきれ〴〵に、願ひては泣き泣いては願ふ、其の切情のあまりに憐しく、副官も胸迫るまでに心を動かされて、

『可し閣下に申上げて見るから安心せよ』

言ひ了るや否や、艦橋に走り歸つて、一伍一什を東郷長官に告げた。

折しも戰鬪は酣で、東郷長官は烱々たる眼光に戰勢を督して居たが、青年從僕の熱誠を聽くと、優しい微笑を口許に浮かべて、輕く打頷き

『負傷したか可哀さうに……今に司令塔に入ると言ふてやれ』

其聲には三軍を叱咤する響は失せて、慈愛の音が充滿て居た。

副官は再び馳せて之を樋渡に傳へた。

其を聽いて彼は、始めて安心の色を浮べて治療を受けたのである。

『從僕の熱誠司令長官を動かす』

軍中語り傳へて美談となした。

兩元帥の謙讓振

嘗て日本に駐在の佛國大使クローデル氏主催の晩餐會に主賓として招ぜられた當時攝政殿下御渡歐の際佛國御立寄の答禮使として來朝せるジョッフル元帥が夫人と令孃を同伴して佛蘭西大使館に着いたは同日七時を過ぐる十五分、之と相前後してこれも自動車を大使館前に横着けして降り立つたは大勳位東郷元帥であつた。

軈て自動車腕車の軋る音高く續々入り來つたは時の高橋首相以下の顯官三十餘名で些して人目も惹かなかつたが茲に端なくも居並ぶ貴賓の好奇心を唆らせたはジョッフル元帥と東郷元帥の兩老元帥の初對面である。

今夜は丁度晴れの晩餐會殊には畏れ多くも當時攝政宮殿下並に閑院元帥宮殿下にも台臨遊ばさるゝ御事とて、ジョ元帥も東郷元帥も共に大禮服には美々しく有ゆる勳章を胸間に輝かして、過ぎし戰ひの武勳は言はず語らずも一見したばかりで、遺憾なく偲ばせる程で

あつた。

軈て兩元帥は案内に依り、畫を欺くばかりの應接室に招ぜられて、初對面の幕は切られた。

乃でジョッフル元帥は「予は佛國の答禮使元帥ジョッフルである」と型の如き名乘り未だ終らぬ中に、東郷元帥は「御雷名は豫て承はつたが御面會するは今回が初めて、遠路遙々御來朝は感謝に堪へません、予は元帥海軍大將大勳位伯爵東郷平八郎です」と双方の初對面の挨拶は滯りなく濟んだ、將に始まらんとするのは、兩元帥が交々物語る武勳の物語りの叙である。

此方は往年日本海で露國のバルチック艦隊を全滅せしめた事に依り、東洋のネルソンと其名を謳はれた東郷元帥である。片やは彼の歐洲大戰に三百萬の聯合軍を馬上に叱咤してマルヌの大戰勝を博したジョッフル元帥である。取組に於ても、武勳に於ても、大した相違もなく、兩元帥が此奇遇に於て果して如何なる話が飛出すかと、居並ぶ三十餘名の顯官の好奇心はいよ〳〵唆られたのであつた。

東郷元帥はやをら口を開き「歐洲大戰に際し貴殿の軍略や苦心は御察し申しますが」と頻りにジョッフル元帥の武勳を物語らせやうとする。

斯くと聞いたジョッフル元帥は謙遜して曰く「イヤ貴殿の日本海の海戰を豫て聞及んで

居ました、先づ貴殿の軍略や實戰談を承はりたい」と讓る。兩元帥とも益々謙遜して自分の武勳は鵝の毛で衝いた程も物語らず、マア〳〵と讓り合ふ中に攝政宮殿下の御成り、次いで閑院元帥宮の台臨に次ぎ、晴れの食堂も開かれ、たうとう兩元帥ともに一語も自分の武勳を物語らずに別れた誠に奥床かしい話である。

○右はジョッフル元帥が攝政宮殿下御渡歐の際、佛國に御立寄りになりし事に對して佛の答禮使として我國に來た際に於ける同元帥と東郷元帥との會合の際の狀景を示せるものにして、元帥の謙讓なる態度の躍如たるものがある。

元帥の博學

先年東京灣で行はれた日本海々戰記念の講演記念として、東郷元帥揮毫にかゝる『治而不忘亂』の石版刷を參加の將士に與へた。

ところが海軍部内で『治に居て……』といふのは聞いた事があるが之は弘法ぢやない東郷の筆のあやまりぢやないかとの說が出た。

之を當時の幕僚小笠原長生子にたづねると確に易經の繫辭下傳にその通りの辭句がある事を發見したので、齋藤軍令部次長などは『さすがに東郷閣下だ』と感服してゐる。

英國留學時代の元帥

元帥が世界海軍の先進國たる英國にあつて、教育を受けたる事は世人の知れる所なるが其當時氏は英國海軍練習船ウースター號にありて、航海の練習を爲した、先年ウースター號海軍練習生の定期賞與を行ふに當り皇太子ウエールス親王殿下には、學生に向つて下の如き演說をなされたといふ。

予の考ふる所にては、海上の勤務は、吾人の執るべき勤務中の最も愉快なるものにして、殊に此のウースター號に於て一人の有名なる大海將が十八ヶ月間の勤務を爲したる事を記憶するは、予の最も愉快とする所なり。

其大海將とは誰ぞ蓋し予の言ふを須ひず、卽ちグレート、アドミラル東郷其人なり。

而して當日の授與式に於てありし猶一つの興味ある事柄は、卽ち親しくウースター號に

ありて東郷提督を敎へたヘンダーソン、スミス大佐の此式に列し居た事で、大佐は三十年ウースター號艦長として練習生の敎育に任じ、爾來東郷元帥と文書の往復を爲しつゝある。

式の行はるゝ數週前にも、東郷元帥より長大の手紙に元帥及び子女の寫眞を添へたものを大佐に送り、大佐夫人には美はしき銀瓶を送つた由で、大佐は往訪の新聞記者に向つて、東郷元帥の學校時代に就き、下の如く語つた。

東郷は優秀なる青年なりき、彼は所謂英敏といふ質にはあらず、常に刻苦勉勵し學ぶに遲きも一たび學び得たることは是を己れのものと爲したり。

彼は靜肅順良なる好青年にして、獅子の如き勇氣を有したりき。

英國の青年は、貴下の知る如く無遠慮なれば、彼等は東郷を呼んで『チョンニー、チャイナマン』と爲し常に彼を戲弄したるが、彼等の戲弄の甚だしきに至るや、彼は靜かに書を片寄せ形を正して、

『予は支那人に非ず若し今後再び左樣の言を以て予を愚弄する者あらば、其骨を碎くべし』

とて拳を擧げたるに愚弄せしもの共は皆去れり。

蓋し彼等は東郷の眞に强きを知るが故に彼をして、堪忍袋を潰さしむるまでに彼を戲弄

することは爲さゞりしなり。

東郷は、ウースター號が出したる海軍々人中に在て、最も成績善き二人にして予の敎育したる者のうちに、極東の最大海將のあることは、予の榮譽として、誇る所なるは今更言ふ迄もなき事也云々。

元帥と國民の同情

恰も旅順封鎖の頃、我軍艦九隻が沈沒した三十七年五月のことである。

此月は實に日露戰爭を通じて最も不幸な時であつた、其時私は大本營に居つたが、流石の東郷元帥も味方の艦艇が餘り續いて沈沒するので、其報告にも、

『本職は重ねて此不幸を報ずる事を悲しむ』と云ふ樣な事を云はれて居つた位で、此悲報が國内に傳はるや、國民の同情は叫然として元帥に集まつた。

大本營を通じて大將に送つて來た所の國民の同情ある手紙は實に山と積まれたが、其内に十二三歳かとも思はるゝ一少女からの葉書があつた。其文句は

『東郷さんからだを大事にして下さい』

と云ふ只一語であつたが、此簡單な一語は實に日本國民の大將に對する衷情を代表したものであると孰れも感じた次第である。

此時私はつく〴〵東郷さんの偉大な人格に感じた。

普通ならば此際九隻の軍艦を失つたといふ事は、それこそ國民の如何なる怨府の的となつたか知れないのであるに拘らず、國民は是を以て少しも東郷大將を怨まなかつた。

只一途に、東郷元帥にして健在ならば決して悲觀する事はない。

必ず我に勝利ありと信じて疑はなかつた。

斯の如く國民の信頼を一身に集め得た事は、偏に大將の偉大なる人格の然らしむる處であることを痛切に感じた私は、此時斯かる偉人は是非とも後世永くその眞事蹟を傳へねばならぬと思つたのが第一の動機である。

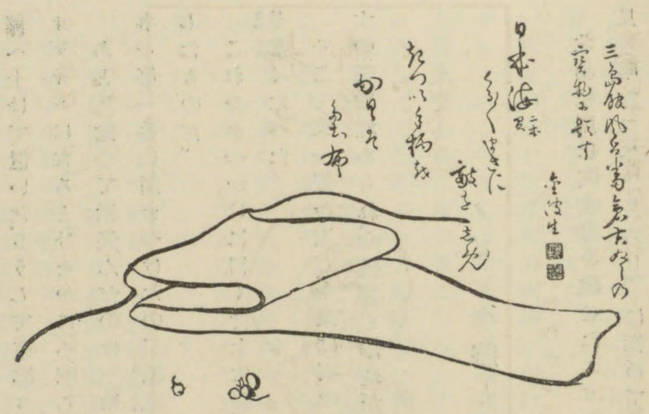
其後艦隊が横濱に凱旋し大將が大本營に往復の際、東京から横濱までの沿道は群衆を以て埋められたが、其中に二三箇所『東郷大明神』と記した大旗を樹てゝ、其下に跪坐した老若男女が頭を地に擦りつけて拜んで居つたのを見て、私は愈々傳記を書かずには居られない樣な氣がした。

小笠原家の家寶

小笠原子爵の令孃は、深く觀音樣を信仰し子爵の母堂も亦觀音樣の深い信仰家であつた。先年令孃が大阪へ嫁がれる前後のこと、淺草の觀音樣に、觀音會といふものがあつて、その會から小笠原子に講演を依頼して來たことがある。それは淺草寺の執事をしてゐる清水谷といふ壯年僧侶として最も權威ある人から、觀音樣の講義を書いたから、子爵に序文を乞ふたので、それが因緣となり、この清水谷氏から同子に講演のことを依頼されて來たのであつた。ところが、その時恰も令孃の結婚に際會されて居た同子爵は、遺憾ながら受諾が出來ずつひ延び〴〵になり、今年の三月十六日漸くそれが實現された。約二時間に亘つて觀音のことについて同子爵は講演されたのであつたが、その挨拶といふわけで、淺草寺から『柳之御影』を贈つて來た。柳之御影といふのは、淺草寺の開山となつて居る慈覺大師傳敎大師の高弟であり、叡山の第二世になつた人、その人が今日のやうな淺草寺といふものにしたのであるが、その時に、柳の木へ觀世音を彫つたこれを柳の御影といふのである。

ところが何しろ千年以上經つて居るものでありその間可なり刷つて御影を出したので段々磨滅して今日では、淺草觀世音の本尊といふものは祕佛になつて居り、これは絶對に開けて拜むといふことは出來なくなつて居る。その代りをして居られるのがこの柳之御影である。最近に至るまで柳之御影は絶對に刷らなかつた、ところが柳之御影を取扱ふのは、淺草寺の住職の大僧正と執事の二人きりで刷るのも二人が刷る、其二人が刷つた幾枚かゞ淺草寺に殘つて居た其一つを同子爵に贈つたのである。

そこで子爵は深く感謝し常に精神修養の師とも思ひ、又親とも思つて居る元帥に、これに一筆書いてお貰ひしやうと思つてお話したところが、喜んで承諾され元帥が寫眞の如く筆



をとられた。恐らくは之が元帥の最も近い筆だらう。

元帥の越中褌

元帥が、日本海戰後、目出度く凱旋し當時沼津御用邸に御滯在中の明治天皇の御機嫌を奉伺すべく、牛臥の三島館で一ト風呂浴びた時に脱いだ『越中褌』を今三島館に三十年來勤める風呂番のお爺さんが有つてゐる。當時殊に東郷さんと云へば、大したもので、元帥が御飯を召上つた箸茶碗湯呑となると何十圓何百圓で賣れたものだ、ゾコへ氣がついたのが變つた氣骨の持主なる三助のお爺さんで、一つ變つた記念品をとばかり泥棒！　を働いたのがこの褌だ、三助君、東郷さんが風呂桶で背中を向けてゐるのを見計らつてソッと

棚へ上げて置いた、さうして東郷さんがあとで褌を探すに違ひない、さうすると、俺の名案がオヂャンになるとひそかに心配してゐた、ところが元帥は遂にそのまゝ三島館を立去つた。

あと見送つて微笑んだのは三助君だ、早速これを旅館の來客に披露に及んだ、するとこの事を第一番に聞きつけたのが穂積博士だ。博士が先づ眞先にこの褌へ筆太に振つた賛をしたものだ。

これをきつかけに曰く村上大將、伊集院元帥と云ふ具合で、爾來褌の紐にまで賛を書いて眞黒くなつた。

そこで又一策を案じ、今度は桐の箱に納めたところが、今日ではもう箱の内外を問はず名士の賛で埋められ、今後書く餘地がなくなつてしまつた。

ノビレ少將と元帥

北極征服に其名聲を馳せたノビレ少將—伊太利の國寶—と、元帥—日本の國寶—との會見（昭和二年三月六日）は極めて意義深きものであつた。

春陽やはらかく照りつけた六日午前十一時—北極横斷の勇士ノビレ少將はわが東郷元帥をその私邸に訪問した。

會見約三十分東西の兩雄がかたく〳〵握手をかはした刹那の光景は、つひにノビレ少將をして『この日こそは余の生涯に北極横斷のその日とゝもにつひに忘れ難き記念日なり』と感激せしめた程の歴史的なシーンであつた。元帥はくだけた背廣に三笠艦上の微笑をそのまゝに、莞爾として少將の一行を應接間に案内した。

大谷稚介少佐の通譯で、まづ元帥は、

『人跡未踏の地を飛行機を驅つて飛行し大なる危險と戰ひつゝつひに北極を征服したるは全く人類の文明史上劃時代的の壯舉であつた事を確信する。

この平和の勇者たる貴下ノビレ少將に逢ふ事は、東郷の最も光榮に思ふ所である』と激賞した。

つゞいてその得がたき經驗談とその貴重なる苦心談につき質問した。

少將もまた元帥の日本海々戰の軍事談を聞かんとしたが現代はすでに戰さの時代でない、文明と平和の時代である。

平和の勇士に血なまぐさき軍事談を語ることを好まないとてつひにその懇請を前以て

拒んだ。

最後に兩雄はニコ〳〵として寫眞班のカメラにをさまつて會見を終つたが、ノビレ少將は元帥の極めて打ちとけた態度と世界的英雄の極めて質素な住ひとに感慨深く歸つて行つた。

少將は『けふの日は自分が北極を飛んだ日と、ともに二つのもつとも大なる記念日である。この光榮を與へてくれた元帥に深く感謝すると共に會見の機會を作つてくれた報知新聞に厚く感謝する』と告げた。

又、ノビレ少將は、

『元帥に會ふため態々霞ヶ浦から五日夕出て來ました。

東郷元帥に會ふことはイタリーに居たときからの願でした。

元帥の名はイタリーでだれも知らない者はなく日本最大の英雄として、イタリーのガルバルヂ將軍と同じやうに考へて居ます』と。

國寶を殺すな

大正天皇の御大喪前日、小笠原長生子あて新潟から發信人不明の電報一通。

『コクホウ（トウゴウ）コロスナ』

子爵ウーム〳〵とうなりつゞけた揚句、とにかく自動車を飛ばして東郷邸へ駈け込む、元帥電報を見て、

『有難う、ぢやがわしは死んでも御大喪には列しますぢや』

旗洗の池に就て

この近邊東京市外代々幡町幡ヶ谷は元は八幡谷といつたので、昔、八幡太郎が奥州に戰爭に行つた歸りにこゝを通つて旗を洗つた、現今の幡ヶ谷もこれから出て居る。その池を記

念すべく東郷元帥にお頼みして記念碑を建つた時の揮毫です。三十九年丙午の年のもの。

（口繪寫眞參照）

元帥の味覺趣味

日露戰爭の日本海では「千代田」にゐらせられた東伏見宮依仁親王殿下は岩のやうな軍隊のビスケツトを少しばかりおかじりになり、ミルクを召上つた。

東郷元帥は大混亂の中で甲板へ炭酸水を運ばせて悠々と飲んだ。

日頃の元帥はあれで割合に油つこい物が好きである。

しかもどちらかといへば薩摩隼人らしい荒つぽい物が氣に入つて豚の大きな肉のぶつきりだとか荒毛の殘つてゐる猪のスキ身にしたものだとか好まれる。

支那料理も好きなやうである。

いつも默々として好き嫌ひはいはれんけれども副官を勤めた者だけ（約卅名）でやつてゐる雲龍會で元帥においでを願ふ時などはいつも支那料理でやる事にしてゐる。

未だに若いものも及ばぬ健啖だが流石の元帥も　今上陛下が東宮におはしまして沼津御用邸にゐらせられる頃御學問所の總裁として同じく沼津に供奉し三島館に滯在しては御用沼へ詰めてゐたが、この時の三島館の膳部には元帥も時々悲鳴をあげた。

一體が膳についてゐるものはその人の親切だからといつて一つも殘さず食べられる方針なので、どうも三島館では十品位づゝ出した上に尺餘の鯛などをのべつにいろ〳〵調理して、しかも誠心をこめて出すので元帥は頻に箸を運ぶが中途で閉口しては、

『たんと出すんで食ひ切れん』

といつて頭をかゝれた。

それでも一緒に食べてゐる私などよりはぐつと能率があがつてゐられる。

御大禮時の元帥

今上陛下の御大禮に參列の元帥の旅館は三條通り河原町西へ入る、大文字屋旅館であつた。

そしてこの大文字屋旅館の奥の八疊と四疊半が準備された。

四疊半には小さな椅子とテーブルが置かれ外に大禮服用の簞笥が一つあるきり庭も僅に數坪に過ぎず、別に裝飾も何もない實に質素な構へである。

隨行は鈴木副官一人だけ六日御發輦を御送りして直ぐ入洛、七日の御到着をお迎へする筈であるが隣室に東大の青木醫學博士が泊るので健康その他に關しては特に注意してもらふことになつてゐる。

お目出度い事だ

金色燦然たる元帥刀、胸に輝く菊花頸飾と功一級の金鵄勳章をはじめその勳功を物語る幾十の勳章――東郷元帥その日の扮裝である。けふの喜びに元帥の顏色はいつになくつやつやしく大文字屋旅館の玄關先に見送りの町内の最高齡者古川吉兵衞氏の八十八夫妻に向つて、

『あなた方も今度のお目出たいのに會つて幸福ですが、わしもうれしい』と、とてもうれしさう。

嫌ひなカメラの前にもけふは進んで、

『まことにお目出たい日ぢや、天氣もすつかりよくなつて何よりである、目出度いことだ目出度いことだ』

と繰返しながら御卽位、『イの一』の車馬番號入りの海軍省八號のため色塗自動車に乘つて輝く都大路を轍の音も靜かに進む。

八時十五分であつた。謹厳な元帥はこの朝いつもより早く五時四十分に起床入浴後赤飯の膳につき参内したのであつた。

元帥より贈られたる刀を持つ小笠原子爵

元帥の贈られた刀

大正十年の何月だつたか、小笠原子爵が元帥を訪問すると、『あなた一つ上げたい物がある』斯う言はれる子爵は『あゝさうですか』と言ふと『やつと研ぎが出來て來たから』と言はれて、ちやんと袋に入れて自分で持つてこられおまけに書附もついてゐる、『これをあなたにお贈りしたい、どうぞお受けを願ひたい、これは私が青年時代に差した刀で、殊にこれは薩摩の鍛冶が鍛へたもので、東郷家に昔からあるものである、凱旋から後大分いゝ刀も貰つたがしかしこれは自分の家に昔からあつたものだからやりたい』と言つて呉れられ

たのがこの刀である(寫眞參照)。主水正正清と言つて、正房といふ有名な鍛冶の弟子、新刀五人の中に入る人といはれてゐる。

元帥の上村大將評

上村は戰爭には強かつたけれども、病氣には弱かつた。彼は醫者の言ふことを少しも肯かなかつた。病氣といふものは醫者の言ふことを肯かねばいけない。あれ(上村)は醫者の言ふことを肯かず、つひに自分で身體を壞はしてしまつた。

元帥の筍掘り

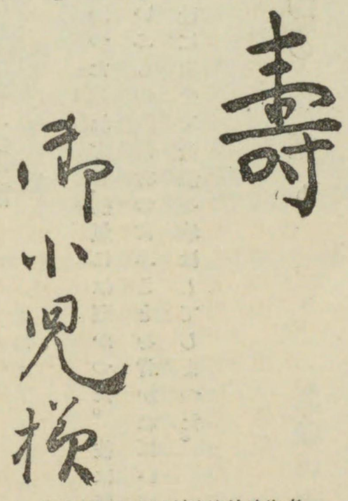
日露の戰役後、聯合聯隊が解散せられて、元帥が海軍々令部長に轉職し、陸上勤務となられたのは、明治三十九年十二月二十日であつた。

何がさて諸方面で待構へてゐた元帥の歡迎會は、それからそれと引きりなしに招待して來るが、大抵は辭退して應じられない。

それでもよんどころ無いものだけでも相應に多く、翌年にまで持越して、折角の休暇も潰れ勝ちなので偶には身體の靜養もされねばならぬ。

小笠原子爵は拙宅へでも來られるのが一番氣樂だらうと考へたので、『どうですお出になりませんか』と勸めて見た。

すると卽座に、『ムムお邪魔しよう』と承諾せられ、四月二十一日の正午過ぎから夫人令孃同伴、めづらしく和服姿でブラリと來られた。



空に雲なく地に風なしといふ麗な日和で、日向は汗ばむくらゐ、寒氣嫌ひの大將には誂へ向であつた。

此方でも全然他人まぜずの家族ばかりで、氣樂專一に暢然と萬事儀式ばらず新芽匂ふ梅

林にて茶菓を勸め、一休憩の後竹藪へと案內した。

その途中家祖を祀つた小祠の側を通りかゝる、丁度祠內の掃除を丁つた老僕用助が扉を開けて顯はれたのに出會つた。

世事に無頓著な彼れも、有繋に東鄕大將の英名は聞及んでゐるし、今日見られることも承知してゐるので、つかつかと進み寄つて、彼れが平素の癖なる兩手を合せてグッと下げつつ丁寧にお辭儀をし、九州訛まるだしで、『御機嫌よう』とやつた。

すると元帥は、『はい』と慇懃に會釋を返して後、ぢつと見詰めてゐたが、私を顧みて、『鹿兒島ですか』と問はれたゆゑ、『いや唐津です、彼れは私方の名物男として面白い經歷を持つてをります』と答へると、『さうですか、永く居るのかな』『さう約六十年になります』『六十年、そりや永い』こんな話でその場は終り、元帥の筍掘りとなつた。

筍掘りはちよつと呼吸の要るもので、先づ地面に出た筍頭の曲り工合で付根のある方面を推し、そこを槍のやうな筍突でズンとやる。ところが大將のお手際海戰のやうに鮮かとは、お世辭にも申し上げかねる。

出る奴も〳〵胴切の極刑に處せられてゐるので、夫人や令孃は、『また切れてる』『また切れてる』と腰を曲げてころがらんばかりに笑はれる。

失禮をも忘れて家族の者も吹出す。

大げさにいふなら、笑聲ドッと四方に擧がるの光景裡にあつて、例の如く泰然自若たる元帥は、われ關せず焉の態度で、師匠番たる下男に敎はり敎はり五本目に始めて完全なのを掘り出し得たので、ホッと一呼吸して道具をなげ出し、『何でもむづかしいものだ』とボタボタ垂れる顏の汗を拭はれた。

元帥と主治醫

元帥の主治醫は加藤正次郎氏とて、東京市外柏木に住む熱誠篤實の醫師であるが、然し博士でもない。然し元帥の主治醫として、同氏は十六年間も元帥の脈を拜診して居る。

次は同氏の物語りである。

元帥は十數年來一度も私の治療法に不服を申された事なく總てをまかせてくれました私は名もない一介の町醫ですが、どうした御緣か、世界の偉人の身柄をおあづかりする光榮をになひ全く身に餘る大任だと考へ、萬一にも間違ひない樣にと努力して來ました。云々

と。

柏木の加藤さんの家はそれは〳〵小やかな構へである、そこから番町の東鄕邸までは自動車で凡十七分かゝるさうだが、晝間など急の電話でかけつける時はおわい屋などが大久保邊の狹い路地でウロウロしてゐる時はもどかしくてならないと加藤氏は、いかにももどかしさうにぎごちない手つきで說明する。

世界的偉人の體を十六年間も預つてゐる町醫者加藤先生――しかし元帥の健康を知る者は多くても加藤先生を知る者は極めて少ない、加藤先生はしかして自らを語る事少なかつた。

氏は三河の山奧信州境の一寒村の出身で、志を立てゝ上京、伊藤公の主治醫だつた小山善氏の立關番となり刻苦精勵しらずしらずの間に腕に實力を蓄へ、當時の侍醫故橋本綱常博士などもその忠實な診斷ぶりをほめてゐたさうだ。

小笠原子爵令嬢と元帥

小笠原子爵令嬢は、今大阪の佐々木といふ實業家の所に嫁いで居られるが、その幼さい時分からよく元帥の所に伺つて、元帥に非常に可愛がられてゐた。

先年愈々嫁がれるといふ時に、子爵がそのことを話されると、非常に喜ばれこれまでにもいろ〳〵なものを書いて下さつたが更に愈々嫁ぐといふので『龜鶴念壽等し』といふことを書いて贈つてやられた。

今も子爵が元帥邸に行かれる度に『大阪の方ではお變りはないかな』と必ず言はるゝ。これによつても、元帥が如何に溫かいものを持つて居られるかといふことが分るが、恰度同子爵の令嬢達は、殆んど自分の祖父さんに對するやうな氣持で、元帥のことを言ふと氣違ひのやうになつて騷がれるといふ。この心持がすべてに、所謂十萬の兵にも及ぼしたからこそ、日本海に於てあゝいふ立派なことが出來たものであらう。

殊に同子爵の令嬢が觀世音を信仰するといふので、特に普門品の中の最も大切な喝を書

かれたのがこれで（口繪寫眞參照）同子の令嬢は殆んど守り本尊のやうにして、始終拜んで居るといふ。

元帥一世一代の始末書

東郷元帥に一生一代の始末書を書かせた被告府下東大久保二七一、小沼方宮本高澄（三六）は十六日（昭和二年九月）東京區裁判所土屋判事から懲役八ヶ月の判決言渡を受けた。

容易に揮毫の依頼にも應じない元帥の始末書なるものは西神田警察署宛のものゝ元帥自筆で美濃紙と墨痕鮮かに書認めてある。

始末書

麹町區上六番町三十七番地
東郷平八郎

右者今般御署に於て御尋ねに相成候宮本高澄之件自分は嘗て一面識もなく且教育勅語書其他の揮毫の依頼を受けた事實無之此段始末書を以て申上候也。

昭和二年七月二日　東郷平八郎

被告の高澄は三笠艦乗組の下士の子で、父が元帥の身近くで名譽の戦死を遂げた縁故で『元帥の書を貰つてやる』と、四谷元町松平伯爵家々令の村上を巧に欺き伯爵家祕藏の「古事類苑」を借出し、田中首相邸では高村執事から「薩長回天史」をせしめ、内田海軍政務から四十圓を引出した詐欺師である。

一番痛手を受けた村上家令は大いに憤慨し、始末書が驚く勿れ原稿紙で八枚といふ長論文であつた。

東郷さんの哄笑

東郷元帥邸の古びた玄關に客があつた。

用件はたのみごとなので直接元帥に會ふ前に執事への取次を申し入れた。

鹿兒島から出て來たばかりの書生は心持ち左の肩をあげて、『ひつじさんはたゞ今參内中でごわす』

客は不審がつて『執事さんが參内したんですか』『さうでごわす、ひつぢさんは今朝參内してまだお歸りはありません』

客は執事の參内はをかしいと思つた。

そして幾度も幾度も念を押した書生はむつとして、

『あんたはわからん仁でごわすな、ひつじさんは不在ぢやと申しとるにな』

といひながらぴしやりと戸をしめて引込んでしまつた。

夕方、元帥は自動車で御所から歸邸した、夫人が軍服を著替へさせてゐるところへ書生が來て、けふの訪問客の一件を頗る憤慨しながら話した。

鐵子夫人は不思議に思つて、

『でも、その時刻には執事さんはゐたぢやないの』

『奥様閣下はかうしてたゞ今お歸りになつたばかりでごわすもひつじさんは留守だつた

ぢやこわせんか』

『？』

だん〳〵書生の話をきくと元帥とひつじは同じ事となる。

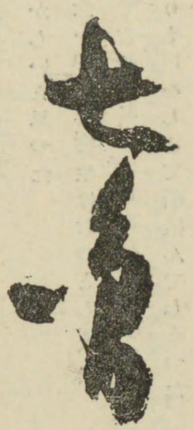
そして書生は、

『閣下はひつじさんではないのでありますか』

『主人は主人、執事は執事さんでせう』

書生ますますわからぬ樣子で、

ニコニコッと笑つたと思ふとウワッハッハッハッ……と大口を開けて腹を抱へるやうにして哄笑した、こんな大きな笑ひ聲をつれ添うて以來五十年、鐵子夫人は後にも先きにもたつた一度聞いたのであつた、めつたに笑はぬ元帥にとつて、恐らく生れてはじめての笑ひであつたらう。



元帥軍令部長時代の自筆借用證書
金七圓借用
小笠原子爵より借用證書

『でも奥樣は昨晩小笠原樣(長生氏)の奥樣と宅はひつじですとおつしやつてゞはごわせんか』

今までだまつて話をきいてゐた元帥は突然

『ひつじはおいの生れ年ぢやウッハッハッハッ……』

元帥は和服の帶をしめるまでドウしても笑ひやめることが出來ないと云ふやうに笑ひつゞけた。

元帥は弘化四年ひつじ年の生れである。

元帥とネルソンの遺髮

元帥とネルソン。此兩者は東西に於ける二名將——海戰史上——のである。

何れもが、祖國の爲に一大決戰を試みて、祖國を九鼎大侶の安きに置かしめし事、更に帥決戰上に於ける悠揚迫らざるの態度の如き皆然りである。

嘗てネルソンの遺髮を元帥の下に英國から送り屆けられた事のあるは事實で、爾來元帥邸に於いて硝子瓶の中に七八本の髮が入れられ保存されてあつたがその後どうなつたものかつひに元帥邸に於て見當らなくなつてしまつた。

元帥も非常に遺憾がつてゐられるが何としても見付からぬさうである。

元帥思ひの大北氏

昭和三年の春、元帥が可なり重病だつたことがあり、その事が新聞に出た。すると伊勢の神宮に關係を持つて居る人で、大北壽長といふ人がある、その大北氏が小笠原子爵を訪ねて來て、元帥は御病氣ださうであるが、如何にも心配である、肺炎で咳が止らないといふことを聞きましたが、鯉の生血を飲ませると宜いといふことですから、苦心して生かして持つて來ましたと言つて、鯉を生かして持つて來た。

餘りに篤實なことであるから、同子爵が元帥の所へ電話を掛けて、その人を連れて行つた元帥家では、喜んで鯉を受けられたので、その人も滿足して歸つた。

歸つてからも何とかして元帥の達者になられることを祈つて居る内に、伊勢神宮が御遷座になつた。その御遷座の御通りの道の上に、千枝の杉といふ杉があつた。この千枝の杉といふのは千年以上經つて居るもので、嘘にも千年以上の杉といふのは千枝の杉だけなのである。ところが恰度御通り筋に當つて居る所の枝が枯枝である、若し萬一のことがあるといけないといふので、晝の内は參拜人が澤山あるから、夜一萬燭光の明りを點けて木を切り倒すことになつた。

その倒した枯木を壽長といふ人が頂戴して、それから達摩彫りの名人、――この達摩彫りの名人は千體の達摩を彫つた人でこの人と相談をして、達摩を彫つて元帥に贈らう、達摩は不倒で倒れない、目出度い意味でもあるし、又倒れないといふ意味は精神的に至誠一貫で、目的を必ず達する、日本海々戰に敵を破つたといふ意味にも適ふといふので、千體達摩を彫つた人が壽像を彫らうといふことになつた。

元帥へ贈つた達磨像

始終呪文を唱へて、千體彫つた

よりも骨が折れたといふ話だ。それで三體彫り上げその内の一つを元帥に贈り、その一つを清浦伯爵に贈り、一つは小笠原子爵にやつたのがこの寫眞にあるものだ。

ところが壽長といふ人が、元帥はこの度もいろいろ軍縮のことに就いて御心配だらうといふので、恰度二十九日、今度は鰻を持つて出て來た。小笠原子爵はその時不在だつたので執事にこの鰻を東郷家へ上げて置いて下さいと言つて置いて行つた。

子爵は歸つて來て、そのことを聽き、元帥にそれを屆けると、元帥は非常な喜びであつた。

元帥の御家庭

渡邊兼次郎氏述

（註）渡邊兼次郎氏は現在濱松市板屋町にて石油商を經營せる人で、非常な東郷元帥崇拜家である。大正十一年の震災當時は元帥邸を警護したる功に依り、その後元帥より正氣の歌の眞蹟を贈られたる事は本卷口繪寫眞版にも掲げたる通りである。左の文は渡邊氏が元帥に親炙しての感慨である。

大正十年五月二十日、午前九時頃、私が元帥邸へお伺ひしました折、元帥夫人より承つたお話に依ると、

元帥がまだ海軍少尉時代の月俸は、金貳拾五圓であつたといふ。當時品川町の萬屋といふ家に間借りしてゐられたが、貳拾五圓の給料では實母樣とてつ子夫人の三人の糊口には不自由勝ちであるところから、元帥には内密に毎日主人の留守の間に賃仕事の内職をしなければならなかつた。その内職といふのは、マッチの箱貼りで、御兩人が馴れぬ女の手で、せつせと續けられて多いときがやつと一日四拾錢、それもお洗濯や家事のために、二拾錢にも足りない日も少くなかつた。萬屋の前は汽車が通つてゐて、車窓から家の中の樣子が覗かれるため、御兩人は人目をはゞかつて、内職のマッチ箱の山に風呂敷をかぶせて、外から見えないやうにしておかねばならなかつた。そして御主人（元帥）の歸宅時分になると幾個ものの風呂敷包みを、そつと押入の奥などに祕しておかれるのであつた。

その近くに間借生活者や、長屋住の人が少くなかつたので、井戸端には近所のおかみさんが十人も二十人も集つて、列をつくり水汲みの順番を待つといふ始末だつたといふ。その間も内職のマッチ箱貼りの仕事の能率を下げるので、夫人の心をいら立たせたといふ事で

あつた。

斯くの如く元帥の少壯時代に於ては、辛酸をなめられたのであつた。

元帥夫人は尙今日に到つても、舊時の貧困時代を忘れられず、女中を相手に手拭をねえさま被りにして臺所に立働かれるのである。

夫人が語られるには『かうして働いてゐる婦人の身でも、宮中へ伺候するときは、席順が第一位であります。これに依つてみても、主人が如何に御皇室より好遇されてゐるかを思ひあはされます。』

尙若夫人(長子夫人)及元帥夫人の結髮については、かつて髮結なぞその他人の手を要せず、常に自ら結ひ止げられるといふことであります。

元帥の大喝

元帥は小笠原長生子爵の話によると緊張して居ると云へば緊張して居ると云へるが、怒らぬと云へば絕對に怒られぬ。

併し低い聲であるが、叱られる時にはヒリッと來る。

此頃はないが、昔は隨分大喝された事があつた。

丁度日露戰爭が濟んで凱旋したばかりであつたが、戰死者の大法會を青山の廣場で盛んにやつたことが有つた。

其模樣を寫眞に撮らせて遺族に贈つたら喜ぶだらうと云ふので、私(小笠原子爵)は大本營の幕僚をして居たが、元帥に斷りなしに、私一存で寫眞師を連れて來て撮らせた。

注意を與へて置いたにも拘らず、背廣か何か着込んで技師がやつて來た。

愈々祭典といふことになつて、遺族が大勢寄つて居る時に、元帥は冥想して居られたが、一寸眼を開けて見ると中央に寫眞機を立てゝやつて居る。

私を呼んで『あれは何んだ』と言はれますから、『あれは今日の此儀式を寫眞に撮つて本に拵へて遺族に贈つたら、今日列せられない者、參列した者でも記念になると思ひまして』と云ふと『誰に斷つた』と、斯ういふのである。

それから私は

『よいと思つてやりました』

と言ひましたら、叱られたのです

『下げろ!!!』

と言はれたが、ヒリツと來た、早速下げたけれども、彼に撮らせて目的は達したが、成程自分が悪かつたと思ひました。

愛憐草木に及ぶ

曾つて東郷元帥は、東宮御學問所總裁として沼津御用邸に奉仕の砌、某所を散策した事があつた。

折りから足もとの草の中に、樟樹の芽生が四五本船板等の積み重ねられた間に壓されて延びんとして延びる事が出來ない樣であつた。

これを一見した元帥は、

『ヤ、これは可哀想ぢや』

と、忽ち丁寧に根曳きして、半紙を取り出してこれを包み、當時元帥が宿舍に當てられてあつた三島館に歸るや、早速件の樟樹を庭の一隅に手づから植ゑ、水などやつて、さて一憩し乍ら、これを眺められて、

『ヤレ〳〵これで樟樹も大丈夫、成長疑ひなしぢや。』

一斷千金

元帥は如何なる緊急を要する問題でも、自分の腑に落ちない事項に對しては決して決裁を下さなかつた。

靜かに考慮熟思するを常とした。

而も一たび之れを決した以上には、他から如何なる進言があつても、又如何なる批評が起つても、斷々乎として所信貫行に邁進した。

從つて此の意味に於て東郷の强情は有名なものになつて了つた。

何に食はぬ顔

これは元帥が軍令部長時代の話。

横濱に入港した某國の艦隊は、その將校を東京のさる場所に東郷軍令部長より招待されて一席の宴を張つた事があつた。

何にがさて世界的の大英雄からの招待とあつて悉く奮つて出席を希望し、遂ひに已むを得ず抽籤法によつて之れを選定すると云ふ樣な有樣であつた。

中に某艦の一青年將校は武運？　拙なくしてその選に洩れたので、遺憾此の上なしと、遂ひに斷然意を決して祕かに上陸し、その宴會場を確かむるや、定刻に至つて逸早くも元帥に近づき、眞先に握手を替はし、飛鳥の如く外に出て、直ちに歸艦、何に食はぬ顔をして澄まして居た。

禁酒制食

萬事に負け嫌ひの元帥は、元來酒は好んだのではないが、たゞ其の壯年時代同僚と會飲し負けるが厭やさに杯を重ね、一時は大分量も進んだ時代もあつたが、其後老齢に及んでも來客などあつて興至れば、夜も徹する樣な場合も時にあつたが、東宮學問所總裁となつて以來は嚴に酒を斷ち、尙壯時は中々の健啖であつたが近來は大いに節制につとめ、老いて愈ゝ健康は增進されて居る。

日宗諸山の揮毫

元帥は日頃日蓮を崇敬し凱旋後先づ日宗の名刹、府下堀の內妙法寺に、片岡出羽上村の三將軍と共に參詣し、こゝにて貫主日恕僧正と卓を圍みて淸談を交はし、晝夜を共にして半月

をこゝに過ごして辭去した。

同寺の表玄關にある四將軍手植の月桂樹は實に此の時の記念である。

尙元帥は日宗諸山へは喜んで揮毫を奉納し、身延山には『至誠』の題額を納めてある。

又以てその信仰の一端を知る事が出來る。

武士道の典型

飽くまで謙讓にして質朴なる元帥は住宅なども極めて簡素なものであつたので、ワザワザ元帥にお目にかゝらんとして遙るゞ尋ねて來た外國人等は、狹隘なる邸宅を眺めて呆然たる事數々であつたと聞く。

『……日本の國民は何故にかゝる大偉勳者に對してあんな小さな一小平屋へお住ひさせて置かれるか。それで平氣で居るとは、愛國心の强烈な國民として不思議でならぬ。』

と云ふ樣な質問を發するものもあつた。

しかしそこが日本武士道の大なる特長として誇らねばならぬ所ではないか。

力によつて權をとり權によつて暴を働く樣な、そんな者は日本の武士には決してない。

況んや元帥の如き特にその典型にして、謙讓、抑遜質實精勵、名聲愈々高くして、益ゝつゝしむと云ふ主義であられる。

外人の東郷觀

英國民の東郷觀

英國皇帝戴冠式御參列の依仁親王同妃殿下へ隨行として海の東郷大將は陸の乃木大將と共に明治四十四年四月十二日加茂丸にて横濱出帆、海路恙なく同六月七日無事英京倫敦着、嚴肅盛賑なる同儀式に參列し、朝野割れる樣な英國民の大歡迎を受けた。後元帥は英國各地を巡視し更に歸途北米合衆國を訪ひ、こゝに於ても全州を沸騰させる大歡迎を受けた。これは當時英米大新聞が單刀率直に元帥を觀察、評論せるもので、ここには英國に於ける部分を飜譯したがこの興味ある外人の元帥觀の大部分は次の第三卷に收錄することにした。

日本名士の來訪、東郷大將と乃木大將

東伏見宮殿下並に同妃殿下には非公式の英國御訪問の爲め、本日チルベリィに御到着遊ばされ、直ちに特別列車にてセント・プランクラスへ赴かれた。

東郷、乃木兩大將も日本使節の一員として戴冠式列席の爲め加茂丸にて着到。是等日本名士は、チルベリィに於て日本大使館附軍武官加藤海軍中佐の出迎へを受け、更にセント・プランカに於ては、日本大使、同大使館員一同、並に滯英中の日本軍士官等の華々しき歡迎を受けた。

一行は自動車に登乘、ハイド・パーク・ホテルに向け出發したのであつた。

――一九一一・六・七　クローブ誌

東洋のネルソン、東郷大將來訪

ロンドン・金曜日夜ウエストミンスタア・アベィに於ける戴冠式に列席の爲め、烈强の代表は陸續として各列車各汽船にて來訪中であるが、就中列席の諸大使及び諸高官中、日本代表たる東郷海軍大將並に乃木陸軍大將は一般國民の注意を惹くであらう。

是等日露大戰の勇士は、今朝セント・プランクラス停車場に到着したのであるが、兩將軍の御同伴申上げてゐた東伏見殿下並に妃殿下は東洋のネルソン並に旅順を陷落せしめたる勇士に比しては、殆ど些の注目をも惹かなかつた。余は、今朝兩將軍と會見するを得たが、日露戰爭當時、度々新聞紙上に掲げられたペン畫の肖像と全く同一であつた。兩將軍は髭のある小男にして、然も胡麻鹽で、短かく刈り込んでゐた。不思議な速度で活動する目は、東洋的な表面は無表情に見える容貌と奇異な對照をなしてゐる。寡言ではあるが、その態度の中に、偉大なる人格と蘊蓄深い力とが藏されてゐる。

本日ステイシヨンに集まれる群集は東郷大將に見えんものと頗る熱心であつた。大將

は五尺足らずの人物であるから、是等好奇の目を避ける事も亦容易であつたであらう。大將は久し振りでロンドンを訪問したのである。最初の英國訪問より殆ど四十年の年月が經過してゐるので、當時は練習船チーセスター號の士官候補生としてゞあつた。東郷大將は今朝チルベリイ上陸の際、グレイブセンドに今尙停泊中の老練習船を見る事が出來たのである。ロジエストヴエンスキイを擊退した大將の公式豫定の中に、此の老練習船の訪問と、一八七三年初めて海軍戰術を學んだグリニッチ海軍士官學校訪問とが編み込まれてゐると聞いた。

東郷大將は、山縣陸軍大將並に大山陸軍大將と共に、メリット勳章を授與された一人である。

——一九一一・六・七　　メース・メイル誌

東郷は語らず

目下ロンドン訪問中の最も興味深き人物は、日本のネルソン、東郷海軍大將である。

然れども、彼も一般の軍人と等しく、甚だ謙讓なる人物にて、訪問者との會見を避け、我等國民が大將に關する知識慾に燃えてゐるにも拘らず、當地に於ける公式使命完了までは、一般的には會見談話せざる旨を申し出した。とまれ、余に對する此の申出は、單に一日本人としてなされたるもので、大將も余輩を忿激せしめぬやうと懸念して居られる模樣である。

勿論、社會より隱れんとするものではなく、我等同盟國日本の使臣として、キング・ヂョウヂの戴冠式列席までは、愼重の態度を持するの意である。

——一九一一・六・一六　　ウエスタン・マアキユリイ誌

皇帝陛下に拜謁

とかうする中、モオルに於ては、コンスチチユウション・ヒルに沿つて、バッキンガム宮殿の周圍は、十一時三十分、皇帝陛下より公式の拜謁を仰せつけられた外國使臣及び代表の到着を見物せんとして大群集が詰めかけた。

馬車は、見馴れぬ眼にも素晴らしく美くしい外國の制服の影をかすめて、幾臺となく駛り

去つた。彼等は總て正裝を凝らしてゐた。

皇帝陛下には是等外國使臣に國賓室に於て拜謁を仰せつけられ、陸軍大將の御制服にて皇后陛下と共々に臨席になつた。

午後には、午前の拜謁に洩れた四ケ國の使節を御召し出しになつた。即ち、日本、支那、土耳古、波斯の代表で、各國君主の名に於て我が皇帝陛下に外國勳章を捧呈した。

即ち、東伏見宮殿下は菊花章を、ツァイ・チエン殿下は支那女王よりの贈物を、ミルザ・モハメッド・アリ・カン・アラエス・サルタネエノウヤン殿下はアグダス勳章を捧呈した。

——一九一一・六・二一　デイリー・ミラア誌

歴史的壯觀

全國民並に全帝國が永き年月に亘つて、此くも熱誠を込め待ち奉りし御儀式は、昨日ウエストミンスタア・アベイに於けるセント・エドワードの寶冠をキング・ヂョウヂ第五世陛下の頭上に戴せ奉る儀式を以て完了せしも、此の如く繪畫的にして象徴的なる中世風の美觀は

現代歐洲に在つては稀に見る處である。

夜をこめて、人々は少しでも好い場所を占領せんものと、皇帝皇后兩陛下御通行の沿道に參集してゐた。此の日は陰鬱に曇つてはゐたが、然し何處となく活氣に滿ちて明け放れた。しかも日將に明けんとするや、祝砲の響は靜かなる朝の空氣を振動させ、教會の鐘は其處此處より、心地よく響き始め、街路には時を經つに隨つて群集が現れ始めた。

公園に天幕街を作つてゐた軍隊は、其の野營地を離れ、警官の部隊は行進を始め觀覽場は既に滿たされ始めた。廣いロンドンの家々は、此の祭典を祝し、且つは皇帝皇后兩陛下に、國民の忠誠を表示せんが爲めに、國旗や忠誠を込めたる裝飾が施されてゐた。

此くまでに雜鬧した事は曾てなかつた。數萬の群集が昨夜は街々を行進し、忠誠の意を表する爲めに歡喜して萬歳を唱えてゐた。交通を遮斷したのは未だ早朝のことであつたが、嚴然たる境界や警官の交通整理の努力に依つて、沿道の雜鬧を緩和された。かゝる際に於ける警察の努力は最も至難なる事業で、彼等は非常なる群集に備へねばならず、一方、ビクトリア女王の戴冠式當日の有名なる事件の如く、警察官の手より洩れたる群集を制止する方法をも講ぜねばならぬ。

然も、此の緊張と周到なる注意心は、街路に於ては最早拜觀の餘地なしと斷念せざるを得

ない觀衆に對して、全然反對の結果を及ぼしたのである、彼の頑丈なる境界柵は全く不用であつた。群集がよく秩序を保ち、且つ忠誠の心を披瀝せしは實に稱讃の外はない、彼等は全く指揮の儘に從つたのである。拜觀の人々は、徹夜の疲勞にも拘らず、此の長き沿道に亘つて何等の事故すらも生じなかつたのであつた。

參列の軍隊は實に四萬五千に達し、其の麗しき軍服は、街路の裝飾に調和し、御行列の壯觀に一入の美觀をさへ添へた。朝の少時間内ではあつたが物凄い夕立が晴れた後朗らかな天氣となつたが、多少の薄曇りは續いた。然も兩陛下がバッキンガム宮殿に發輦の際には雲を破つた太陽は輝かしくも其の場の光景に光を注いだのであつた。

戴冠式列席の爲め來訪せる各國の君主並に使臣の美くしい行列は赤や紫や色とりどりに粧つて、寺院に向けて行進を開始した。次いでプリンス・オブ・ウエイルス殿下はガアタアの勳章を御佩けになり、メリイ殿下並に他の王子殿下と共に出御になつた。

再び太陽が光り輝いた時、此の大式典へ行幸の爲め、皇帝皇后兩陛下には、ジョウヂ三世以來戴冠式專用の白馬八頭立ての豪華なる御馬車に召して出御遊ばされた。軍隊の捧げ銃軍樂隊の國歌吹奏と共に、沿道の群集の萬歲の聲は實に天地に轟いた。遠くハイド・パアクやロンドン塔の彼方からも、此の熱狂に呼應してドッと萬歲の聲が擧つた。

寺院は宛然美くしい花壇の如く、スタンドも假足場も盡く青や茶の天鵞絨で掩はれ、廻廊には第一公式の禮服を纏つた貴族達が控へてゐた。此の壯嚴にして然も心を擊つ儀式は我等大英國民の心に言語に絶した力を以て迫つて來る。一擧手一投足盡く過去の象徴と追憶に他ならない。かゝる雰圍氣の中に儀式は行なはれた。英國貴族及外國の皇族殿下の面前に於て王冠は皇帝陛下の頭上に戴せられたのである。喇叭が吹奏された。スピセット港停泊中の英國艦隊の禮砲が殷々と鳴り響き世界に反響を及ぼしたのである。

王冠を戴き、王節並勳章を佩き、戴冠式を終へさせ給ふた皇帝皇后兩陛下は寺院を後に、再びバッキンカム宮殿に向はせられた。

ベル・メルよりピカデリイに至る沿道は、陛下の御馬車が見え初むるや喜びの聲を洩らし寶石輝く王冠を召された皇帝の輝かしき御姿を拜し奉るや、群集は一時に萬歲の旋風と化した。

鹵簿が宮殿に達するや、從來の戴冠式の先例を破つて、兩陛下には王冠王衣を召されたまま露臺へ出御遊ばされ、數分間帝國の精鋭と熱狂せる拜觀者を御覽あつて御滿足氣に拜せられた。此の壯大なる儀式は實に破天荒なる熱狂を以つて迎へられたのである、尙熄まぬ萬歲の聲と何處ともなく起る國歌の響は天地をも振動させた程で此の忘れ難き忠誠の

熱狂裡に御儀式は終つたのである。

警察の手配は頗る行き屆いたもので、キチナア卿の率いる軍隊の一隊ですら及び難き感があつた。終始して一の紛糾すら起らなかつたのである。

夜十時、水晶宮よりの合圖と共に數千の篝火が今日の御儀を祝して一時に點火された。全國を通じて、市にも町にも亦村々に在つても、今日の式典を祈る宗教的な集りや、貧民の爲めの催し物、各種の御祭り騒ぎが催された。街と云ふ街は盡く裝飾され、夜と共に電飾されて實に目も醒むる許りであつた。

本國は勿論、各領土に於ても、陛下御戴冠の時刻には、祝砲が上げられた。トレント、バンクーバア、シドニイ、メルボルン、アデレイド、アウクランド、カルカッタ、ケイプタウン及其の他の町や村でも、同樣に祈禱會、催物、篝火、歡呼の聲を擧げて我等大英國民の一致の心を表したのである。

此の御儀式に領土の爲した役目も亦注目すべきである。領土の團隊中特に目立つたのはカナダの北西乘馬官隊及濠洲の青上衣の一隊である。領土の首相達に交つてホザ將軍も寺院の晴れの御儀式に列席の榮に浴した。印度も亦その皇族方並びに土民軍を以て御儀式に連なつたのである。

百八十五隻の戰艦整列

——一九一一・六・二三　デイリイ・メイル誌

陛下には今朝十時三十分ヴィクトリア停車場より特別列車にてポーツマスへ御發車、スピセット港に集合せる大艦隊の戴冠式記念觀艦式御執行の御豫定である。

此の壯觀に參加する戰艦は既に各々其の部處に就き、總數百八十五隻、內英國軍艦百六十七隻にして、十七列强を代表する外國軍艦十八隻の內、日本のみは二隻の軍艦を派遣した。

全艦隊は五列に整列し、サウスシィ・カッスルよりリイ・オン・ザ・ソレントに至る六哩に及ぶ廣大なる地域を占め總噸數に於ても、其の威力に於ても、かく海軍力の集中せられたることは英國はおろか他の列强に於ても曾つて見ざる處である。一八五六年クリミヤ戰爭直後、ヴィクトリア女王戴冠記念の觀艦式に二百七十隻の軍艦の參列したるは事實なれども、其の威力の少弱なりしことは、其の總機關力僅かに我が最新巡洋艦インヴィンシブルの夫れに劣るを以て知られた。千八百九十七年、女王のダイアモンド・ジュビリイの節、再び百六十

五隻の軍艦スピセッドに集まりしも、當時の排水總噸數五十七萬噸は、今日キング・ヂョウヂ陛下の御閲艦遊ばさるべき百萬七百噸の半なるに過ぎぬ。

弩級戰艦十七隻

參加英國軍艦次の如し。

戰艦……三二
裝甲巡洋艦……一五
假裝巡洋艦……八
巡洋艦……五
偵察艦……五
水雷敷設艦……一
彈倉船……一
驅逐艦……六九
水雷艇……一二
潛水艇……八

觀艦式に水雷敷設艦及び潛水艦の出場したる事、是を以て嚆矢とする。

されど最大の興味は海軍科學の最近の功績を代表する、英國及び外國派遣の左の弩級戰艦十四隻である。

英國

ネプチユーン。一萬九千九百噸。二十七・七馬力
セント・ヴインセント。一萬九千二百五十噸
ロリンウッド。一萬九千二百五十噸　二十四馬力半
ヴアンガアド。一萬九千二百五十噸
ベラロフオン。一萬八千六百噸
シユバアブ。一萬八千六百噸　二十三馬力
テメレア。一萬八千六百噸
ドレッドノウト。一萬七千九百噸。二十三馬力
インデフイータブル。一萬八千七百五十噸。四十三馬力
インドミタブル。一萬七千二百五十噸
インフレキシブル。一萬七千二百五十噸　四十一馬力
インビンシブル。一萬七千二百五十噸

米國

デラウエア。二萬噸。二十八馬力

獨逸

フォン・デル・タン。一萬九千百噸。五十五馬力

デラウエアは今回參加軍艦中最大最强の折紙附で、尙同艦の偏舷齊發は、我が精鋭ネブチユーン八千七百八十一封度及び、ドレッドノウトの六千九百八十封度に比し、九千五十七封度である。フォン・デル・タンは我が巡洋艦インヴィンシブルに海上速力に於ては多少劣ると雖も、機關力は優れたる點に於て群を拔いた。

外國大艦中、佛蘭西のダントン號は最も記するに足るものにて、ドレッドノウト級に殆ど近い。此の艦は十二吋砲四門と九・四吋砲十二門よりなる砲列を有し、煙突を多く有する點に於て、當觀艦式中是に及ぶものがない。日本の鞍馬は巡洋艦とは云へ速力早き小戰艦の趣がある。外國諸艦中、英國式鼎足檣を有せるは此の艦のみ。墺多利のラデツキイは地中海に於ける最强艦にして十二吋砲四門並に九四吋砲八門を登載した。

外國艦列最東端に停泊せる白き軍艦は輕快なるアルゼンチンの巡洋艦ブエノス・アイレスにして、四本の煙突の中二本に探海燈臺を裝置したる新奇なる軍艦は、伊太利裝甲巡洋艦サン・マルコである。

次に拜觀者は三十八節の快速を有せる世界最速のスウイフト及びタアタアを小艦の中

に發見するであらう。スキフトはA列にタアタアはB列に潛水艇に續いて位置した。D一號及D二號潛水艇は無電設備を以て知られ、第一に無電裝置を受くべきものなるのみならず潛水艇中世界最大のものである。

觀艦式は皇帝陛下が南鐵道防波堤御到着と共に開始せられ、ヴイクトリア・アンド・アルバト號へ御乘艇に先立ち、元帥アーサア・モアー卿並にボーツマス貴族の御出迎ひを受けさせ給ひ、午後二時御召艇はアイレン快走艇を先行とし、アレキサンドラ、エンチントレス、及司令官乘艇フエア・クキーンを隨へて岸壁を離れさせ給ふ豫定である。

皇禮砲

御召艇が艦列内に進行するや、同艇よりの合圖により滿艦飾を施せる軍艦より皇禮砲の發射を開始し、二時半御召艇艦列に入り、御閲艦遊ばされ、四時十五分、佛蘭西戰艦ダントン及智利巡洋艦チャカブコ間に投錨、直ちに英國十七旗艦乘組の將官並に外國將官及び將官の乘艦せざる外國軍艦指揮官は短艇に登乘し御召艇に赴き、陛下の御拜閲を賜る豫定である。

御拜閲後直ちに拔錨埠頭へ御歸航遊ばされ、御召艇艦列外に出づると同時に、ヴィクトリア・アンド・アルバアト號より合圖(あひづ)により、再び皇禮砲を發して、正六時南鐵道防波堤に着艇の筈と承る。

夜九時、ロード・ネルソン號よりの合圖で、全艦隊はイルミネーションを點じ十一まで繼續し、消燈と共に此の戴冠式週間を終るものとされてゐる。

觀艦式參加に要する英國海軍の總支出八千一百萬圓、並(ならび)に外國海軍の總費用一千五百萬圓といふ。

——一九一一・六・二四　デイリイ・メイル誌

外國軍艦及び合衆國の巨艦

十八隻の外國軍艦は本日の觀艦式に參加する豫定(よてい)である。此の中最大なのは合衆國の戰艦デラウエア號であつて排水噸數實に二萬二千七十五噸、我が大英海軍の新鋭艦が十三半吋砲を以て武裝せるやうにデ號に在つても十門の十二吋砲を首尾錄に登載し、加之、十四

當時の誌上に描かれたる東郷大將

（其一）

門の五吋速射砲を有してゐる。

然し、來訪中の軍艦中、最も海軍研究者の興味を刺激するのは、獨逸巡津艦フォン・デル・タン號であつて、同艦は最近三ヶ月に亘る南亞米利加沿海の遠洋航海を終へて來着したものである。此の艦の格式は頗る我がインデフィータブル艦に類似し、艦首、艦尾及兩舷に二門づつ口徑十一・四五吋砲八門を有つてゐる。

砲塔には中央に第二煙突の設備があり、尙五・九吋砲十門を登載してゐる。而も舷側齊發の總重量は、我が最高記錄の七千四十八封度に比し、僅かに六千七百二十二封度に過ぎない。速力に關しては試航海時バアスン・タアビンを以て廿七節を出したならば、夫れ以上を出し得る事は言ふまでもない。

佛蘭西代表艦は戰艦ダントン號である。建造に三年以上をも費した同艦及びその姉妹艦五隻は我がロード・ネルソン號の模倣艦だが、第二級九・二吋砲十門に代ふるに十二門の九・四吋砲を以てし、排水噸數も一萬八百二十七噸、速力は一節を加へられた。英國艦は九・二吋砲二門を備へた砲塔四個が甲板に有つて、單砲の砲塔を兩復砲塔の中間の舷側に有るのに反し、佛艦に在つては單砲塔に代ふるに二門の九・四砲を有つ復砲塔を以てされてゐる。九・二吋砲に於ても是を二門宛登載すれば發砲の割合を引き下ぐる事ができるが、此の樣式は

重量と場所の問題に餘儀なくされたものである。佛蘭西砲の口徑の偉大なるは發射力をも增し、九・四吋砲にて四百八十五封度の彈丸を發射する事が出來る、英國砲よりも百五封度以上の發射力を有し。且ダントン號の十二吋砲丸の重量は九百七十封度であつて、我國十二吋砲丸を正に百二十封度超えてゐる。舷側齊發重量も六千七百九十封度であつて、要するに我がロード・ネルソン號の巧みな改良の結果に他ならぬ。

日本軍艦鞍馬は快速を有する巡洋艦であつて、全然同國に於て建造されたるもの。舷側齊發重量四千四百封度である。

來訪中の外國軍艦表。

國名	艦名	樣式
アルゼンチン	ブエノスアイレス	二等巡洋艦
オーストリア ハンガリイ	ラデツキイ	戰艦
チリイ	チヤカブコ	二等巡洋艦
支那	ハイ・チ	二等巡洋艦
デンマアク	オルフアアトフイシヤア	裝甲海防艦
フランス	ダントン	戰艦

獨逸	フン・デル・タン	裝甲巡洋艦
ギリシヤ	ゲオルギス	裝甲巡洋艦
イタリイ	サンマルコ	裝甲巡洋艦
日本	鞍馬	裝甲巡洋艦
	利根	二等巡洋艦
オランダ	ヤコブ・ヴンヘエマスケツチ	裝甲巡洋艦
ノールエイ	アイツフォルト	裝甲海防艦
ロシア	ロシア	裝甲巡洋艦
スエーデン	フリヂヤ	二等巡洋艦
スペイン	レイナ・レゲンテ	一等巡洋艦
トルコ	ハムドイイ	二等巡洋艦
合衆國	デラウエア	戰艦

——一九一一・六・二四　デイリイ・メイル誌

觀艦式

土曜日に行なはれた觀艦式は、實に此の祭典週間の最後を飾るに適したものであつた。それは此の週間に行はれた諸種の壯麗なる儀式に決して劣らず、我等の感覺や想像力に强く響いたのである。然も我等の追憶に强く作用して、過去及現在に於て我等の偉大であつた實證を示したのである。何となれば、此の觀艦式が、我等に取つては最も切實であつたからである。寺院に於ける壯嚴なる儀式やロンドン市街を御通行遊ばされる新らしく王冠を戴かれたる皇帝陛下は勿論象徴的で如實で澄明ではあつた。然し觀艦式も亦象徴的なのである。否、それ以上の何物かゞある。扨て、殆ど一千年の傳統の上に立脚せる皇帝陛下と國人の神聖なる結合は、實に他の形によつて代表されてゐる。戴冠式や金曜日の行列に於て見るが如く我が國の成り立ち及び我が帝國の歴史は一目瞭然である。我が國の富力及び財源、並に限度及責任は前日の心に殘る祝典を見ても知らるゝ處である。我全艦隊は是等總ての物、否

それ以上のものの象徴であつて、然も象徴であると同時に壓倒的な事實なのである。卽、我等の力の海上に於ける表現に外ならぬ。他の凡ゆるものゝ地位であり保障なのである。若しも我國にして皇帝陛下がスピセッドに於て御閲艦遊ばされたる是等の海軍力を有せざりしならば、自由も國家組織も、文明も繁榮も、富も力も我等には何の役にも立たなかつたであらう。それのみならず、我等の偉大なる傳統や不滅の過去に對する追憶や、我等が成し遂げた高遠な理想すらも、單に我等が昔はかうであつたとか、又は他日の隆盛を夢みてゐたとか云ふ悲しみや後悔を一層痛烈に感じせしめる手段となるの外はなかつたのである。是が國の内外に問はず、現實の政治に直面する勇氣と意志とを持つて我が國民に常に、海軍力の敎へてゐる學問であり、道德なのである。然も我等は、土曜日の壯快なる觀艦式を拜觀せる國民が著しく此の考を持ち、又此の印象的にして重大なる光景を讀み又考へた數百萬の人々の心の中に、此の考が一層深く根ざした事を信ずる時は、實に欣喜に耐へぬ次第である。

觀艦式後、陛下が艦隊に賜つた寛仁なる御勅語將士官や兵卒の精神的及肉體的の勞働を償つたものはなかつた。稱歎すべき軍艦の外容、並に艦列の精確さに就いての陛下の御鑑識は、實に二重の價値を有するものであり、二重に海軍軍人を喜ばせたのである。何となれ

ば、陛下御自身が海軍の軍人であり、且一海軍軍人として總てを判斷遊ばしたからである。我が社の通信員が送附せる完全な此の場の報告と寫眞とは、軍艦の偉力と總數及び完全なる組織が觀衆の心に深く刻み附けた印象が如何なるものかを物語つてゐる。學識と經驗ある者をして眞に驚嘆せしめた特色は、海軍力の比類なき展開の嚴然たる事實である。歷史始まつて以來、此の如く多くの軍艦が整然と浮んだ事は曾てなかつた。造艦術並に射擊の急速なる進歩は、此の度の觀艦式に參加せる軍艦中、九年前の戴冠式紀念觀艦式に參列したものは僅にマデエスチック級の艦のみである一事で十分證明されてゐる。舷々相摩して停泊し整列せる八隻の弩級戰艦は最も偉力ある艦隊である。一方、キング・エドワアドは第二隊に屬してゐる。新造戰艦同樣最新の巡洋艦は科學と金力の限りを盡されたものであり、驅逐艦スキフト號も亦然りで、三十六節の快速力を以て驀進し、多少速力の劣つた友艦を從へてゐる。とは云へ、學識高き批評家を昂奮せしめ感嘆せしめたものは單なる各艦の偉力及數のみではなかつた。外國に於ても大いなる軍艦は數多あり、尙且今も尙建造してゐるのである。かゝる批評家を有せる見物に印象し滿足を與へたものは、實に完全なる用意の一事である。卽ち艦も人も直ちに緩急に應ずる準備が整つてゐると云ふ事が出來る。少なくとも英國はプリンスオブ・エールス殿下が覺醒せよと仰せられし時、命のまゝに行動

して海での王者として振舞つたのであつた。

ウオーセスタア健兒

昨夜プリンセス・レストランに於て、キャプテン・エイ・エッチ・エフ・ヤング氏の主催の下に開かれたるヲーセスタア協會の第十八周年晩餐會は、それ自體已に興味深い上に、一八七四年老練習船ヲーセスタア號の乘組士官たりし伯爵東郷大將を當夜の正客となし、多く參會せる名士は、ブラッセイ伯爵サア・エドマンド・フレマントル大將、サア・エイ・エル・ダグラス大將トルウブリッヂ大將、サアタマス・サザアランドの諸氏にして、東郷大將の同伴としては谷口中佐、齋藤中佐、前大使館附武官加藤大佐、同じく出大佐、一等書記官吉澤氏、三等書記官柴田氏等であつた。

當夜の乾杯に對へて大將は次の如く語られた。『ヲオセスタアと云ふ名は私に大變なつかしい名前で、此の三十年間、一瞬だに忘れることを得なかつたものの一つである。再び此

の英國の土を蹈んで、永く胸に抱いてゐた願ひを成就することの出來得たのは、非常に喜ばしいことである。と云ふのは、再び此の懷かしいヲオセスタアを訪れ、親愛なる諸君に逢ひ度いと望んでゐたからである。今夜爰に御集りの紳士諸君と雖もあながちお互に全部が全部御知合ひと云ふ譯ではあるまい。年齢も違へば又職業も異なつてゐる。例へば私の如きは國を異にしてさへゐるのである。然し、爰に我々一同を繫く唯一ッの絆がある。即ち、我等の老練習船ヲオセスタアが夫れなのである。今日爰に諸君と相見えるを得て、私は我が青年時代の朋輩に再び相見えてゐる樣な心地がする。而して坐にヲオセスタアの甲板を飛び廻つた在りし日の追憶を深くするのである。私は今夜御出席の二三の諸君と共に、如何にして結び、如何にして繼ぎ合せるかを學んだ。あゝ今私には恩師キャプテン・スミスの姿や聲が思ひ出されて來た。スミス氏は私にとつては最も親切な先生であつた、最も寛大な船長であつた。先頃の日露戰爭當時、先生は私に種々親切な御手紙を書いて下さつた。私に取つて第二の母國英吉利から來たそれ等の手紙は、私を慰めもし又激勵をもしたものだつた。

註（右の文中ヲオセスタアとあるは、ウースターとも發音し記載したる事あり）

――一九一一・七・一

東郷大將に招かる

東郷大將は金曜日の夜、クラブリッヂ・ホテルに於て、英米兩國の友人を招いて晩餐會を催した。當夜の參會者を擧ければ、

デイスレリイ卿。サア・アーサア・ホルソン元帥。サアエドワアド・シイモア元帥。日本大使。サアアーチバルド・タグラス大將。サア・アーサア・モア大將。サア・イアン・ハミルトン將軍。サア・サイブリアン・ブリッヂ大將。サア・ヂエラアド・ノウエル元帥。ダンダス・オブ・ダンタス少將。ホン・サア・日ラムトン大將。ラスツロ氏。サア・フイリッブ・ワッツ・バアカア大佐。ヤング大佐。谷口中佐。齋藤中佐。加藤大佐。吉田機關長。正木中佐。コベル氏。增井機關中佐。柴田三等書記官。等々。

一九一一・七・七　　タイムス誌

東郷大將バロウ市を訪問

並に海軍造船所視察。

東郷海軍大將が島村海軍中將並に日本軍艦鞍馬、利根兩艦乘組士官水兵のバロウ・イン・フアーネス訪問は、本日モアケイン灣内ライトニング・ノオル・ボイに停泊中の鞍馬艦へ同乘組員の歸艦を以て完了せられた。

此の訪問中、天氣は頗る清朗を極め來訪の日本海軍々人は熱誠ある歡迎に深く心を動かされし模樣である。巡洋艦利根は鞍馬の高級乘組士官及水兵の一部を同乘せしめ、土曜日午前十時半、バロウ波戸場へ入港し、バロウ市長は歡迎の爲め、直ちに同艦に赴いた。其の後市の公會堂に於て、日本海軍士官並に三百の乘組員は同艦附き軍樂隊と共に、市會議員及大英陸海軍並に國防軍士官を伴へる市長の歡迎會に參列し、午後同公會堂前より、カベンドイッシュ公園に向けて病院及兒童の歡迎の行列と行を共にした。

公園に於ては、一萬二千の觀衆の面前に在つて小學兒童が、曾て戴冠式當日擧行せる野外

團體運動『六月の薔薇』を再び演じたのであるが、此のカアニバルは特に日本の訪問者を喜ばせた樣であつた。我が海軍々艦ハアミオン乘組員も次いで陸上に於ける大砲の操作の實演を爲したが、是また頗る興味深く、萬事順調に成功裡に完了した。

日本軍艦鞍馬並に利根乘組の四五十人の士官は、今朝、海軍造艦所の視察を行なつた。視察後、同會社の本部に於て晝餐をしたゝめたのであるが、造艦係長の發聲に依つて、大英皇帝並に大日本帝國天皇陛下への乾杯が行はれた。

營業係長ミラア氏はギカア會社々長及び重役を代表して次の如く挨拶した。「此の海軍造船所の訪問がたとへ短時間であつたにせよ、訪問者諸士に多少なりとも興味を貢献する所を持つ事を望むものである。而して、大日本帝國海軍の有力なる士官達が此くも大勢で同造船所を訪づれられたことは大なる喜びでもあり、且光榮でもある。當會社と日本海軍との干係は、從來非常に長年月に亙り、尙甚だ密接なるものであつたが、今後とても一層永く此の關係の續かんことを熱望する。會社としては今、諸君が視察を終へられた建造中の日本の大巡洋艦建造の御依頼を受けるに到つた稱讃に對しては、深く自覺する處はあるが、建造の曉には、曾つて我が造船所に於て製作した光輝ある三笠並に香取此の巡洋艦も貴下の勇敢にして熟練せる士官諸氏の手によつて、此上の働きを爲すものと信じて疑はぬ次第で

ある」と述べ、最後に此の週末をバロウに於て尤も愉快に過し、且つ母國への歸航の安靜にして快適ならんことを欲すると言を閉ぢた。

日本海軍側では大谷少佐が是に對へて『自分は出席の士官を代表して、我々に示された る貴下の御親切並に御もてなしに心からの感謝を捧げたいと思ふ。同時に、我等は兼ねて聞き及んでゐた御社の工場を此くも愉快に參觀するを得たことは實に喜ばしき次第である。此の室に集つてゐる我々の大部分は、直接又は間接に日露戰爭に參加したものであるが、今もミラア氏が仰有つた通り、御社の建造に係る帝國軍艦三笠が戰爭中頗る稀有の働きをなし得、尙今以て何等の損傷もなく我が海軍の有力艦の一であることを申すことの出來るのは我等としても非常な喜びである。

同時に、今朝我等が參觀した我が主要なる巡洋艦の建造を、此くも完備し、新式の設備ある貴社に託するを得たことを知るに及んで、我等として是以上の喜びはない。然も、本日我等が親しく立會つて知り得た處の貴社最善の技術及熟練を以て完成の曉には、此の巡洋艦も亦一旦緩急の際には三笠艦以上の働きを爲し得ることを信じて疑はぬ次第である』と述べて喝采を博した。

土曜日の夜、市の主要道路は悉く電飾され殊に公會堂前は赤白青の色電氣を以て最も華

やかに裝飾され、『歡迎』とか『キング・ヂョウヂ』とかの文字は美くしく輝いてゐた。ドユウク街は、八時より九時の間、ロンドンより、八時ファーネス・アベイに到着の筈の東郷大將が公會堂へ向はれる途次を見物の數萬の群集で埋まつた。が、大將の公會堂行きが十時に至るまで行なはれなかつた爲め、大部分の群集は失望したが、それでも尙殘つてゐた見物は盛に歡呼の聲を擧げた。

市の公會堂内は頗る素晴らしい光景を呈してゐた。正面の階段は種々の草木を以て裝飾し盡され、クヰンスホテルに於ては窓と云ふ窓の周圍は悉く赤白青の電光を以て裝飾し其の中央には花環の飾り付けがしてあつた。其の他數多の公會堂も悉く美くしく裝飾され、飾り付けに從事した市の屬吏も心からその出來榮えの素晴らしさに滿足してゐた。中尉の正服を着せる市長と市長夫人の招待に應じた知名の士の中でも各種の目も覺むる許りの正服を着けて出席した現役並に國防軍の士官は、一段の光彩を添へ、東郷大將がアルバアト・ギカア氏に伴なはれて市長夫妻と挨拶せる場面の如きは、實に感激に滿ちた光景であつた。

一九一一・七・一〇。　ランカシヤア・ポスト誌

グラスゴオに於ける東郷大將

過去數年に亙り當市を訪問せる興味深く且つ有名なる人物は頗る多數に上つてゐるが伯爵東郷海軍大將閣下に優る人物は先づなかつたと云つて差支へなからう。彼の海軍戰史上に殘したる不朽の名譽は素晴らしいもので、日露戰爭當時の大將の行動は今も猶我等に取つて思ひ出の新たなるものがある。大將の寡言なる態度は我等スコットランド人を魅するのであるが、此の點から目を轉じても、大將の東洋に於ける同盟國の海軍に於ける第一人者であると云ふ事實が、今回のスコットランド訪問に一大意義を與へてゐるのである。序ながら、東京よりの通信によれば、日英同盟の確實なる改正は、此の國の米國との仲裁條約の見地から云つて、三國間の紛爭の解決を得るものと信ぜられる。即ち、戰時中に於ける相互の扶助は、此の三國の中の或る一國が開戰中の國と他の殘りの一國乃至二國が仲裁條約を結んでゐる場合に在つては、通用しないと云ふ條文で、是は我が大英國の提案に係るものであるとは云へ、かゝる問題は決して惹起し相にも思はれぬことではあるが、又心から斯く

望む次第でもある。

一九一一・七・一二　グラスゴー・ニウス誌

東郷大將グラスゴー及びクライドを訪問す

グラスゴー市は本日日本海軍の英雄伯爵東郷海軍大將の歡迎に心からなる誠意を披瀝した。大將の當市訪問豫定は二日間にて、見物其の他プログラムに豫記せられた處は頗る多い。數多の日本海軍士官を同伴せる東郷大將はセントラル・ステイション・ホテルにてブレボスト卿の歡迎を受け、暫時休憩の後無蓋の馬車にて市廳へ向けて出發したるに、沿道は歡迎の市民あふれて頗る盛況を呈した。其の後、一行はコーポレイションの汽船に登乘し河を下航しヤロウ及ブラウンの造船所の參觀をなし、ブラウン造船所にて晝餐をしたゝめ、次いでクライドの投錨地へ續航したるも同地點にて東郷大將を送り來れる日本軍艦二隻と擦れ違つた。本日のプログラムはクライドの練習艦エムブレス號の簡單なる訪問を終へ、ロッチス・ロング及ロモンドの堤をドライヴして、グラスゴーへの歸途につくの豫定である。

る。

一一・七・一二　エヂムバラ・イヴニング・デイスパッチ誌

東郷大將グラスゴー訪問

クライドに於ける一日

日本海の海戰に於ける大捷の報が東京に傳へられた時すら、日本人は何等感情を動かす處がなかつたと傳へられてゐる。是は日本人の性格を巧みに云ひ表した言葉である。彼の戰爭を通じて、全き沈默の中に全き勝利を贏ち得たのであつた。然し、此の偉勳を成就した英雄、東郷海軍大將は、凱旋の曉と雖も、ミカドの領土を遊歷さへしなかつたのである。昨日クライドを巡航の際、目を惹いた控へ目な態度も、實にその國民性の表れの一班であると云はねばならぬ。東郷大將のクライド來訪は實に避け難き處であつた。卽ち日本は未だ世界の强國に列せざる永き以前から、クライドに就いて熟知してゐたのである。ミカドの番犬は祕かに效果的に知識を吸集してゐたのである。而して終にその知識が此の壓倒的

な大勝に役立つたのである。大將は愼しやかに河を下つた、其の下航には何等華美な態度は見えなかつた。ブレボスト卿及高位の文官が大將と行を共にしたのであるが、實に事務的な航行に過ぎなかつた。大將を乘せた船は我等が二ッの印象的な港を過ぎて我國でも有名な二ッの造船所へ着いた。此の船はコオボレイシヨンの持船のシールドシエル號で外見はたとへ見事と云ふことが出來なくても充實せる內容は頗る誇るに足る船なのである。大將來訪の報は已に達してゐたので停泊中の各汽船は歡迎の旗を飜し建造中の船上に作業する多くの職工達もハムマアを振る手を止めて歡呼の聲を擧げた。

甲板上に於ける東郷大將の姿は興味深いものがあつた。彼には英國海員に見かける「額より顎にかけて軍艦の撞角」の如き感じの橫顏を見出すことは出來ない。大將は身長は低く、頗る內氣らしくは見えるのであるが、然も何處となく威嚴が現れ、眼は烱々として輝いてゐる。萬事を遂行し得た人の身邊に漂ふ或る種の感じが見受けられ、何となく惹き付けられるのである。茲に於て諸君は此の沈默の人こそ、日本海の海戰に於ける名譽ある砲手を指揮した英雄であることを了解し得たと信ずる。

造船所を訪問

大將の訪問を受けたるヤロウ並ニブラウンの二大造船所は、海軍造船所の精巧なるを以て聞えてゐるヤロウ造船所に於いては、同所を總轄監督の任に當れるハロルド・ヤロウ氏が案內の役に當り、東郷大將も日本の爲めに多くの驅逐艦を建造せる同工場の諸作業には深甚なる興味を抱いてゐるやうに見えた。クライド・バンクの造船所訪問の目的は目下同所に於て建造中の巨大なるキユナアダア・アクキタニア號に鋲を打つ爲めであつた。大將は此の作業を手づから行つて再び同所の着手中の諸作業の興味深き巡視を始めたのが、特にアウストラリア聯邦依賴の戰船アウストラリア號の視察中の大將の面には特別な興味を讀み取ることが出來た。クライド・バンクの造船所に於て、重役ダブルユ・エイチエリア氏の司會に係る晝餐會が催された。卽ち列席者は東郷大將、島村中將、タンダス・オブ・ダンダス少將、鞍馬艦長石井大佐、利根艦長山口大佐、大使館附井手大佐、參謀官男爵アボ(阿部?)中佐、谷口中佐、東郷大將附副官齋藤中佐、枝原大尉であつた。皇帝陛下並にミカドへの乾盃後司會者

の發聲で賓客への乾盃が行なはれ、更に、ジョン・ブラウン會社とミカドの政府との幸福なる關係について一場の挨拶を述べた。卽ち、同所建造に係る戰艦朝日が日本海戰に參加した事を高唱したのである。是に對ふるに東郷大將は、戰艦朝日が期待を裏切らなかつた事、及び同造船所の益々繁榮せんことを祈ると日本語の演說をした。

造船建視察後、一行は鞍馬及利根の兩艦が停泊せる堤防の尖端へ下航した。是等の日本軍艦は實に輕視し難い價値を有してゐる。日本海々戰當時東郷大將の指揮下に在つた軍艦中、我國に於て建造せるものは只一隻に止まつてゐ他は皆當時の英國戰艦の模造であつたのである。造船に於ても、他の萬事と同樣、日本は實に模倣に巧みであるが、その爲めに外觀は多少見劣りがするのである。然し、模倣ではあつても、彼等は標準艦に何等かの改善を施してゐるのである。他に於ても左樣であるが、特に海軍に於ける現在の日本の實力は水準以上で、將來極東の日出づる國の軍艦は、クライド及びタインの造船所によることなく、自國の造船所に於て建造されるであらう。汽船は是等の現代海軍力を代表する新鋭艦よりガルロッチ停泊中のネルソン時代の遺物、練習艦エムブレス號へ航行を始めた。同艦の甲板上に東郷大將を見ることは實に適しい光景であつた。ネルソン今日に在らずと雖も、大將を東洋のネルソンに比することは決して芝居がゝりな追從ではない。大將は實にネル

ソンの如き偉大なる海の人の風格を藏し、且つ彼の一生に比すを得る過程を踏んだ最近に於ける唯一の人物であるからである。

造船所視察後の半日は附近の名勝見物に當てられた。一行はロウにて上陸し同所より自動車に登乘し、ルス、タアベット、アーロッチア、キスルフィールドの名勝を探りグラスゴーへ歸着した時は已に夜に入つてゐた。

今日のプログラム

左記は今日の豫定のプログラムなり。

午前十時十五分、セントラル・ステイション・ホテル出發。
午前十時三十分、アニイスランドに於けるメスルス・バア並にストラウド工場視察。
午前十一時十五分、同所出發。
午前十一時四十五分、バアクヘッドに於けるナッスルス・ベアドモアの鐵工所到着。
午後一時十五分、同所にて晝餐。

午後二時三十分、同所を出發、ダルマァに於ける同社造船所視察。
午後四時十五分、ベアドモア造船所出發博覽會場見物。
午後七時三十分、同博覽會場内アソール・レストランにてコオボレイションの貴賓として晩餐。
東郷大將は博覽會入場の爲め、ケルビングロウに午後四時半頃到着の豫定。同所に於てエイ・エッチ・ベッチグリユウ氏並に常務員諸氏によつて歡迎を受くる豫定。

一九一一・七・一三　グラスゴー・ヘラルド誌

グラスゴーに於ける東郷大將

コオボレイション主催晩餐會

ロヂスへ出發。

熱狂を極めたるグラスゴウ市民の東郷大將歡迎は昨夜博覽會場内のアソール・レストランに於けるコオボレイション側の主催に係る晩餐會を以て適はしくも完結を告げた。來

會者の總數百四十餘名にしてバンクの沖に停泊中の日本軍艦乘組の士官をも含み、來會の日本士官悉く正服を着し、日露の戰功によつて授與せられたる勳章を以て胸間を飾つた。會はブレボスト卿の司會に係り、卿の右隣にはモーニングを着したる東郷大將席に着いた。其の他島村中將、ダンダス・オブ・ダンダス少將、サア・ジョン・ブリモウズ、アルバアト・アール・ブラウン氏、グラスゴー駐在日本領事、ベイリイ・ケブベル氏、エイ・エッチ・ベチグリユウ氏、アールヂエーダンロッブ氏、バア教授、エドマンド・シャリア氏の顔も見えた。

直ちに皇帝陛下への乾盃に移り、續いて『皇后陛下、アレキサンドラ女王、プリンス・オブ・エイルス、及其の他皇族殿下』への乾盃をブレボスト卿の音頭の下に擧げ、次ぎに再びブレボスト卿の發聲にて『大日本天皇陛下』への乾盃に繼いで萬歳を三唱し出席日本人によつて日本國歌『君が代』は朗かに歌ひ出された。

ロード・ブレボストは『我等の世界的賓客を迎へて』と題して、次の如き挨拶を述べた。

『此の度日英兩國間に於て締結された通商條約は、極東に於ける兩國相互の利益の安全と確證とに對して、堅固なる根底を確保せしむるもので、兩國の同盟は是によつて一層確實になつたと云はねばならぬ。(喝采)ミカドの帝國は此の近々二三十年間に於て、舊文明が如何に

現代の新文明に適應するを得たかと云ふ實例を世界に示す最好の一例となつたのである。日本は藝術的にも經濟的にも實に優れたる過去の要素を保つてゐた。而して教育的並に經濟的進歩の進展に伴つて、我が國最大の問題である東洋と西洋の一致及び利益の爲めに一大貢獻をなした事は、彼の國最近の歴史が物語つてゐるのである。(喝采)即ち彼の國の都市は此の事實を如實に物語る挿繪を以て飾られてゐるのである。と云ふのは、日本の大學並に專門學校多數の學生は西洋流の科學並に教養を以て教育されてゐるのであつて、斯くして彼等は、東洋の大帝國行政の種々なる重要の地位に對しての準備を滿たすからなのである。(喝采)然も我等は、是等日本人の中で、我等の世界的賓客東郷大將以上に好適の實例を擧げることは出來ないのである。一八七一年に一海軍留學生として渡英した東郷大將は、先づ第一に劍橋大學に入學し、次いで練習艦ウォースタア號に乘り組んだのであつた。而も此の練習船時代に在つて、大將は次いで起らんとした日本海軍史上の赫々たる功績の基礎を修め、記憶尙新たなる日露戰爭當時に在つては、大將の戰術及び編艦組織は、世界の稱讃の的となつたのである。一八七六年當時我が國に於て建造中であつた日本軍艦の監理を日本海軍當局より任命されて以來、大將は榮達の階梯を段一段と登られたのであつて、今や最も有力にして完成されたる權威として最高の榮官を極められたのである。(喝采)云々』爰に於

て乾盃は行はれ、『再び歸り來る日なしや』の歌の合唱があつた。

是に對へて東郷大將は自國語の原稿を手にし、日本語にて答禮されたるに同國人の喝采は頗る此の演說を飾り、言葉を解せぬ我等にも尠なからざる感銘を與へた。副官谷口中佐は是を英語に飜譯して語られた。即ち『當グラスゴウ市訪問以來、我等一行の受けた盛大なる歡迎は心肝に徹し只々感謝の外はないのである。(喝采)到る處に於て善良なる市民諸氏の心からなる歡呼を受けては、宛も自國に在るかの感を抱く程である。此の熱誠なる御厚意は單に自分獨りの爲めにのみ向けられたものとは決して思はない。即ち東洋の一同盟國に對する市民諸君の愛情、好意友情の表れに外ならぬものと信ずる次第である。(喝采)自分としては、當市の訪問は此の上もなく愉快で、日本へ歸國の後も此の憶ひ出は長く胸中に留るであらうし、且つ我が當市訪問の際に受けたる歡迎と熱烈なる御好意を人々に語り傳へて此の歡びを新たにする事であらう。(喝采)』

大將は再び日本語にてグラスゴウ市の繁榮を祈り、同國人側にて乾盃あり、ロード・フレボストも是に對へて、日本軍艦乘組士官の健康の爲めに數言を費して乾盃をした。

島村中將は明晰なる英語を巧みに操つて自分並に士官水兵一同の爲めに致されたる御厚意に對しては實に感謝の言葉もなしとの挨拶をした。

一九一一、七、一四　グラスゴウ・イブニングタイムス誌

東郷大將エヂンバラ訪問

目下當エヂンバラ市を非公式訪問中の伯爵東郷海軍大將は、本日セント・ガイル寺院へ參詣した。大將は日本海軍の谷口、齋藤兩中佐、及びダンダス少將を同伴し、同寺院附書記ホワイト氏の案内によつて寺院内を一巡し、歴史的由緒深き箇處に就いて一々の説明を聞いた。控室に於て參詣者名簿に署名を終へ、一行は同寺院境内を立ち出てエヂンバラ城へ向けて出發した。城内の見物を終へ世界的名士の一行はエスプラネイドに廻されたる自動車に登乘したのであるが、自動車が將に動き出さんとする刹那、一行の出發を見物せんと集まつて歡呼の聲を擧げてゐる群衆の中に、日本語にて『大日本萬歳』を呼ぶものがあつたので、此の短軀の海軍大將は滿面に笑をたたへて、帽子を擧げて是に答禮したのであつた。

一九一一、七、一五　エヂンバラ、イヴニング・ヂイスパッチ誌

東洋のネルソン

對島の海戰の勝利者ニユウカツスル訪問

日本のネルソン東郷海軍大將は來週ニユウカツスル市訪問の豫定である。

最も有名なる日本の大人物は來週火曜日午後五時ニユウカツスル市中央停車場着の豫定にして、當市滯在中はキツトチース會社長ダブルユ・アームストロング氏邸に宿處を定めらるゝ筈である。

市長閣下並にニユウカツスル市監督官は市の有力者並にキツトチース會社々長アームストロング氏と共に停車場に大將を出迎へ、直ちに市内へ歡迎の準備は已に成つた。

大將は自動車にてゼスモンド・ディーン・ハウスへ赴き、當所にてはサア・アンドリユウ・ノーブル邸の客となり水曜日はエルスキツク工場視察に一日を費し、木曜日午前中は河を下航してタインの見物を終へ、然る後市長官邸の晝餐會出席の豫定である。

市長閣下の官邸に於ける東郷大將招待會に對し、大將より次の如き返信を得た。

市長閣下、十一日附の貴翰今朝ロンドンに於て拜誦仕候。廿日貴邸に於ける晝餐會に御招待にあづかるなど御厚意の程萬々難有奉存候。

かく御招きを受くる事小生身に餘る光榮に有之、欣んで拜受仕ると共に、過去に於て我が日本海軍の爲めに優秀なる多くの軍艦御建造を贈りし古き歴史を有する御市を訪問するを得るは小生の本懷と存ずる處に御座候。

貴下の心からなる御厚志に對し幾重にも御禮申上度、如此に御座候。　頓首

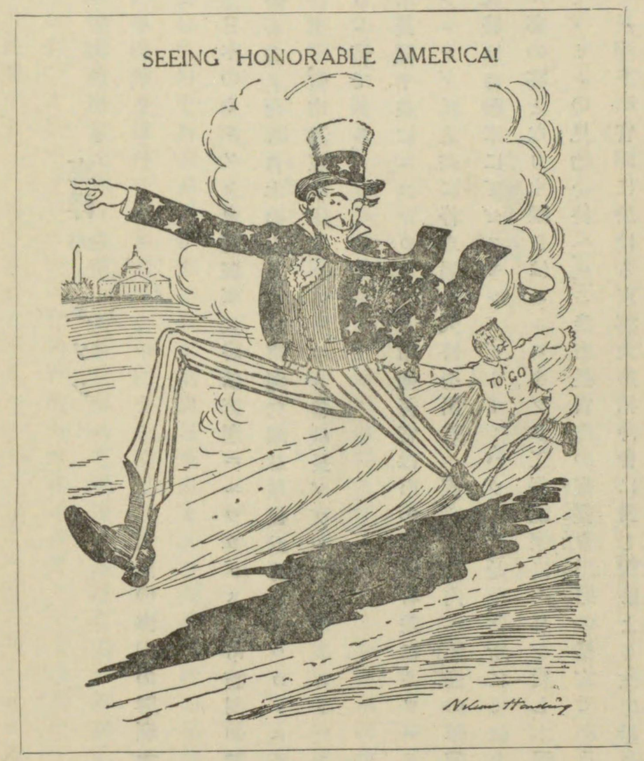
伯爵　東郷平八郎

尙大將は木曜日午後の汽車にて當市よりシェフィールドへ出發の豫定であると。

一九一一、七、一五　ニユウカツスル・メイル誌

東郷大將

昨日午後東郷大將はニユウカツスル市に到着した。此の訪問は本來事務的な性質のものであるが、此の戴冠式參列の爲めの訪問が、日英兩國間に介在する友情を一層分明に了解



當時の誌上に描かれたる東郷大將

（其二）

するを得るに致らしむるに最も適當なるものと信ずる次第である。タイニサイドに於いて見る以上、日英兩國の關係が如何に親密なるかを物語り得る土地は他にはない。日本の興隆に對する興味と稱讃とは、由來此の地方の特色と云つてもよい。何となれば、他の國々が未だ極東の一小帝國の存在に何等の注意をも拂はなかつた數年以前から、ミカドに對する諸問題は、我等には已に密接なる存在であつたからである。我等は永き友情を保ち、而して相互に稱讃と好意とを贏ち得たのである。日本が世界の列强に伍して活躍する日あるを知り得た者は我等以外に絶無と云ふを得るであらうが、若し多少なりとも、此の帝國が如何に長足の進歩を遂げ得るかを先見する明を有したるものありとせば、日本の成就したる素晴らしき結果に對して只單なる滿悅を感ずるのみには止まらぬであらう。然も、局外者の眼には日本の興隆は稀有に映じたのであるが、日本の歷史に關して多少なりとも詳細なる知識を有したるものに取つては、過去二十年間に成したる日本の社會的政治的及び經濟的の進歩は何等の奇異の感をも抱かしめぬのである。世界の各國は最後までよく苦鬪したる日露の大戰役に於て、只日本が勝利を得るその結果を見るのみで、開戰當時非常なる不利に置かれたる如く思はれし日本が、大捷を博するに至つた諸原因、卽ち國民の勇氣、統卒者の智慮及全國民の獻身的なる愛國心に對しては、未だ十分なる了解を有するとは云へない

のである。

現代の日本建設に、我等は此の訪問者以上の力を盡した人を知らない。大將は帝國の內外に於て、日本の利益の安全を護る可く、海軍を掌握したのであつた。而も間斷なき數年間の努力は、試練の日、卽ち彼の大戰爭に於て大捷を博するを得、世界の各國よりは一强國として認められ、我が大英帝國との同盟は彼の極東に於ける地位を確保せしむるに至つたのである。大將の來訪は、我等日英兩國の同盟條約繼續の時已に其の實現を見るが至當と考へられた程であるから、其の理由よりしても、此の度の歡迎は最も心よりなさるべきと信ずるのである。此の新條約は、元來攻擊的でも防禦的でもなく、眞に平和に對する一手段なのであつては、領土の擴張に對する如何なる不正の侵掠も、且つ貪慾なる野望も防がれずと云ふものなく、獲得されたる利益に對する如何なる防害も擊退されぬと云ふものはないからである。而して、他國に對して不快の感を與へてゐた懸念を條約から取り去つた事は、決して價値のない事ではなかつた。その懸念とは、平和の戰ひより、一層悲劇的な爭鬪に我が國を引き入れたかも知れぬと云ふ狀態を指したのであるが、勿論單なる懸念で、否漠然たる懸念ではあつたが、是が除去され、且つ新條約が何等の疑念を留めない事の證明され得る今日に於

ては我等の同盟は一層强固にして效果的なのである。日英條約に次いで英米の仲裁條約の締結の有無は問題外として、日英間に横はつた嫌惡すべき一文の取り消されたる今日、我等の心から友情を抱き、且つ其の誠意には衷心より是に應ずる日本を代表して、東郷大將の來訪を見るは、實に快き限りである。

エルスヰックの訪問は東洋のネルソンをして得意の感を抱かしむるであらう。卽ちミカドの海軍の誕生地は此の有名なるエルスヰックの造船所にして、旅順港に於ける連續的の海戰、及び最後を飾る劃期的な黃河の海戰に於て、露西亞の海軍を擊破したものは、大部分此の地に於て建造された軍艦であつた。然し其の後の日本は、戰爭の科學と同樣の巧みさを平和の技術に於ても示す樣になつて、今日では造船に在つても乘組員組織の敎練に於ても、最早外國の扶けを受けぬ樣になつたのではあるが、彼等は其技術の大部分を此のエルスヰックに於て獲得したものであり、又彼の地に於ける海軍の權威も殆ど其の全部が、ダインの防波堤に於て其の知識を習得したのである。我等は是等の關係の終には無用となる日あらん事を精神的にも物質的にも望む次第である。然も世界に於て此の恩惠を拒む最後の人は、ダニイサイドの艦を指揮した許りでなく、彼の軍事的手腕を最初に此の英國に於て認められたる東郷大將であるのであるとは云へ、その訓練を此く迄に利用した事は全く日

本人の多數に尠なからず植ゑつけられてゐる性質の力によるのである。己が職分に對しては頗る忠實にして、熱烈なる愛國心を有し、身を棄つるを意に介せざる彼等國民性の中には、我等英國人の採つて以て範となし熟考すべき處が多々あるのである。我等は我が國民生活の最も顯著なる特色が、過去に於て世界の到る處に我民族の領土を擴張した男性的な性質の墮落であるとは決して信じては居ないのであるが、然し、空虛な興奮を愛し、自己の安逸を欲する傾向を見逃す盲目的なる增長を以てしては、國家の安全を保證することは出來ぬと考へるのである。此の點より見るに少なくとも日本の我々に敎ふ處は頗る多く、東郷大將の如きは其の適切なる一例と云はねばならぬ。

一九一一・七・一九　ニユウ・カツスル・クロニクル

ニユウ・カツスルに於ける送別午餐會

東郷大將は昨日幕僚と共にエルスヰツク造船を去つて、コオボレイションの汽船アームストロング號に乘組み河を降つた。不幸天候には惠まれなかつたが、河の堤防に沿ふて作

られたる種々の造船施設に對し尠なからぬ興味を抱いた樣であつた。

正午少し前、一行はノース・シールドに到着し、新埠頭の渡船場に於て上陸した。次の訪問を豫測した群集は、渡船場より一行を待ち受けたる自動車までの大將の通路を擁して幾度となく歡呼の聲を上げた。大將は帽子をとつて、繰り返し群集に挨拶された。一行は直ちにニユウカツスルに向けて車を飛ばしたが、同市に於ては、市長官邸に於ける市長並にコオポレイション主催の午餐會の客となつた。

市長官邸に於ける午餐會

午餐會は市長サア・ダブルユ・エッチ・ステフエンスンによつて司會された。

訪問者側の當市出發の時間が迫つてゐた爲め、演說は頗る簡單であつた。陛下に對する乾盃の後、市長の發議の下に大日本天皇陛下の御健康を祝して乾盃し、且つ『此の度の同盟條約の改正が完了した事は我等英國人に取つて頗る滿足である。卽ち、それが戰の爲めの同盟ではなく、平和の使命を果す爲めの同盟であるからである。我等が知る處によれば、ア

ウストレリアに於ても、カナダに於ても、此の條約の改正は世界的の滿足を與へてゐる樣に思はれる。(喝采)』との挨拶があつた。

乾盃は心から受けられた。

トーマス・ベル氏は來賓の健康を祈つて後『かゝる世界的名士を歡迎するを得たのは非常なる喜びである。今や何處の家に於ても東郷大將の名を語らぬものはないが、由來戰國の歷史に於ては海の英雄以上大きく立派に名を書かれる人物はゐない是は甚だ當然のことで、我等は島國に住んでゐるから從つて海の英雄の行爲に注意を拂ふのに何の不思議もないのである。(喝采)』と述べて乾盃した。

然る後、市長は市の主要建築物の寫眞帳を紀念として東郷大將に贈呈した。

東郷大將の演說

大將は此の乾盃に對へて日本語の演說をなし、井手大佐は之を英語に飜譯したが、卽ち左の通りである。

『ニユウカツスルの名が我が國の海軍史から離すことの出來ない事は、已に周知の事實である。卽ち、數多の軍艦が、ニユウカツスル市の誇りである有名なるエルスキツクの造船所に於て建造され、或は武裝されたからである。加之、多數の士官は當市に於て軍艦を作り、大砲を製作するの技を學んだのである。若し余が、貴國の援助を受けなかつたならば、我が海軍の發展史は別の方向を取つてゐたであらうと云つたにしても、決して是は追從の言ではないのである。當市訪問を永く念願としてゐた余に取つて當市に來り、親しく諸君に見えることを得たのは實に我が幸運と云はねばならぬ。然も、日英條約の改正が發表されたる今日、此の席に連るを得たことは欣喜にたへぬ次第である。只今ベル氏が乾盃の節述べられたことは、余には過ぎた御言葉ではあるが、余に對する歡迎の御言葉は、とりも直さず、世界の平和と我等兩國永遠の友情の確證である新條約を御祝ひ下さるものと信ずるが故に、心から嬉しく御受けする次第である。此の貴國の親切なる便りを歸國の土產にする事は、身に取り甚だ愉快である。最後に、諸君の御厚意に深く感謝する。』

大將はかく述べ終つて、市長並にコーボレイションの爲に乾盃する事を望まれた。

乾盃が滯りなく終るや、市長は再び立席し是に對へて、

『今日かゝる偉大なる紳士の出席を得た事は我等に取つて最も光榮とする處である。此

の兩國間の新條約が兩國永久の平和を齎らし、且つ時によつて世界の各國が平和に結合せんことを祈る。』(喝采)と結んだ。

ホン・ジエイ・マアレイ氏もかゝる席に列するを得たことを喜び、新條約に對する市長の寬見に贊成の意を表した。

東郷大將及其の幕僚の一行は午後二時八分の列車にてシエフイールドへ出發した。

一九一一・七・二一　ニユーカツスル・クロニクル誌

東郷大將シエフイールド訪問

我が國の造艦及軍器製造の中心地方訪問中の伯爵東郷海軍大將は、昨日ハツドフイールド及びギカア兩會社の參觀をなした。ハツドフイールド會社に於ては、社長ロバアト・ハツドフイールドの案内によつて各種の砲彈並に砲口の製作過程に就いて見學をなしたるが此のうち日本政府依賴のもの多少あつた。一行は又、イースト・ヘルラ・ワークスに於ける鑄造所の見學もすました。當工場は世界最大にして、その敷地、實に六エイカアである。社長

ロバアト、ハッドフィールド氏は東郷大將の來訪を謝し、主として大將に依つて世界に紹介されたる巨砲政策は、今や各國に採用されつゝあるを語つた。ハッドフィールド社に於ては、單に重量殆ど四分の三噸にも達する十四吋砲の彈丸の製作に止まらず、從來貫通不可能と稱せられし最高新式裝甲鋼板をも貫通し得る特性附與に關する研究成りたる由である。尙氏は一九〇五年九月、當工場來訪中の林公によつて日英兩國間の條約の第一回發表が當工場に於て行なはれし當時を思ひ浮べ、日英米三國條約の有利を力說した。

東郷大將は通譯を介して、當所訪問の喜びを述べ、且つ當會社が日本政府の爲めに成したる功績を感謝した。

次にヴィカア會社の大砲並に一般兵器の參觀をなし、當所にて午餐を喫し幕僚と共に晩景に及んでロンドンへ歸着した。

一九一一、七、二二　ユークシャー・オブサアバア誌

素晴らしき新計畫

シエフィールド最近の產物

サア・アール・ハッドフィールドと科學の偉業功績

ロバアト・ハッドフィールド氏の所謂日本のネルソン東郷海軍大將は、昨日長時間に亘りシエフィールドに於て諸種の工業を參觀なしたるも、實は一昨夜當地を來訪し、ハッドフィールド卿の客としてバックヘッド・ハウスに一夜を明した。大將は彼の日露戰爭に於ける日本海軍の總司令官として活躍したる有名なる英雄にして、當時旅順港の勇者として知られたる乃木陸軍大將と共に、此の度の戴冠式にミカドを代表して出席の爲め來英せられたのである。シエフィールド來場に先立ち、大將はバロウ・ニユウカッスル及びグラスゴウに於けるギカアの海軍造船工場の訪問をなし、是等によつて、世界最强の海軍國の造船及機關術の巧妙と能力に就いて、大いに得る處あつたものゝやうである。

英國海軍側にてはダンダス大將、日本側にては井手大佐、齋藤中佐、及び副官谷口中佐を同伴したる大將は、日本政府依賴の造艦監督の爲め滯在中の野田中佐の出迎へを受け、昨朝、ハッドフィールド鑄鋼株式會社のヘラク及び東ヘラクの兩工場を訪れ、主として戰鬪具の製作過程に就いて見學した。一行は同社長サア・ロバアト・ハッドフィールド並に取締役エイ・

エム・ジャック氏の歡迎を受け、各國政府依賴の各樣式の彈丸並に種々の砲口の製作に多大なる注意をそゝぎ、各種の裝甲裝置の構造に對して、就中ハッドフィールド製のィーラ鋼を以て製作されたる特許構造の大砲の掩護裝置にして、特に興味深かりしものゝやうだ。最新式不貫通クルップ板をも貫通したる裝甲物貫通彈の陳列等あつて、勿論大將の多大なる深味を惹きしものと思はれるが「沈默の人」なる評判の如く、些の表示をも看取するに難かつた。而して一千二百呎に亘る世界最大の東ヘクラ鑄鐵工場に於ては、軌道採掘及機關の鑄造の實況の見物をなしたるに、一行にとつて頗る興味の湧然たるものありしは明白と云ふを得べきだ。

參觀を終へた一行は歡談の爲め重役室に導かれ、大將並に同伴の日本人の爲めに盛なる乾盃を擧ぐる前に、ロバート氏は次の如き演說をなした。

『我が國と類似點の多い島國の日本から、遙々日本のネルソンが來訪されたことを心から祝する次第です。(喝采)貴下によつて紹介された巨砲主義は、今や各國によつて模倣されつつあります。然れども巨砲には、製作に非常なる精巧を要する彈丸を必要とするので、最新クルプによる裝甲裝置を貫通する事は、鋼鐵或は混合鐵板を貫通するとは自ら別問題であります。是等の彈丸は全く良質のものでなくてはなりません。而して是の作製には科學

的なる精巧と技術的才能とを要するのであります。彈丸に用ふる鋼鐵が純良なるを要するのみではなく、熱の加減並に化學的錬製には尠なからざる最高技術的知識と巧妙さが必要なのでありまして、此の點に就いては、先程御覽に入れました通り、終に成功したのであります。今や我が社は、口徑十四吋、殆ど四分の三噸に達する彈丸の製作に成功致しました許りでなく、從來破壞するを得ずとされて居りました剛面の鋼鐵板も、彈丸に損傷を見ずして然も低速度にて貫通する事の出來る十二吋彈の製作すら完成致しました。最近の實驗によりますと、我社のヘクロン彈は更に些少の損傷をも受けず、十二吋板を貫通せしのみならず、二哩の彼方に達しました。是などは、如何に科學的探究や技術的の才能が、製彈工業に資するかの實證で、頗る偉大なる功績であると信じます。』

サア・ロバアトは更に論旨を平和に向けて語つた。

『日本人は起居の間、我等に禮儀、生活の單純化、及び不思議なる謙讓を敎へます。私は、日本が各國に立ち交つて立派なる地位を得、又は年々增加する人口のはけ口を求めんとしてあせる以上に、平和を熱望してゐるものと信じて疑ひません。(謹聽々々)日本は日露の戰に於て殆ど我が島と海の國の歷史と同樣な愛國心と職務の忠實さとを示しました。而して彼等は、今や世界の各國と伍して將來世界の繁榮が戰と云ふよりはむしろ平和の發展によら

ねばならぬ事を悟つたと信じます。(喝采)昨年日本へ旅行致しました私はその大いなる進歩の足跡を見る事が出來たのでありますが、今、我々と致しましては、貴國の發展と、世界周知の長足の進歩の稱讃すべき政策の繼續を祈つてやまぬものであります。

一九〇五年九月、當時製鐵施設視察中の日本大臣林子爵が日英條約の第一回公開をされた事を思ひ出します。爾來日本は正に長足の進展を遂げ、今や世界の列强に伍するに到つたのであります。然も此の度の我等兩國の新條約に於て見る最近の進展は亞米利加合衆國との仲裁條約同樣我等の最も喜びとする處で、遠からず貴國とも此の協定を結ぶに至ると思ひます。此の數年間、私は、日英米の三ヶ國間に此の協定が結ばれたならば、此の政策は世界の各國をして同樣の協定に導くであらうと主張したのであります。(謹聽々々)最後に諸氏の愉快にして安全なる御歸航を心から祈ります。』

爰に來訪戰士の健康の爲めに乾盃は擧げられ『有難う〳〵』の感謝の聲が此處彼處に起つた。

東郷大將、例の日本語を以て是に對へ『今日貴社の工場を拜見して頗る興味深きを覺え、且つロバアト卿御成功の新發明を一見するや驚嘆の外はない。又、我が海軍に對する御賞讃及び我等に對する心からなる御待遇に關しては御禮の言葉すらなし』と述べた。

一行が當工場を立ち去らんとした時、あたかも晝飯時であつたため、職工は多く集つて之を見送らんとした中、一職工聲をあげて萬歳を三唱したので、一行は忽ち歡呼に閉された。

次いでギカア社のリヴァ・ドン工場を訪問したるも、突然の事として何等の準備さへなかつた爲め、平日通りの作業の參觀をなした。實は平常時の狀態を視察せんが爲め、わざとかゝる突然の訪問をなしたるものと云ふ。會社を代表してサア・トレヴァ・ドウスン、ヂエイ・エル・ベンソール氏等一行を迎へ、全工場はおろか實驗室の參觀までなし、日本軍艦用の裝甲鐵板の精鍊の視察をなしたるは勿論である。序ながら、大將はコンノート殿下日本御訪問の節御案内申し上げて、同一作業を參觀したることがあつたとか。戰爭以前に於ても日本は已に大砲の作製を得たれども、當時と比し現今の武器作製の進歩は格別である。一行は當工場に於て午餐を取つた。

爰に注意すべきは、昨朝大將の採りし第一行動は、地方新聞の反響如何に關するものなりしとか。けだし英國人士の眼に大將の訪問が如何に映るやを懸念したる爲めであらう。

一行は五時近き列車にてグレイト・セントラル停車場を出發、ロンドンへ向つた。

一九一一・七・二二　シエフィールド・インディペンデント誌

リヴアプールに於ける東郷大將

日本海軍の有名なる指揮者にして、對島の海戰の勝利者なる伯爵東郷海軍大將は土曜日午後紐育へ向けリヴアプールを出發した。ユーストンよりはキューナアド社の急行船にて到來し、四時頃リバアサイド・ステイションに着したるのである。

ステイション並に浮棧橋に於ては、多勢の群集に迎へられたが、微笑を以て是に對へたのみにて、告別の辭は既にロンドンに於て通信したればとて何事をも語らなかつた。大將は全く英國隊の服裝にて、白チョツキを着け、シルク・ハツトを戴いてゐた。

大將は谷口中佐を同伴して合衆國よりカナダのバンクウバア島ビクトリヤに到り、丹、波丸にて九月十四日横濱着の豫定である。

キング・ジョウヂ陛下戴冠式列席の爲め日本代表として滯英中、彼の老練習船チーセスタア號訪問と等しく各主要都市の訪問をもなしたる大將は、「タイムス誌」に次ぎに掲載の告別の辭を通信した。

『將に英國を辭去し、歸國の途に上らんとする今宵に當り、生涯忘れ得べからざる思ひ出二つがある。一は我が同盟國の最も威嚴ある君主、チョーヂ五世陛下の戴冠式に參列するの光榮を得たることにして、生涯忘れることができないであらう。一は二ヶ月に亘る滯英中政府並に國民一般より受けたる好遇と歡迎である。

青年期を英國に過したる余は、今や四十三年を經て再び此の土を踏み、かくも溫き歡迎を國民諸氏より受けたのである。辭去に臨んで哀愁のたゞならざるものがある。然れども我が此の再度の渡英が舊き友情を新に、結び得たるは實に本懷とする處である。

然も爰に忘る可らざるは、日英同盟の改正が我が滯英中行なはれしの一事にして、長く我が憶ひ出を飾ると共に、世界の平和並に我等兩國永遠の友情の確證たらん事を信じてやまざる次第である。』

一九一一・七・三一　リバープール・ポスト誌

今日の訪問者、東郷大將と乃木大將

キリアム・マクスエル記

皇帝陛下戴冠式祝賀の爲め、日本政府を代表せる二人の勇士、卽ち日本のネルソン東郷海軍大將並に旅順の勝利者乃木陸軍大將は、今日ロンドンに到着した。數多き來訪者中、かゝる歡迎を受けたる者は他にないであらう。

余は曾て生涯を通じて忘るゝを得ざる狀況に於て、東郷、乃木兩將軍と會見するを得たのである。

東京に於ける新橋停車場にては、下駄の響き宛も屋上に雨を注ぐが如く、老若男女は、國家及び國民の運命を雙肩に擔ひ、トラファルガアの海戰以來の大海戰たる日本海の海戰に出征せんとする東郷海軍大將の出發を祝福せんとして陸續と集まつたのを見たことがある。

日本の格言に『能ある鷹は爪をかくす』と云へるものあれど、此の格言こそ實に大將の爲めに作られたるが如き感がある、大將は絕對に出世間的なる事を避け、『自分の如き愚か

な人間の寫眞を買ふものもあらん』とて、撮りたる寫眞の陰畫を買ひ取りて複寫を拒みしとさへ傳へらる。余、大將に面會するを得んと停車場内の其處此處を探す内、『貴下若しプラットホームに於て、大將と會見せんとせば、出發時に至るも終に無駄であらう』とて、幕僚の一人我を待合室に拉した。室中大將の友人二三氏と談笑せるものがあつた。

五呎内外の短軀なれども、力と熱と沈默の權化にして、直に國民及び國家の典型と云ふべきである。初對面の者にとつて、大將の顏は仮面の如く、嚴格にして冷淡、つめたく峻烈なる第一印象を與へた。微笑に弦む顏面、哄笑に踊る兩眼を見るの經驗を得る能はざるものには無情なる人物とも思はれやう。

『沈默の將軍』の名あるも、亦大將には適切にして、用語は甚だ節約せられて簡單である。彼の身を處せる寒冷なる雰圍氣の中に於て、都下の海員の獻身的なる信賴を受けたるは實に、不可思議中の不可思議である。『部下を手足の如く動かし得る者只一人』なる言、日本海軍に在るが、是等の秘訣は、一度陛下の命令下るや、直ちに伸長せんとする壓搾されたる力、恐怖を知らざる無意識なる勇氣、運命をも左右する信念、困難及び危險に遭遇するも其の緩急に應ずる判斷力等である。最早、東郷大將が偉大なる指揮者たるは言を俟たざるべく、群集の中に在つても、此の感の緊々と身に迫るを覺えた。

沈默の將軍は余に微笑を以て握手を賜ひ、最近まで活躍したる旅順に就いて語り、且つ彼が海軍々人たるの第一歩を學びし英國に關して物語つた。練習船ヲーセスタア號上に於けるテイムズ・ノートイカル・トレイニング・カレッヂ在學中の若き日を思ひ浮ぶるに及んで、嚴格なる風貌頓に其の影を消し、大將の兩眼は輝いてゐた。『我が英吉利に學びし處頗る大であつて未だ萬分の一をも報ゆるを得なかつた。』とは彼の言である。

澁面の戰士

乃木大將も亦日本風の容貌、卽ち寡默にして眞面目、然も內に情熱を藏せる澁面の老戰士である。是は余が旅順の塹濠に於て會見した日の第一印象である。當時はシャホーの陸戰直後、余は黑木將軍の麾下より來着して間もなき頃にて、何等の歡迎をも豫期しなかつたが、大將との握手の間、及び大將より與へられた本國英吉利への通信材料などの間に、深甚なる同情と親切なる性質とが將軍の胸中に藏されてゐるのを覺えたるのは、未だ包圍の完了せざる以前であつた。

痩軀と澁面と半白の頭髮とは、大將の力と勢力と決斷力を象徵してゐる。是は大將の一半面であつて旅順包圍の砲火と流血の中に鐫けられたもの。然も他の半面では力强き握

中に、此の老戰士の風貌は消果てゝ、優雅なる武人の面前に在るを感じ、兩眼は慈愛に輝き、正直にして心からなる人間らしき面影は宛も舊知の如き親しみをも覺えしめた。

旅順開城に先立つて英米二國の通信員の一團、大將及びその幕下の士を、新年の祝賀に招待した事がある。我等は丘腹を採掘して作つたる洞窟に於て會食し、相互の健康を祝して乾盃した。時に一日本通譯官は我が耳に『余、今、コサック兵の白旗を持ちたるを見たり。旅順の陷落旬日を出でざるべし。』と囁きたれば、我此のニュースを本國に通信の許可を得んとしたが、『明日まで待たるべし。』との大將の言に押して許可を願ふを得なかつた。

夜をこめて彈丸炸烈の響きは大地を振動させたので、旅順港內は、軍艦と市街とを問はず火災を起し、大空は朱を以て彩られた。拂曉、余は大將の困憊せる兵士及び大砲を整列せしめて、北方ムクデンの平野に在る軍隊に合せしめんと出發の指揮をなせるを見た。此の長月に亘りし流血の苦悶の既に終れるを知り得た大將は、一瞬をだに忽にせず、彼の思索と勢力とは滿洲の野に在る未征服の敵に向けられたのである。

眞の英雄

余が再び乃木大將と會するを得たる時は、全く別人の如き感があつた。日本兵が亡き戰

友を茶毘に附せんとして、假墓の發掘に從事する地點より、程遠からぬ一藁葺屋に於て開城規約は調印せられ、勝者と敗者とは水師營の廢墟に於て會見したのだつた。

『余はかゝるこゝろよき紳士と會見せんとは豫期せざりき。』とは旅順の敗軍の將の讃辭である。『敵軍の將と云はんより、寧ろ舊友に會したるが如き心地す。』

乃木大將は此の戰鬪に於て二子を失つた。一人は南山に於て戰死し、他は二百三高地の攻擊に戰死を遂げたのだ。我が子の戰死を見た大將は、その葬儀を自分も加はるまで延期すべしと命じたといふ。

『日本をして無敵ならしめたるは、總てを國家の祭壇に捧ぐるの決意に在り。』とステッセル將軍は此の事に關して述べたが、大將は瞬時日本流の當惑せる表情をなした後微笑を以て、我が子の死が無駄ならざりしを云ひ、且つ『其の死處を得たるを喜ぶ』と對へた。

戰爭中は假借する處なく、然も大捷後は愛憐深く、自己の犧牲を意に介する處なく、天皇陛下並に國家の名譽の他は何物をも望まなかつた大將の如きは、紳士的武人、實に眞の英雄たるを恥しめないものだ。

一九一一・六・一一　デイリイ・メイル誌

興味深き三人

（以下飜譯者の都合に依り文體を改たむ）

今後二週間に亘り、世界各國より皇族及び高官のロンドン來訪頻々たるを見るべし。今朝セント・ブランクラス停車場は、其の最初にして然も最も興味深き皇族の來着を以て賑はへり。卽ち戴冠式列席の爲め、其の代表として極東日本の皇族御來着ありたるなり。ミカド、を代表して御來訪ありし東伏見宮殿下には、ロンドンは御曾遊の地にして、從つて御到着を待ち上けしもの尠なからず。

然れども、興味の中心となりたるは、隨行の二軍人にして、殿下に續いて下車せり。最初現れしは、短軀、半白髯の溫和なる眼光の武人にして、紹介を受けたる人每に日本流の慇懃さを以て挨拶をなしたり。此の嚴格なる風貌にして眼光溫和なる甚だ風采上らざる人物が、彼の日露戰役當時、露西亞の艦隊を擊滅して、日本を東海の雄たらしめたる東郷海軍大將とは、殆ど信ずる能はざりし程なり。

尙東郷大將の傍に、短かく刈り込みなる白髭の、輕く腰の屈みたる人物佇みをれり。卽ち

乃木陸軍大將にして、現代に於ける最大の包圍戰後、困難なる戰の中に採りたる決定的の行動を以て、一擧に旅順を陷し入れたる世界的武人なり。

一九・一一・六・八　エスタン・マアキユクイ誌

戴冠式出席の日本代表者

昨朝大日本天皇陛下の代表として戴冠式參列の爲め東伏見宮殿下並に同妃殿下にはロンドンへ御到着遊ばされ、日露戰爭の英雄海軍大將伯爵東郷平八郎閣下並に陸軍大將伯爵乃木希典閣下御同伴申し上げたり。日本代表は六月十九日までは非公式にして微行なれば、兩殿下は單に伯爵として御旅行遊ばされ、兩戰士も單なる一介の東郷及び乃木として御同伴申上げたるなり。

沈默の叙事詩

日本代表一行の到着以上に靜肅なるもの世に想像をだに許さざるべし。それは全く沈

默の叙事詩なりき。加茂丸は拂曉の靜寂の中を辷るが如くチルベリイに入港し、碇泊の爲めに投込まれたる鎖綱の水音を發したるのみなり。兎角するうち、日本大使及び大使館員一同は歡迎の爲め、曳艦に便乘して離陸したり。彼の有名なる兩大將の沈默、一同に傳染したりし如く、一言を發するものもなく乘船し、一時間後同樣の沈默裡に一行を迎へたる大使館員一同は上陸なし、寂々のうちに特別列車へ乘り込めり。但し乘車前、東郷大將は自動機械を見、チョコレイト賣場に於て六片を費し、乃木大將は尙も無言裡にマッチ一箱を機械的に買入れたり。機械の靜寂が彼等の嗜好に適ひたりと見えたり。

無言にて碁を鬪はす

加茂丸甲板上の長旅行中、何人も東郷、乃木兩大將が單語以上を口にしたるを聞くを得しもの曾つてなしと云へり。彼等の沈默は、其の偉大なる行爲によつて一層意味深く感ぜしめらゝる沈默なり。然れども、時として多少の面識あるもの天氣の挨拶をなしつゝ兩大將に敢て接近せんとすれば、東郷大將に於ても乃木大將に於ても、輕く頭を下ぐるか、或は手を振つて是に對るのみなりき。彼等は日本の圍碁と云へる遊戯を爲し、終日喫煙室に暮らせり。圍碁とは軍事的戰術を要する將棋の一種にして、板面を挾んで正しく膝を屈して坐し、

一定の議論をも交さず黑白を鬪はせるなり。彼等は二ヶ月に亘り、圍碁を弄びたり。されど一行時としてデッキ・ゴルフに興ぜし事もありて只一度乃木大將が語をなしたるを聞きし事あり、卽ち彼が打擊を失敗せし時に於てなり。

一九一一・六・八　ブラッドフォード・テレグラフ誌

戴冠記念夜會

昨夕外務省に於ける外國使臣の集ひ

昨夕外務省に於て行なはれたる夜會へ皇帝皇后兩陛下の御臨席によつて、サア・エドワアド・グレイ氏は身に餘る光榮に浴したり。

入口の大廣間及び大階段、並に第二階に於ける各室は、薔薇棕櫚、及び溫室咲きの花等にて美々しく飾られたり。

皇帝皇后兩陛下には御馬車にて御到着遊ばされ、エレヱイタアにて會場へ出御遊ばされ、サア・エドワアド・グレイ卿御出迎申上げたり。會場には既に當夜の客百二十七名の到着し

たるありき。卽ち戴冠式列席の爲め來朝せる外國皇族殿下並びに外國代表の特別使臣、アスキス首相夫妻、デヂンシャア公爵夫人、ミントウ伯爵夫人、我が皇族殿下、及び外務省係員一同なり。

ルイス・オブ・バッテンベルク殿下、皇女殿下、及びファイフ公並に同令孃は缺席されたり。

サア・エドワアド・グレイは皇后陛下の御手を攝り參らせて晩餐會場へ御案內申し上げ、皇帝陛下には獨逸皇太子殿下と御同伴遊ばされ、以下の賓客是に續き、行列をなして宴會場へ進めり。

當夜はグレナディール・ガアヅ軍樂隊間斷なき演奏ありき。

晩餐は六個の大圓卓と二個の長方卓によつてなされ、卓上には各種の生花及び銀器の裝飾、實に目も覺むる許りなりけり。

皇后陛下、サア・エドワアド・グレイ及び約二十名の賓客は第一卓子に、皇帝陛下、獨逸皇太子殿下及び約二十名の賓客は第二卓子に御着席遊ばされ、コンノウト殿下には第三卓子の主客となられたり。首相並にアーサア殿下には第四卓子に賓客と席をつらねられ、其の他當夜の宴會を通じて適宜なる配置行なはれたり。

尙、出席者は、獨逸皇太子殿下並に同妃殿下、土耳古ヨウスソウル・イッエヂン・エフエンヂ殿

下。オウストリア・ハンガリイ、チヤール太公殿下。ロシア・ボリス太公殿下。スペイン、ドンフエルナンド皇太子殿下。日本伏見宮殿下。ギリシヤ皇太子殿下、並に同妃殿下。ルーマニア皇太子殿下並に同妃殿下。セルビア、アレキサンダア殿下。デンマアク皇太子殿下。スエーデン皇太子殿下及び皇女殿下。ブルガリア皇太子殿下。モンテネグロ、ダニロ殿下、及びミリツツア女王殿下。シヤム皇太子チヤクラブホンス殿下。等各國皇族殿下を始め各國使臣卽ち、アメリカ合衆國、ジョン・ヘイス・ハモンド氏夫妻。(中略)日本、海軍大將東郷伯、陸軍大將乃木伯等なり。

一九一一・六・二四　デイリイ・ニユウス誌

スピセツトに於ける觀艦式の壯觀

特派員イ・エフ・ナイト手記

有史以來、昨日スピセツト港に於て取り行なはせられたる戴冠紀念觀艦式に於けるが如く强力なる艦隊の蒐集せられたる事未曾有なり。

總計百萬噸を超ゆる英國軍艦百六十七隻と、我等の帝王の戴冠を祝賀の爲め來訪せる十八隻の外國軍艦は、觀艦式用海國の示せるが如く、歷史的投錨地の十八エイカアに亘つて碇泊し、十一海里の一列を以て平行し、サウスシイよりサザンプトン灣の殆ど入口に至る地域を占領せり。

是正に偉大なる海軍力の巨大にして然も印象的なる示威にして、加之、余はスウダン號甲板上に於て、一佛蘭西人の『此の巨大なる艦隊は全英海軍の三分の一或は四分の一に過ぎず。』と一友人に語れるを耳にしたり。

昨早朝、四十輛よりなれる特別列車は乘客を滿載し、ヲータアローを出發してサザンプトンに向ひ、一方ギクトリア、ボーツマス間に於ても特別列車頻發せり。遊覽船上より或は本土並にエイト島上より、數十萬の觀衆は此の觀艦式を見物せんとしたり。ヲータアロウ發の特別列車のサザンプトン船渠に到着後、我等は直ちにオウ・ピイ會社の汽船スウダン號に乘込たり。然れども船員のストライキ起りたる爲め、觀艦式拜觀者を登乘せしむべき數多の汽船出帆不可能となりたるに、獨り我がスウダン號に在つては此の危急に應ぜんとしてオウピイ會社はロンドンより東印度水夫を派遣したりし爲め、幸に此の不運を脫れたり。

式前の拜觀

スウダン號はサザンプトン灣を下航してソレントに出で、然る後、ラムブルス・バンクを廻航し、カウを通過し、我等は大艦隊に向つて進航せり。遠くより是を見れば、艦の鐵壁のみ見えて艦體と艦體との間には何等の空地さへも見えず、ウェイト島より本土に亘り、英蘭水道以東を封鎖したり。然も我等の是に近付くや光景一變せり。我等艦隊の西側を航するや、平行に並びたる軍艦の作りたる長き堂々たる大通の遠く續きたる、殆ど無限の感ありて、遠景に於て交る一點は今日の天氣晴朗なるにも拘らず、終に見る能はざる程なりき。正午に至り巡視偵察船の觀艦式場内通過後、各種の汽船は此の堂々たる大通の航行を許され、海上に於ける拜觀者は總て大戰艦、巡洋艦、驅逐艦、潛水艇、其の他の軍艦に接近して見物するを得たり。即ち海上の宮殿の如き汽船及び大なる三檣帆船を始め三噸許りなる短艇小舟に至るまで、汽船、遊覽船、及び無數の快走艇は群をなして軍艦によつて作られたる水路を靜かに巡航したり。

溢れたる活氣と色彩の妙

かゝる光景は如何なる狀態の下に在つても、その美觀たるを失はずと雖も、昨日の天候は此の場の光景をして終生忘れ難く、不可思議にも亦壯大なるものとなしたり。海上に些の漣さへなく、軍艦旗靜かに垂るゝ靜穩なる天候は、かゝる觀艦式には、似合しからずと雖も、烈風巨浪の日も亦過ぎたるの及ばざる感あり。降雨又は濃霧の日は是を以て最惡となす。然れども、我等は最も天候に惠まれたり。西南の微風ソレントを吹いて遠く陸上より來り、然も浪高からずして、海は白波を立てゝ快く跳れり。拜觀の船の揭げたる船旗は空中に翻飜す。實に活氣に滿ちたる光景にして、更に色彩の妙を加へたり。空は土耳古玉の色に似て、烈風の來らん事を兆し、片々たる白雲の雨を含めるを、晴紫色に變じつゝある深藍の海上に吹き來る。白赤の帆と色彩の旗は白日の下に輝き、空氣は甚だ澄明にして、本土に在る白堊の斜面の頂よりエイト島の脊梁をなす小高き丘に至るまで、兩岸に起伏する綠の耕地の隅々まで一目に臨むことを得たり。海上より見るにライド及び是に面せる錨地の光景頗る美麗なり。市街には裝飾施され、陸地の蔭に碇泊せる數多のヨットは萬國旗を揭げたり。此の錨地は南西の風を避け得て、海上より觀艦式並に夜のイルミネーション見物には最適の場所なり。

艦列内を航行す

スウダン號は靜かに艦列内を航行したり。最初我等はD列及びE列間を進みたるに左手には驅逐艇母艦、次いで驅逐母艦、並に不氣味なる水雷母艦在り、右手に整列せる定期船中、乘客の觀艦式拜觀を得んとして紐育への出發を延期したる佛蘭西大西洋横斷定期船ラ・サヴォア號碇泊したりき。爰に注目に價するは英蘭水道を越え數多の佛蘭西船が、觀艦式拜觀の乘客を滿載して來航せし一事にして、艦列内を通航するに當り、我が心からなる訪問者は熱心に然も甚だ打ち興じたるもゝ如く見られたり。我等は此の軍艦街を進航すると共に、第三及第四分艦隊の中將旗を飜へせるアフリカ艦を含める、マヂエスチック艦、フォーミダブル艦、キング、エドワアド艦よりなれる第三分艦隊を通過し、更に太西洋艦隊に屬する艦列内に入りたるが、プリンス・オブ・エイルスは其の旗艦なり。更に行航を續くると共に、我がスウダン號は英國海軍最强の戰艦、即ち本國艦隊の中第一第二分艦隊の十六隻よりなる戰艦の傍に到れり。此の有力なる戰艦中、最少なるも一萬六千噸を超え、最大なるは彼のネブチューンにして、その排水噸數實に一萬九千九百噸、我本國艦隊の司令長官旗を掲げたり。更に進みて、十一哩の艦列の最終に於て、第一第二巡洋艦分艦隊に屬する巨大なる裝甲巡洋

艦の目前に來れり。インテフィータブルは一萬八千七百五十噸の排水噸數と四萬三千馬力の機關力とその怖ろしき裝甲とによつて知られたる、此の分艦隊中第一の巨艦なり。我が國の護りなるかゝる嚴然たる灰色の鋼鐵艦の間を通過するに當り、我等は觀艦式拜觀の英國人に取りては單に誇りのみならず、壯重なる氣分の湧起するあり。然も艦上は總べて灰色にして嚴然たりとは云はず、我等の伊達な水兵は、此の度に限り知人を艦上に招くを許されたれば、各艦の甲板は美くしき婦人の夏衣に輝やかしくも美くしき情趣を添へたり。

外國軍艦

戰艦及び巡洋艦の艦列外に出でたるスウダン號は方向を轉換し西方指定錨地へ向けて航行を始め、G及びH艦列内を、右手には來訪中の外國軍艦、左手には貴族院議員及衆議院議員及び各植民地よりの賓客其の他の乘組める定期船の投錨したるを、一々に巡覽したり。然れども此等衆議院の名士も、甲板上に整列したる水兵士官の現るるに及んで殆ど興味を失ひたり。即ち是等が外國軍艦にして、しかも我等が是に接近して通航したる故もあるべし、我等の眼は殆ど是に奪れたり。日本、アルゼンチン共和國、ノールエイ、アメリカ合衆國、イタリイ、アウストリア・ハンガリ、ドイツ、ロシア、フランス、チリイ、オランダ、支那、デムマアク、トルコ、

スペイン、及びスエーデンの諸國は我が觀艦式にその軍艦を派遣したるなり。此の光景こそは、最早文明國間に鬪爭なく、軍備縮少の時到れりとの信條を公言する一派の人々に示したき心地切なり。スピセット港碇泊中の四外國軍艦に對し、此の派の人々は如何なる感想を抱くや。第一は合衆國軍艦デラエア號にして、排水總噸數二萬噸、我が何れの軍艦よりも巨大にして、エッフエル塔に似たるマストを有し、新鋭の戰鬪具を完備したり。次に獨逸最近の建造に係るフォン・デル・タン號は、我が何れの巡洋艦よりも巨大なる裝甲巡洋艦なり。更にアウストラリアの新造艦ラデツキイ號に至つては、着々その威力の增加を計りつゝある同國の海軍力を思はしむ。最後に支那巡洋艦ハイチ號は我が近海に在つては甚だ見馴れず珍らしき青龍旗を飜して碇泊したり。是を見る時、眠れる獅子支那が日本の前例にならつて、その陸海軍力の充實に務めつゝあるを感ぜざるものあらんや。他日支那の軍備全く整へるを豫想する時、歐洲に於ける軍備縮少論の甚だ愚劣なるを知らん。然もスピセット港に派遣せられたるロシア軍艦ロウシヤ號は日露の海戰に於て大損害を蒙りたる艦にして、是を見る時、平和時に於ける準備を缺ける國民の一旦緩急の場合に受くるものゝ如何なるかを了解するに難からずとせず。

皇帝陛下御到着

スウダン號マザア・バンクに投錨するや、政府の賓客を乘せたる他の汽船と共に、觀艦式開始前の少時間を利用して甲板に於ける午餐會催されたり。正午各旗艦より合圖の大砲は發射され、同時に各種の旗を揭げ始め、瞬時にして滿艦數色の旗を以て時ならぬ虹を飾り、偵察艇は遊弋を開始して掃海につとめたり。十二時三十分を少しく過ぎし頃、遠く大砲の響を聞けり。我等は是によつて既にボーツマスへ御到着遊ばされし皇帝皇后兩陛下が御召艇アルバアト・アンド・ギクトリア號へ御乘船遊ばされしを知れり。而して此の大砲は、我が大英軍艦中最も有名なるネルソンのギクトリア號が二十一發の皇禮砲發射の合圖なりき。二時三十分、我等は一層大いなる響を耳にしたり。即ち御召艇の艦列中に入りたるものにして、全艦隊の檢閲は、愈々爰に開始せられたるなり。

祝砲三千の大砲より發せらる。

約三十分後、陛下御一行がE及F艦列、即ち我が戰艦並に巡洋艦列、及び外國軍艦列の南方を西方へお通過の際、我等は目近く是を拜觀したり。御一行の船列の約一哩の前方を四隻の水雷艇先行し、而して、トリニチイ、ヨツト、アイレン號。船首に軍艦旗、メイン・マストに皇室

旗、船尾に國旗を掲げたるアルバアート・アンド・ギクトリア號。皇室用艇アレキサンドリア號。海軍大臣登乘のエンチヤントレス號。ボーツマス司令官登乘のファイアー・クキン號の順序にて進行せり。アルバアト・アンド・ギクトリア號、艦列に近づくや、同艇よりの信號により外國軍艦をも合して三千の大砲口は一時に發射せられたり。御召艦の各艦側を通過するや、水兵は歡呼の聲を擧げ、軍樂隊は國歌の吹奏をなしたり。我等は、遠くスウタン號上より是を臨みしのみなれば、此の御行列の快走艇上に何人の御登乘あるやを親しく拜見するを得ざりしも、思ふにその大英皇族の各殿下なりしこと疑ふに豫地なし。

艦橋上の皇帝陛下

されど我等は、皇帝陛下がアドミラルの御正裝にてアルバアト・アンド・ギクトリア號船橋上に御起立遊ばされ、同艇の各戰艦側を通過する毎に、一々あの歡呼に御答禮遊ばさるゝを遠く拜するの榮を得たり。御一行は再び西に轉じCD艦列内を通過し、更に西側FG艦列内を進航し、佛蘭西戰艦ダントン號の傍に我が總司令官サア・アーサア・モアーの乘組める旗艦ロード・ネルソン號と並行して投錨したり。斯して此の偉大なる觀艦式の壯觀は無事完了したるも、我等は、プレミヤア提督及び海外領土の名士顯官が此の機に參列するの榮を得

たるを喜ぶと共に、インド皇族及インドの軍隊の前に、母國が全帝國の護りとして備へたる海軍並にその乘組員が如何なるものかを如實に示すを得た事を喜ぶものなり。御召艇の碇泊中、陛下にはスピセットに於ける艦隊の全將官及び外國將官並に將官の乘り組まざる外國軍艦長を親しく御引見遊ばされたり。五時半、アルバアト・アンド・ギクトリア號甲板上に於ける御謁見相濟みたれば、直ちに拔錨、御召艦はボーツマスに向けて歸途に着き、皇禮砲は再び全艦隊より起れり。

一九一一・六・二六　モーニング・ポスト誌

東伏見宮殿下の御演說

昨夜、ホテル・メトロポール、ホワイトホール・ルームに於ける日本大使司會の日本協會例會は、東伏見宮殿下並に同妃殿下を正賓として開催された。殿下並に妃殿下の御健康を祈る乾盃終るや、殿下には日英兩國の同盟に關して一場の御演說を遊ばされた。

因みに同夜の出席者は、加藤氏夫人。東郷海軍大將。乃木陸軍大將。戸田伯爵。ロン

ドン市長。サア・クラウド・マクドナルド。ロード・ルーヴテイル。サア・トレバア・ロウレンス。日佛協會祕書長エドワアド・クレバアリ氏。アーサアダイオシ氏。市會議長ダブルユ・クルードスン氏。サア・ヂヨウヂ・チヤツブ。サア・アルフレツド・タアナア陸軍少將。サア・アーヂバルド・ダグラス海軍大將。アール・ホルベツチ陸軍中佐等なり、

東伏見宮殿下には御演說中、左の意味を述べさせられた。

『皇帝皇后兩陛下御戴冠の御儀に參列の爲め當地を訪問して以來、兩陛下は申すに及ばず、其の他到る處に於て、我等は多大なる歡迎を受けた。此の憶ひ出は最善の國への土產となるであらう。今宵、日英協會の晩餐會に招待を受けたるは大變嬉しい事で、同協會が日英兩國の友誼促進の爲めになした處は頗る大にして、今や兩國の同盟を見るにさへ到つてゐる。殊に今宵の歡迎に至つては、兩國の友誼の實證と見るべく、身に泌みて永く思ひ出の種ともならう。云々』（喝采）

一九一一・六・三〇　タイムス誌

東郷海軍大將の演說

ロンドン。七月一日、ヲーセスタア協會の晩餐會に於て、東郷大將をヲーセスタア出身のオールド・ボイスに向つて左の演說をなしたい。

自分は此の老練習船との關係を曾て忘れることが出來なかつたが、今、永く胸に抱いた希望を果し、ヲーセスタア出身の諸子に見えるを得た事は欣快是に過ぎない。然も船長スミス氏の死去に關しては、何とも言葉がない程で、船長が戰爭中に送られた手紙は、自分を慰藉し鼓舞して呉れたのであつた。何となれば其等の手紙は我が第二の故郷から來たものであつたからである。

一九一一・七・二　ステイツマン誌

東郷乃木兩大將、少年團を檢閲す

東郷及び乃木兩大將は今朝キチナア卿の率ゆる少年團の檢閲を行ひたり。キチナア卿及びバーデンボウエル大將も參列したり。乃木大將は少年團員にむかひ日本語にて訓示を與へたりき。

次いで乃木大將はアルダアショットの兵營を訪問し同處に於てスミス・ドリン大將と會見したり、

昨日日本人會は東伏見宮並に同妃殿下を正賓としてボタニック・ガアデンに於て園遊會を催したるが、ロンドン駐在日本大使加藤氏は同協會々長として斡旋し、東郷大將、乃木大將、サア・クラウド・マクドナルド等々來會者多數に上りたり。

一九一一・七・五　モーニング・ポスト誌

バロウの祭、日本海軍將校の訪問

島村海軍大將並に日本戰艦及び偵察巡洋艦利根乘組みの士官及び水兵バロウ訪問の爲め同所の主要道路は悉く萬國旗其の他を以て飾り附けを終り、公會堂も數百の旗を揚げて

歡迎の意を表せり。早朝より天氣頗る晴朗なりしも九時より十時の間一時曇り始めたるに一時間後には再び日光を見るに到りたれば、概して天候には惠まれたりと云はざるべからず。

降雨の爲め二週間延期となり居たる病院の例年の示威行列も擧行せられ戴冠式當時行はれたる『六月の薔薇』と題されたる野外運動も歡迎の意を込めて再び五千の兒童によつて演ぜられたり。行列は午後に至つて擧行されたれども、午前中既に近郷近在よりの見物人市街に雜闘して、アベイ街、デューク街、マイケルソン街に於ける造花の花環の飾り附けあるアーチの周圍に群集したり。

公會堂の周圍は電燈を以て輪郭を取られ、尙歡迎の文字をも電燈を以て表し、夜のイルミネイションに供へたり。且、六百個の電燈は常綠葉を以て包まれ、街上に揭げられたり。

戰艦鞍馬並に巡洋艦利根は今朝ブリマウスよりモアキマムブ灣へ到着せり。鞍馬はリユーンド・イープに投錨せるも、利根はビール及ヂルネイ運河を通過してバロウ・ドツクに到着し、曳船を以て、十時三十分、デヴォンシャア・ドツク碇泊中の我がダルマウス艦側に至り投錨せり。

今日のプログラムは市長が市の書記長及び同接待員を同伴して、島村大將並に士官一同

に挨拶を兼ね出迎ひの爲め公會堂を出發したるに始まれり。艦上に於ける會見は公式のものにして、書記長の外、何人の立會ひをも許さざりき。挨拶交換後、市長は島村大將、士官及び乘組員一同を、公會堂に於ける一時よりの歡迎會に招待したり

東郷大將は今夜八時にバロウ到着、公會堂に於ける市民の歡迎會に出席の筈にして、市會議員並に名士連多數招待されたり。明朝、日本士官の一行はレイク地方の見物をなし、月曜日にはギカア造船所に於て、目下建造中の日本巡洋戰艦の檢閲を行ふ筈なり。特にバロウ見物の日本士官の爲め、美麗なる裝飾を施したる自動車の用意整ひたり。

一九一一・七・八　ランカシヤア・ポスト誌

日本海軍の勇將、ヲーセスタア訪問

キング・ヂョーヂ五世陛下戴冠式參列の爲め日本代表の一員として目下來朝中の日露戰爭の有名なる勇士東郷海軍大將は、火曜日テムズ・ノウチカル・カレッヂ練習船ヲーセスタアの號を訪問したるが同船上に於て、一八七三年大將は一見習士官として、早期の海軍教育を受

けたるものにして、此度の訪問は大將にとり因緣の淺からざるものあり。

此の訪問は專ら私的に行なはれたるにも拘らず、大將來着の報傳はりし爲め、所々に歡迎の日章旗を立てられて翩飜と風にひるがへれり。

大將はロンドンより自動車を疾驅し、午前十時カウヴェイに着したるに是に立會へる群衆は、大將が自動車より下車の際、悉く脫帽して敬意を表したり。副官谷口大佐、及齋藤中佐を同伴せる大將は、十六人の漕手の乘組める司令官用の短艇に乘込みヲーセスタアに向ひたるに、短艇の練習船に近くや、同船の檣頭に日章旗揭げられたり。其の乘船するやウイルスン・バアカア大佐及び同夫人、並に幕僚諸士の歡迎を受けたる一行は、直ちに上甲板に整列せる乘組の見習士官の査閲を行ひたり。大將は萬事に頗る滿足の意を表し、而も見習士官等の未だ學校へ引上げざる以前に於て、是に向ひ一場の演說をなしたり。『諸君――余は今より約三十餘年前、目下の諸君と同樣に、此の練習船上に在つて海軍々人たるべき道を學んだヲーセスタアのオールド・ボーイスの一人であります。今日、此の親愛なる船上に於て、諸君と相見えるを得たのは、實に喜ばしい次第で、諸君の快活にして愉快なる態度を見る時、諸君の將來も亦此の通である事を信ずるのであります。諸君の將來の御成功を祈ります。云々』

次いでキルスン・バアカア大佐は、東郷大將が此の練習船の爲めにトロフィイを贈られたる由報告をなしたるに、見習の士官一同熱狂して歡呼の聲を擧げたり。

大將の訪問は一時間半の長きに亘り、船の隅々に至るまで詳く檢閲を行ひたるも、萬事手ぎはよく整頓されたるを見て感歎の聲を發せられたり。而して、大將歡迎の爲め來船の人々の中に、大將が見習士官當時の船長及び同期の見習士官ダブルユ・エイ・モルガン氏を見出すに及んで東郷大將の驚喜は非常なるものなりき。

大將下船の際は見習士官の心よりなる見送りを受け、大將登乘の短艇の影微かとなるに及ぶまで士官等は歡呼を續けたりき。

一九一一・七・八　サイデンハム・ガセット誌

東郷大將レイキ地方に來る

東郷大將は鞍馬及び利根乘組の士官を伴ひ、昨日レイキ地方を訪問し、ウインダアミア湖に一日の舟遊を試みたり。グラスミアに於て晝餐を喫したる後、ラヅテースの舊宅及び其

の他の名所古蹟の見物をなしたり。

一九一一・七・一〇　エストミンスタア・ガセット誌

名士陸續訪問

水曜日グラスゴウに於ては二名士の訪問を見るべし。卽ち彼の有名なる日本海軍の勇者伯爵東郷大將は島村中將を同伴して、ロンドンより到着の筈にして、加ふるにテイル・オブ・ザ・バンクに於ては日本軍艦二隻の來訪をも見るべし。

勿論、兩將軍に對する市民の絶大なる歡迎あるべく、一方乘組の士官及水兵一同も、同日グラスゴウに到着し市廳に於て饗應を受くる豫定なり。

ニユー・サウス・エイルス首相兼出納官エス・テイイ・ムゴウアン氏も水曜日には同市を訪問し、コオポレイション主催の午餐會に出席の豫定なり。

一九一一・七・一〇　グラスゴウ・レコド誌

東伏見宮殿下御歸國遊ばさる

東伏見宮殿下並びに同妃殿下には、日曜日御歸國の途に着かせられたり。アーサア・オブコンノウト殿下は皇帝陛下御名代としてリヴァープール・ストリイ停車場へ御見送り遊ばされたり。同停車場には、サア・クラウド・エム・マクドナルド、ロード・コールブルック日本大使夫妻、其の他見送り人多數を極めたり。

一九一一・七・一〇　タイムス誌

東郷大將

目下バロウに在る東郷大將並に日本軍艦乘組士官は、昨日ギカア・ネイバル・コンストラクション・工場を訪問し、同所に於て日本政府の依頼により製作中の新巡洋艦の視察をなし、午後モアキヤム灣ライトニングノール碇泊中の巡洋艦鞍馬上に於て、招待會催され、島村中將の主人役として諸事斡旋をなしたり。

來る火曜日、東郷大將はニユウカツスル市を訪問し、サア・アンドリユウ・ノーブル氏の客として木曜日まで同地に滯在の豫定なり。

東郷海軍大將訪問す

グラスゴウ市到着

一千九百四年より五年に亘る日露戰爭當時、日本海軍を指揮して勇名を馳せたる日本海軍總司令官伯爵東郷海軍大將は、昨夜グラスゴウ市に到着したるが當市に於て二日間滯在の豫定なり。此の名士の一行はロンドンより汽車の旅を續け、午後七時五十五分、中央停車場に到着したるなり。當夜東郷大將の來着を歡迎の爲めプラットホームに參集せる多數の群集は、大將の下車に際し歡呼の聲を以て是を迎へたり。當市駐在日本領事アイ・アール・ブラウン氏は、大將歡迎の辭を述べ當市在住の日本人も是にならひたり。一行がプラットフオーム上を歩行し始むるや、觀衆の擧げる歡呼の聲頗る喧しく、大將は片手に帽子を打ち振りつゝ、當市滯在中の本據たる中央停車場ホテルへ入れり。一行の顏觸れは島村中將、英國政府より案内役任命せられたるダンダス少將、イーディー大佐、及び東郷海軍大將副官谷口

一九一一・七・一〇　タイムス誌

中佐等なり。

大將當市滯在中の用務頗る繁多にして、本日は市廳訪問後、河を下航し、沿岸の諸造船工場を訪れ、次いで一行の乘り込めるコオボレンイョンの持船シィルドホール號は、更にテイルオブ・ザ・バンクに下航し、當所に碇泊中の日本軍艦鞍馬及び利根の傍に投錨し、クライド練習船エムブレスを訪問し、然る後ロウに上陸なし、同所に於て、特に一行の爲めに差し向けられたる自動車に便乘して、ロッチ・ロマンドサイドに到り、グラスゴウ歸着の豫定なり。本日當市訪問のニュウ・サウス・エイルス首相兼納入官ジェイムス・エス・ムゴウエン氏も一行に參加する筈なり。

明日の訪問豫定は、アニイスランドに於けるバア・テンド・ストラウス工場、パークヘッドに於けるベアモア鑄鐵工場、タルムアーに於けるベアモア造船工場の參觀を終へ、コオボレイション主催の博覽會場に到り、アソール・レストランに於けるコオボレイション主催の晩餐會に出席の豫定にして、東郷大將は四時三十分頃博覽會場入口、ケルビンクラブに到着し、會長エイ・エイチ・ベティグリュウ氏並に關係者一同の出迎へを受くるものと豫定さる。東郷大將來訪に關し、ロード・プレボストは、今明兩日中、市内の各建築物は出來得る限り多くの旗を掲揚すべき旨を公表したり。

左に示せるは本日の東郷大將訪問豫定なり。

午前十時。セントラル・ステイション・ホテル出發。市廳に向ふ。

同、十時十五分。市廳出發してブルーミイロウに向ふ。

同、十時三十分。ブルーミイロウ到着。コオボレイション持船シィルドホール號に乘船。下航。クライド・バンクに於けるヤロウ造船所、並にブラウン造船所を訪問。

午後一時。ブラウン造船所にて晝餐を喫す。

午後二時三十分。ブラウン造船所出發、下航を續け、テイル・オブ・ザ・バンクに碇泊中の日本軍艦側に至り、然る後クライド練習船エムブレス號甲板上に於て催さるゝお八つの會に出席。

午後四時三十分。エムブレス號出發。ロウに向ふ。同地にて自動車に登乘し、ルス、タアバアト、アーロチヤア、キスルフィールドを經てグラスゴウに歸着。

午後八時。グラスゴウ、中央停車場、ホテルに於て晩餐。

日本水兵接待

東郷大將來訪中の二日間、碇泊中の日本軍艦二隻の乘組員接待の爲め手配は全く頓へら

れコオボレイション鐵道部に於て、興味深き觀光のプログラム作製されたり。今明兩日、グリノツクよい六百五十人の海員は、各日午後二時、セント・エノツクステイションに到着し、一同セント・ギンセント街及びレンフイールド街の一部を行進し、同所にて電車に乘り込み二時十五分、ギンセント街を出發し、市中各所を廻遊の豫定なり。巡廻の豫定左の如し。

午後二時十五分。セント・ギンセント街出發、エリントン街を經て、バトルフイールドに向ふ。

午後二時三十六分。バトルフイールド出發、カスカアド街、グラスフォード街、ニユウ・ナイル街、カウキヤドンスを經て、師範學校に向ふ。

午後三時。師範學校出發。ニユウ・シチイ街、グレイト・エスタン街を經、アニイスランドに向ふ。

午後三時二十分。アニインスランド出發。博覽會場に向ふ。

午後三時四十分。博覽會場到着。

午後六時十分。博覽會場出發。スウチイホール街、レンフイールド街、セント・ギンセント街、バチヤナン街を經て、セント・エノツク・ステイションに向ふ。

博覽會場に於ては、一行場内を見物後、暫時興行地域内に於て、各種の娯樂物の見物をなし、

ボピユラア及びアソール・レストランに於て茶菓の饗應にあづかり、六時十分電車にてスーチイ街、レンフイールド街、セント・ギンセント街を經てバチヤナン街に到り、當所より、徒歩にてセント・エノツク・ステイションに行進す。是兩日のプログラムなり。尚、グラスゴウ・コオボレイション鐵道部の吹奏音樂隊は、兩日に亘り來訪水兵と行を共にして市内各所を巡廻するの豫定なり。

日本軍艦グリノツクに到着

日本軍艦鞍馬及び利根は昨日午後クライドに到着テイル・オブ・ザ・バンクに投錨せり。グリノツク市長ムミリアン、書記官ロリン・マクキユロツク氏、ベイリイ・タマス・ミチエル氏、ハノーバア・トラスト副會頭エイ・エム・リンドセイ氏、支配人オグデン、タイロア氏、ハノーヴアー・トラスト祕書ヂエイムス・リイド氏、港務長ロバアト・タイト海軍大佐、警察署長ヂエイ・ダブルユ・アングス大佐、關稅官メイソン・カムバアランド氏は直ちに日本軍艦を訪問し、歡迎の辭を述べ、碇泊中港内の自由權を與へたり。

市長ムミリアン氏は、兩日中、最も都合よろしき時、日本士官一同を市政會官の午餐會に招待せんと申出に、日本士官側に於ては時間の許す限り出席致し度き旨を對へたり。

東郷海軍大將

一九一一・七・十二　グラスゴウ・ヘラルド誌

昨日クライドに於けるジョン造船所を訪問せる東郷大將は、興味深き儀式を執行したり。卽ち、水壓力機を以て世界最大の汽船アクイタニア號の基鋲を打ち込みたるなり。

一九一一・七・一三　デイリイ・ニユウス誌

東郷伯スコツトランド訪問

東郷大將は昨朝グラスゴウ、クキーン・ストリート停車場を九時發の列車に連結せる展望車に登乘して、セント・アンドリウスへ向け出發せり。因に同列車は、大將が英國海軍の根據地ロシス訪問を容易ならしむる爲めイムバアキイシングに於て特別停車をなしたり。ダ

ンダス少將、谷口中將、齋藤中佐を同伴せる大將は、紺の春廣に山高帽を戴き、手袋を穿ち、ステッキを持ちたり。發車前二十分、同停車場に到着したる大將は、當日休日なりし爲め、地方へ旅行せんとする老若男女の雜踏を好奇の目にて眺めつゝ、待合ひの時間を消したり。見送りの爲め二名の日本青年紳士を同伴せる日本領事エイ・アール・ブラウン氏は鐵道地方監理局長ジエイ・シイ・クリスチイ氏を大將に紹介したれば、大將は心よりの握手を交したり。乘車にさきだつて、東郷大將はブラウン領事に別離の挨拶を述べ、且つ當初の訪問は頗る愉快にして、滯在中受けたる市民の歡迎は實に感銘すべきものありと告げたり。發車するに及んでは、展望車の窓際に席を占めたる大將は立ち上り數度に亘つて敬禮し、見送人の帽子などを打ち振るに對へたりき。

昨朝、日本艦隊の島村中將並に二士官はグリノック市政會館を訪れたるに、市長ムミクアン氏不在なりければ、書記長コリン・マクキユロッチ氏代理として面會をなしたり。中將は當市訪問の愉快なりしを述べて謝意を表し、マツクキユロッチ氏は是に對ふるに市民の好意を以てせり。

一九一一・七・一五　グラスゴウ・ヘラルド誌

東郷海軍大將ロシスを訪問す

東郷海軍大將並に其の幕僚の一行は十時頃インバアキイに到着せり。此の名士の一行はクキーンスフエリイ、インチガアビイ家のダンダス少將及び特に海軍省よりロシス海軍造船廠の參觀を許可されたる日本大使館附き海軍武官を同伴せり。停車場に於ては出迎ひに出でたるロシスに於ける海軍省監督官エキザム氏の歡迎を受け、且つ一行の到着を見物に集りたる群集の歡呼を浴びたり。海軍造船事務所に於て、見物豫定の熟議に暫時を費し、請負會社の自動車に登乘して出發せり。尚此の一行に請負會社長アレキサンダーキッブ氏も參加せり。

東郷平八郎全集　第二卷　終

東郷平八郎全集　第二卷

著者　小笠原長生

發行者　下中彌三郎　東京市麹町區下六番町一〇

印刷者　濤川薫　東京市麹町區下六番町一〇

昭和五年七月十五日印刷
昭和五年七月廿三日發行

（非賣品）

發行所　東京市麹町區下六番町一〇　振替東京二九六三九番　株式會社　平凡社　電話九段一三三六四七五番　六六四七四番

共同印刷株式會社印刷　村田製本